歐人の眼に映じたる日露戰爭

中央公論

第十九年第五號

内容

THE CENTRAL REVIEW

明治卅一年一月廿九日第三種郵便物認可
毎月一回一日發行　明治卅七年六月一日

新刊廣告

法學博士　有賀長雄著

戰時國際公法

上卷　總論及陸戰
下卷　海戰及中立

全二冊脊皮上製
一千二百餘頁
上卷金一圓四十錢
郵稅金十四錢
下卷金一圓六十錢
郵稅金十八錢

著者は十數年來陸軍大學校に於て戰時國際法を教授し二十七八年の戰役には第二軍司令部の顧問として戰時公法の實地を躬踐する所多く後又海牙の平和會議に參列して陸戰の法規慣例に關する規則の議定に與り且屢赤十字萬國總會に出席して列國國際法學者と議論を上下す蓋し斯學に關しては我國隨一のオーソリテーなり著者が此書を著すや近世の著者が悉く之を參照し又日淸戰役は勿論**日露開戰以後**に於て發生したる**新事實**をも加へたれば本邦戰時の公法に關する著述として本書の外他にあらざるべし殊に現下續發する國際法上の問題を解決するに足るべく眞に**戰時**の**實典**たり

●露國マルテンス原著　法學博士中村進午譯
國際法
全二冊脊皮紙數八百餘頁
正價金四圓＝小包料十五錢

●法學博士中村進午著
平時國際公法
全一冊洋裝紙數二百餘頁
正價金八十錢＝郵稅金八錢

發行所　東京牛込早稻田　早稻田大學出版部
發賣所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

◉講習生募集◉

◎高等女學校入學豫備科

（官立府立ノ高等女學校ニ入學ヲ希望スル者常ニ頗ル多キヲ以テ第一學年ニ在テハ選拔試驗ヲ行ヒ其以上ハ入學試驗ヲ行ハル故ニ入學準備ヲナスノ必要アリ）

◎女子師範學校入學豫備科

（府立女子師範學校ニ入校ヲ許サルヘキ者僅ニ六十名ノ募集ニ對シテ本年ノ如キハ實ニ三百名以上ノ希望者アリシ故ニ必ス入學セント欲スル者ハ大ニ其準備ヲナスベシ）

◎技藝科（編物、組系、裁縫、家政）

（女子タル者ハ常ニ女性ニ適シタル手藝ヲ覺ヘ置キテ家內ニ於テ或ハ他ノ依賴ニ應シテ之ヲ活用スルコト最モ必要ナルベシ）

◎講習日時

（每土曜日午後四時半ヨリ同七時半迄
每日曜日午前九時ヨリ午後四時迄）

◎講習料

各科授業料一ケ月金壹圓ツヽ、入學料金三十錢

◎講習會場

東京府教育會教室（東京市神田橋外）

講師氏名（いろは順）

東京府第一高等女學校長 伊藤貞勝君
共立女子職業學校教師 豐原繁尾子君
東京府第一高等女學校教諭 中村覺之助君
東京府第三高等女學校長 小林盈君
東京府第一高等女學校教諭 新開美枝子君
女子高等師範學校教員 森本義子君
京京府女子高學師範學校教諭 東京府第三高等女學校教諭 岩本ふく子君
東京府女子師範學校教諭 東京府第二高等女學校教諭 岡田ふみ子君
女子高等師範學校助教授 谷田部じゆん子君
東京府教育會附屬家事科教員傳習所講師 三谷きみ子君
女子高等師範學校助教諭 平田とし子君
會監 東京府教育會幹事長 日下部三之介君

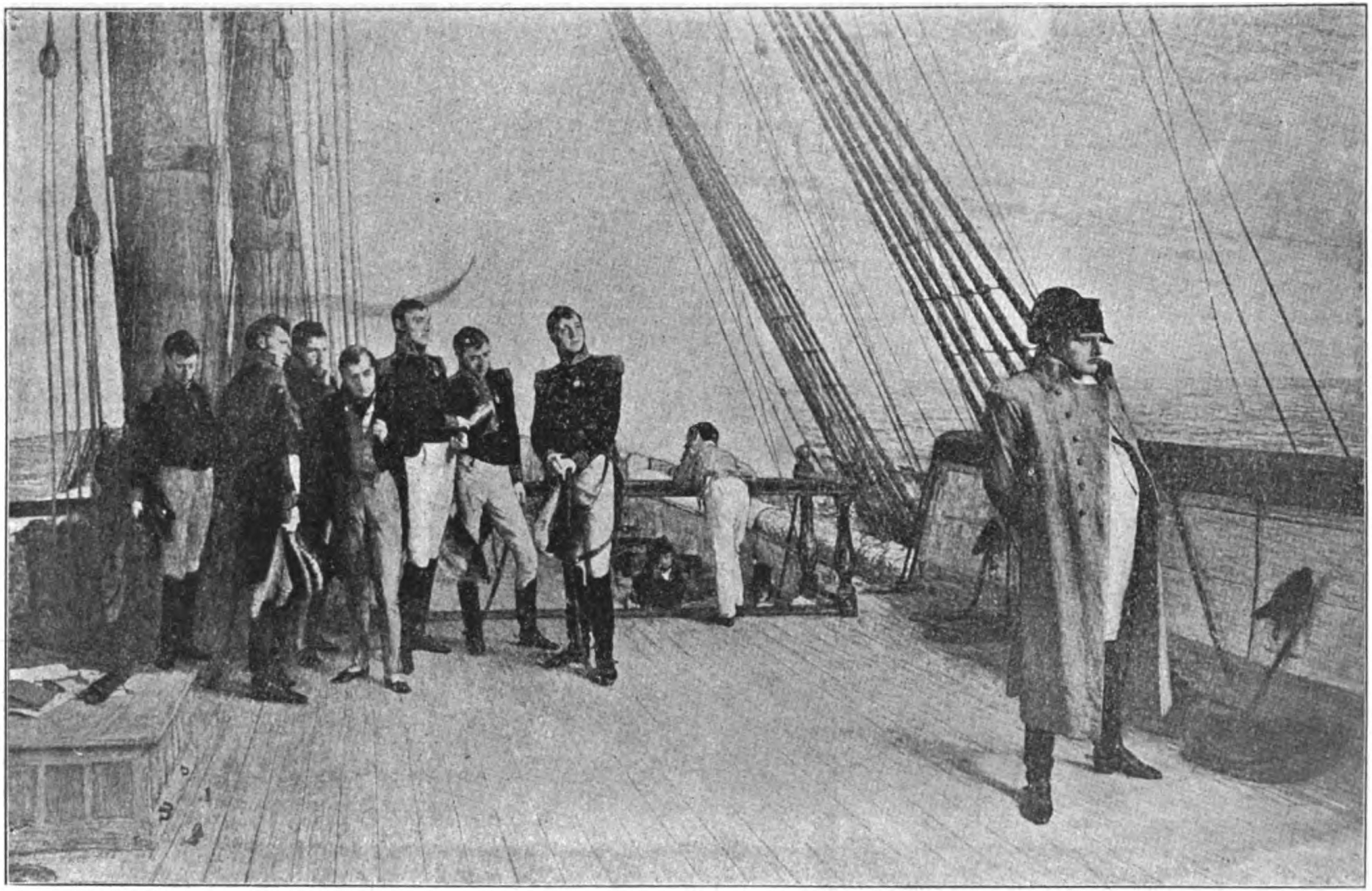
前記ノ通リ講習生募集ニ付志望者ハ來ル六月十日迄ニ本會ヘ申込書ヲ差出サルベシ

神田橋外 東京府教育會內

東京府女學講習會（電話本局七八八 東京府教育會假用）

中央公論

本號目次



ナポレオン、セントヘレナに到らんとして故國の海岸に向て最後の別れを惜む

中央公論



第十九年
第五號

和魂洋才論

凡そ男子として世に處する、士魂商才に如くは無しとは、吾人が先輩に聞く所であつたが、吾人はまた感ずる所あつて、玆に和魂洋才を論じやうと思ふ。

和魂洋才とは何か?、讀んで字の如く、內、日本的氣魂を養ひ、外、西洋的識才を硏く事である。而も余の見る所に依れば、今回日露交戰に當つて、海に、陸に勝利の每に我に歸す所以は、わが忠勇なる海陸軍人の、よく和魂を抱き、洋才を用ひた故であると信じる。

忠と云ひ孝と云ひ、義と云ひ俠と云ふ、皆所謂る和魂なるもの丶、事に觸れて發展する動作に過ぎぬ。況んや君の爲めに死を恐れず、國の爲めに命を惜まず、將た身を棄て丶名を重んじ、機に臨んで家を顧みぬ如き振舞は、實に我が大和民族の、先天的專有物と云つても可なりだ。が、縱令い如上の氣慨あり、武勇ありとしても、之に戰術應用の妙と、武器操縱の巧とが伴はなければ、盖し文明の戰には勝てぬ。而も我が海陸軍の、よく之に勝ち得るのは、他無し多年の鍊磨と、積日の硏究とに依つて、よく文明的作戰に長じた故なのて。文明的作戰に長じたとは、取りも直さず、吾人が所謂洋才をさへも、十分備へ得た所以ではないか。

由來日本人は、情を先にして理を後にする、之に反して西洋人は、理を先にして、情を後にする。彼は實に智の民で我は寧ろ情の民てある、是れ、我に和魂の尊ぶべきあり、彼に洋才の學ぶべきがある所だ。さればこそ、わが國開港以來、廣くその洋才なる物を輸入

して、之を研き、之を究めつゝある程に、爾來未だ半世紀にも及ばぬ今日、その識才の點に於ては、優る彼等の壘を摩して居る、之に加へるに、我が故有の和魂を以てして、向ふ所敵のある理があらうか。

已に和魂あつて、之に洋才を加へた我國は、鬼に鐵棒である。が、その鐵棒は誰が與へたか。思ふに彼の開國の當時、我に洋才輸入の便を與へた、彼の西洋の諸國共は、今日私かに臍を咬んで、後悔して居るものもあらう。

而も彼等の迂濶なる、一面頻りに洋才を齎らしながら、他に和魂を持ち去つて、その郷國一の土産とはしなかつた。若し彼等にして、爾來この和魂を打破し、若くは減刪を事としたならば、我に洋才の得る所あつても、其實大なる損害と成つて、遂には國家の獨立をさへ危くする、不祥の結果を醸したかも知れぬ。

否、其實洋才の輸入に伴つて、多少の洋魂の移植せられ。惑心し難き洋魂の移植は、やがて其重なる和魂をも、聊か腐蝕せしめんと試みた。が、幸ひにもその勢力は、甚だ微弱であつたと見えて、變に當り、機に臨んでは、忽ち和魂の發輝せられる事、猶今日の如くであるを見ては、大いに人意を強うして可なりだ。

かくて日露交戰の月桂冠は、和魂洋才の德に依つて、今や我に歸しつゝある。さりながら、戰に勝つたヨりが、決して國家の利益とは成らぬ。寧ろ戰爭は一の手段て、目的は全く利にある。それは云ふまでもなく、外に對しては、東洋の平和、内にあつては、國利民福、この二大條件であるのだ。

さてこの二大目的、これを全く成就させるには、戰爭當事者以外、更に大いに俟つ者がある。曰く、外交家の手腕、内政家の技量！、

曩に戰爭當事者に依つて發輝せられた、所謂る和魂洋才なるものは、於是外交當事者、内政當事者にも、切に望まねば成らぬ事と成るのだ。

然るにその當事者は如何?、等しく是れ日本人である以上、和魂は元より備へて居るかも知れぬ。が、所謂洋才なるものに至つては、未だ十分の研磨を經ぬ事

從來の外交に迂に、經濟に拙な成積に付ても、之を認めるに難くは無い。否、その迂に且つ拙なる結果は、動もすれば人をして、彼等の和魂洋才ならず、反つて洋魂和才ではあらうと、疑はしめるの傾向を見るのは、まことに心外な次第では無いか。

蓋し洋魂和才とは、氣慨に乏しく、機略を缺くの謂、乃至薄志弱行、淺見不識の事である。彼の所謂るハイカラ黨なるもの、洋魂洋才ならばまだしも可なりだ。而も其魂のみ洋化して、才は依然舊阿蒙なるに至つては、實に禍なる哉である。

且つ夫れ、吾人の私かに氣遣ふのは、此度の戰勝の結果として、或は甚だ厭ふ可き反動の起る事である。厭ふ可き反動とは何?、一種の國粹論である。

國粹論元より可なりだ。一國として一國の粹を保存する、元より然らざる可らざる所だ。が、頑固、偏狹、自を知つて他を顧みぬ、盲的國粹論に至ては、やがて國家に禍するので。此等は寧ろ國衰論と云つても可からう。

然らばその國粹論は、如何にして起るであらう?思ふに今度の戰爭は、白皙人種と黄色人種の戰爭である。白皙人種と云へば、從來吾人の兄分として居た、所謂る洋才の本家である。(よし露國はさうで無くとも)處で今度は、分家として本家を倒し、弟子が師匠を負かしたの觀を呈した。是れ和魂にして洋才を兼ね、即ち鬼の鐵棒を揮つたが故である事は、巳に上にも云つた通りである。然るに世の淺見者流は、この一面を見て、他の一面を見ず、即ち和魂の誇るべきのを認めて、洋才の謝すべきを顧みず、その結果は、やがて輕忽な自負心と成つて、日本は實に强國である。西洋もはや恐るゝに足らず。軍の貴ぶべき士氣にある、武器の如きは何うでもよい。と、大言壯語、而も之を信じるに至つては、甚だしい了簡違ひと云はねば成るまい。

左無きだに、勝つ者は驕り、敗ける者は誡め、前者は怠り、後者は勵む。かくて時日を經る間に、當年の勝者は、他日の敗者と成り、昨の月桂冠は、今の白旗

と代る例、古來算ふるに遑あらずである。况んや世は二十世紀に入つて、生存競爭の増々劇しく、而もその競爭は、寧ろ智に在つて力にあらぬ今日、漫に和魂のみを恃んで、輕々しく洋才を排ける樣な事では、折角償ひ得た勝利も名譽も、蠑細工の勳章より、更に果敢無いものと成つてしまふ。

更に又外交、内政に付いても、若し和魂のみを偏重して、洋才を應用する道を知らなければ、國家の進歩は忽ち杜絶し、國運は忽ち衰頽する。之を國衰論と云ふも、決して無理はあるまいが。

兎にも角にも、日露戰爭の大勝は、和魂洋才にあると同時に、帝國未來の隆運も、一に和魂洋才にある事を、吾人は信じて疑はない。只恐るらくは、洋才なる語にやゝ弊がある爲めに、專ら西洋を學ぶ樣にも聞えやう。が、玆に所謂る洋才とは、必ずして彼をのみ學ぶの意ではない。否、當初こそ彼に學びもしたれ、今は漸次和化しつゝあるのだ。實に此分て進んで行けば今日の洋才なるものは、他日は新らたに和才と成つて、我から彼に輸出するに至らう、吾人は須らくその時を期して、今日の和魂洋才なるものを、益々練磨せねば成らぬのである。(小波)

大日本宗教家大會に就きて

五月十七日を以つて、大日本宗教家大會は開かれたり。世界に於いて、宗教家大會の開かれたる、決して今日を以つて最初と言ふべきに非ず。然れども今回のの意味に於ける大會の開かれたるは、蓋し世界史上に於いて嚆矢なりと稱すべきならむ。

抑も從來の宗教大會なるものは、多く學術的研究を目的としたるものにして、宗教家として活動を契約せむとにはあらざりき。偶ま此の種の會合ありと雖も、其は佛教とか、或は耶蘇教とかの、一範圍内に於けるものに外ならずして、今回の如く、各種宗教の信徒、一堂の裡に集り、滿場一致を以つて、

『日露の交戰は日本帝國の安全と東洋永遠の平和とを畫し、世界の文明正義人道の爲に起れるものにして、毫も宗教の別、人種の同異に關する處なし、故に吾儕宗教家は宗派人種の異同を問はず、此に相會し、各自公正の信念に愬へ、相與に奮つて、此交戰の眞相を宇内に表明し、以て速に光榮ある平和の克復を見むことを望む、

との議案を可決したるが如きは、宗教なる者の行はれたる以後 嚆矢なりと謂ふべきなり。それ宗教の何たるを問はず、國土人種の差別を認めざるは、多言を要せずして明かなり。然るに宗教家動もすれば、睽離反目し、甚しきに至つては、同宗教內に於いてすら、見苦しき利益の爭を生ず。かゝる種類の角逐は、吾人の記憶に、なほ鮮かなり。然るに今や、美しき大會合は開かれて、正義人道の叫び聲を擧げたり。何の喜悅か之れに及ぶべき。

吾人は學術的研究の會合を欲せざる者なり。學術の研究は、學者に一任して可なり。佛教の奧義を究め、或は基督教の根帯を知らむとすれば、學者に就きて質せば可なり。何ぞ事々しく會合を催すの必要あらむ。去れど宗教は元來人生と直接の關係を有するものにして、寧ろ其の實際的方面が、主要なる部分なりとす。人を濟度し、社會を改良せむと試むることなき宗教は、是れ眞の宗教にあらざるなり。而して其の大眼目たるや、一宗教の力を以つては、到底望むべからざるは、吾人の言を竢たずして明白なり。況や今日の社會は、日に月に複雑の度を加ふるに於いてをや。

宗教の實際的方面の爲に、各種宗教家の團結し得ざる理由なし。正義人道を明かならしむるは、宗教の如何を問はず、先づ第一に其の目的とする所なり。一宗教にして、既に此の大目的を立つる以上は、他宗教の是れを立する者をも是認せざるべからず。或る偏狹なる宗教家は、他宗教が、自己の宗教と同一なる教訓を說くを見て、惡魔我れを模して、迷へる民を欺くと論ずれども、そは識者の一顧にも價せざる愚論なり。

正義人道の爲めに、宗教家の會合を催すべきの地は

實に我が日本を措きて、他に之を見むべからざるなり我が國には、純粹に信教の自由あり。西洋諸國に於いても亦、これを許す者ありと雖も、其の實際に於いては、耶蘇教國にして、基督の教訓以外に、宗教と稱すべきものなしと信ずるの念强烈なり。即ち排他的精神甚だ强しとす。然るに吾が國内には、斯くの如き偏頗なる思想の、勢力を有するを見ざるなり。固より無智の社會には、極端なる排他主義の行はるゝありと雖も、有識者の間には、去る幼稚なる思想はなく、如何なる宗教に對しても、同一の態度をとる。佛教に對するも、はた基督教に對するも、何等偏狹の觀念を懷く者なし。これ外國の有識者か、舌頭のみにて、信教の自由を主張しながら、内心に於いては、基督教の排他的精神（決して基督の教理其の物に此の方面ありと言ふに非ず。たゞ歴史上、此がる精神の生起したるを指したる名のみ）の支配を受くると、其の趣を異にする所なり。

吾が國民が、概して排他的精神薄きは、宗教に對して冷淡たる一證なりと論ずる者もあらむ。げに宗教心に乏しき嫌なきにしもあらざるなり。去れど其の冷淡なる態度こそ、却つて眞の宗教的活動を生ずべき要因なれ。宗教家大會が、喝采の裡に閉場を告げ、世人一般に其の活動を悦びたるは、實に此の冷靜なる態度を因とするにあらずんば能はざるなり。

吾が國は洵に正義人道を守護する國家なり。世界何れの國土と雖も、今日の日本帝國の如きは、其の類なからむ。露の狂暴無道を懲罰せむが爲には、正義の刄を振ふ同胞あり。而して國内には、宗教家の大會合開かれて、正義人道の光明を、ます〳〵發輝せむとするあり。之れ劍と理とを以つて、眞と善と美とを保護するものに非ずして何ぞや。金甌無缺の大日本帝國に生れ、而も此の光榮ある日に遭ふ我れ等の幸福、いかに夫れ大なるかよ。宗教家諸氏よ、卿等の活動、絶え間なく、我が帝國をして、正義人道の理想國たらしめむこと、これ吾人の切望する所、而して吾等微力ながらも、又其の業に奮勵せむ。（成川）

國際道德の成立ち易からざる理由及び之れをして成立たしむる方策

文學博士　坪內雄藏

過日所用ありて坪內博士を訪ふ、談偶〻國際道德に及ぶ。予問ふ、博愛を標榜し平和を主張する基督敎國にして若しくは他の儼然たる德敎の國にして、一旦戰端を開くや忽ち殘忍を敢てし、陰險譎詐を恣にして憚らず僞善も玆に至りて極まれりと人をして惑ぜしむるもの屢〻あり、而して國民また之れを異まず、抑々國際道德は到底成立つべからざるものかと。博士之れに答へて若干の說明あり、今其の大要を記す。（公論記者）

個人間の道德を論ずる場合には絶對利己主義はいふに及ばず、條件附の利己主義といへども之れを是認するものは甚だ稀なり。進化論者の如きは其の用語例の上より見れば利己主義を是認するが如くなれども、其の實利己爲我の生欲の止むを得ざるに出づる由を辨ずるに他ならずして之れを可とするにはあらず、只之れを會得して倫理を說くことが却りて全人間の爲なりと結論するのみ、彼の國際の關係をいふに當りて、外交當事者乃至激昂せる國民などが主張するが如き意味に於て利己主義を是認せる論者は楊朱、マンドキル、ニイチェ一流の矯語の外には殆んどなし。思ふに國際には道德なしといふことは今も尙ほ是認せらるゝものゝ如し。假しや理論上に於ては是認せられざるも實際上是認せられたるの例は吾人の幾回も聞睹する所なり、貴下の疑問せらるゝ如く是れ甚だ奇怪なる事實なり、尤も之れに關しては種々の道理らしき分疏辨明は提供せらるれども、尙ほ是れ二十世紀の倫理論壇に於ける未解決の一大問題なりといひて可なり。特に最も奇怪なりと見做すべき事實は國民乃至個人としては溫厚忠良なる紳士にして、（否寧ろ國民として忠良なる度の多ければ多きほど）一度外交上の最大なる責任者、當事者となるに及びては、忽然として其の倫理的態度を改め、殘忍を敢てし陰險を恣にし、譎詐を逞うし、殆んど無道德同樣の人物と化し去ることとなり、是れはた未だ闡明せられざる一の不可思議なる事實にあらずや。世のシニック質の靑年等が道學者等の敎訓を聞き

て往々冷笑し、彼等の說く所は要するに我々を欺く一種の方便說のみ。天下の形勢を見ずや、頂點に近づくほど敗德無道の度を加へ來る、特に國と國と社會と社會とに至りては古往今來利己的爭奪を事として寸時も休することなし、是れ畢竟、進化の天則、人間の眞相なり、國と國との上に行はるゝの事個人と個人との上にも行はれざらんやと。予中學の事に從ひし頃小中學程度の修身敎員にして此の種の詰問に逢うて其の答辨に苦めるが如きものを往々見たりき。知らず世間の倫理學者等は斯るシニック的反詰に逢うて如何に答辨せんとするやらん。予の淺學寡聞の故ならんが此の種反詰に對する妥貼的確なる辨析は未だ之れを耳目に觸れたることなし。もとより單にある方面より見たる解釋の如きは英米の倫理書にも乏しからず、されど其の徹底したるものに至りては予未だ之れを見ず。思ふに是れ專門倫理學者の愼重なる研究に待つべき問題にはあらざるか。予は本來倫理學者にもあらず、到底斯る大問題をかりそめに座談などにて辨析せんと試むるなどは失當千万の次第なれど、嘗て中學研究時代に調べかけて中止せしことあり、かた〱貴下の疑問あるを機として世間博識の敎示を乞はん端緒かた〱今ふと思ひ出だし得る理由だけを述べて此の疑問解決の第一步ばかりを試みんか。言ふまでもなくホンの常識的の議論と了せられたし。

予が見る所によれば國家的利己主義の盛に行はるゝ原因は凡そ三ヶ條あり、曰はく國際上の事情に止むを得ざるものあればなり、曰はく國家的利己主義は個人的利己主義と異りて若干の是認せらるべき事情存すればなり　曰はく當事者の心的態度が內國人又は個人に對する場合と格別なることと是れなり。

所謂國際上止むを得ざる事情にも凡そ四ヶ條の細別あり。

(一)凡そ道德はカント一派の如く無上命令の存在を確認するか、若くは彼の宗敎家の如く人間以上の主裁者を信ずるか、乃至は功利主義家の如く專ら利害上より打算し來るかにあらざれば、成立ち易からざるが個人間にてすら常なるに國際間には此の三者皆缺ける氣味なり、先づ宗敎は列國思ひ〱也、功利論も個人間ほどには明かならず、而して國際公法の略ぼ成立せりといはるゝ今日といへども、眞正の意味にて言へば尙ほ國際の爭議を裁決すべき實際有効なる權力はなし、且大紛議生ずるや仲裁又抗議を提出すべき環視の列國はあ

りといへども、何ほ國民若しくは個人に對して下し得べき程の制裁力あるべくもなし、一言以て蔽へば全世界の中央權力といふものなく、從つて東西列國よりなれる大社會 Community の間に起れる爭議はツマルところ之れを文明的即ち道義的に決すべき方法なく、而して之れを干戈に訴へて決するといふ場合となりては彼の中古時代に於ける決闘裁判 Trial by battle と一般、要するに、「腕力即權利」に歸着す、慈悲正邪を問ふの遑なし、こゝに至りて列國皆自衞に汲々たり、陰險これが爲に起り、譎詐これが爲に盛行し、僞善これが爲に榮ゆ、之れを第一の止むを得ざる事情となす。

(二)　個人よりなれる普通の社會にすらも文野の階級は少くとも上中下の三級位には分たるゝ習なるが、東西遠く處を異にし、進化の歷史、文化の由來を異にしたる國々よりなれる世界といふ大社會の unit は言ふまでもなく文野の程度千狀万態なり、其の風俗、習慣、制度、文物の種々雜多なるが如くに傳説も異り人情も異り、嗜好も異り、理想も異り、隨つて道義の標準も同じからず。諺に所謂 different times, different morals. なり。かるが故に列國間の善惡觀念は今日までの經驗にては往々にして甚しく矛盾し、到底一律を以て律し難し。倫理觀念の一段科學的に闡明せらるゝ時とならばいざ知らず今日の如き制度・文物の有樣にては斯る行違、不便等尙歷然として存す。彼の愛國心を四海同胞主義とは兩立すべからざるものゝ如く信じ且つ主張する人々多きは其の理あることなり。國內の個人道德の上すら往々にして爭議の決し易からざる概あるを、況んや國際問題としての善惡邪正を論ぜんとするに於てをや。之れを第二の止むを得ざる事情となす。

(三)　世人往々いへることあり、英國民は個人としては善し國民即ち團躰としては陰險にして殘忍にして云々。露國人に對しても之れと同樣の評を下すものもあり。如何にも近世の外交史を見れば啻に英露のみならず、到る處の國として陰險ならざるは殆ど無きが如し。約に反き、誓を破り、譎詐百出、恬として恥ぢざる如きもの比々皆是れなり、國家は皆利己主義の極點、破廉恥の骨頂とも評すべきに似たり。されども假りに虛心平氣なる純然たる局外者となりてやゝ辨護的判斷を下さんとすれば流石に一概に、不義破廉恥とも斷ずべからざる場合あるに似たり、畢竟一國は個人と同樣に見做し難き場合あり、個人は生ける限りは同一の人格、意識を具ふるゆゑに其の行爲は常に其の責任

たり、されど國民の成分は時と共に變移す。名は一國民と稱するも其の實は loose unity, loose Cohesion. の團躰にして、到底一個人の Personality を具へたるものとして前後過現の言行に矛盾あるを責むること無理なるが如くにも見え從て一國民全躰に道德的責任を負はしめずともあるべきやうに思ふものもあるべし。例へば其の國民の或團躰の所爲を以て直に其の國全躰の責任となさんは不公平に近しと見らるゝが如く、前々外務大臣の締約が國是輿論の一變したる十餘年後の内閣に依りて破棄せらるゝも多少止むを得ざる事情の如くにも解せられ得べし。勿論これは俗の見解なるべし、されど是等もまた國としての國民が不德を敢てするに至る一種の理由にはあらざるか。

(四) さりながら最も强き止むを得ざる理由は自衞なるべし、即ち生存競爭の必要が列國を驅りて道義を擲無せしめ、利己一邊主義を行はしむるなり。人口問題、殖民問題に迫られて此に出づるもの〻如きは然り。特に今日の如き國際的競爭に於ては此の下に語る如き種々の Justification (是認) の伴ふだけに自立自衞を止むを得ざる事情となす理由一段多し。

さて右に所謂國際的利己主義の是認せらるべき理由にも凡そ四ヶ條の別あり。

(一) 假しや吾人の理想は世界同胞主義若くは宇内協和制度などに歸着すべきものなりとするも、尙ほ之れに到るの豫備手段として比較的善良なる國家を保持し、之れを醇化し理想化することを以て第一着の事業となさゞるを得ざるの理由成立得べし。例へば國内の場合に比喩せんに、こゝに無政府の餘多數の惡人と一人の善人ありて、其の善人が右の惡人に苦しめらるゝ場合には、俠者は善人を助けて惡人を懲さざるを得ざるが如く、先づ我が比較的善なりと信ずる國家を立し、これによりて世界主義に達せざるべからず、故に不完全時代の止むを得ざる手段として兇器を用ふる也といふ分疏を成立たしむるを得べし。

(二) 夫れ天下に國するもの少なからずといへども眞の文明國、眞に道義を重んずるの國は比較的少數なり、猶聖賢君子人の國内に稀なるが如し、隨つて眞に文明を代表し得るの國は世界將來の文化の爲に甚だ重大なる職責を有す、隨つて自から衞り自から重んずべき權利も一層大なるべき筈なり。然るに周圍の强暴なる劣等國が純然たる利己主義の爲に暴力を用ひ權詐を恣にし世界の文明を危うせんとす、世界の將來の爲に自

衞の方法を講ずるは當然の事なり云々。干戈に訴ふるに當りて如何なる國も、頻りに義戰を標榜する所以は此にあるなり。

(三) 啻に自衞の爲に强暴の劣等國を膺懲することの是認せらるべきのみならず、斯る膺懲は化益を與ふる上に於て必要なり。蓋し頑冥不靈なる野蠻の徒は之れを導くに鞭を以てせざるべからず、彼等を敎ふるには膺懲是れ必要なり。所謂 Imperialism は(其の主張者に言はしむれば)國家的利己主義の爲にあらず、世界人類の化益の爲なり。印度を略しボーアを苦むる、其の手段は殘忍なるに似たれども、其の最後の目的は大慈悲に他ならずと、當時の當事者は辨ぜしならん。"The end justify the means" 正義を護らん爲には時に正義の規律を破ぶることも是認せらるべきならずや。言はゞ大なる公道の爲に小なる人情を擲つなり。大の虫を殺して小の虫を救ふなり。涙を揮つて馬謖を斬る也、云々。これも一種の是認理由ならんか。

(四) 併しながら以上の三理由よりも實際に於て最も力あるものは習慣なるべし。即ち古來より國際には道德なきを常と見做し來れる習慣あり。人若し個人的道德を破ぶれば、甚しき未開の人種と雖も尙多少目を側立つ、されど國際、就中宣戰後の國際に於ては、如何なる權謀術數を行ふも、如何なる殘忍殺伐を行ふも、彼の個人間に行はるゝものほどに感ずる者は今も尙ほ稀れなり。下等社會は言ふを俟たず、中流以上の社會に於ても尙ほ動もすれば然り。固より今日の最も進みたる宗敎家、道德家、政論家などは苟くも國際公法の是認せざる所を行ふことを否認すれども、其の他は必ずしも然らず。按ふに古賢人の著書乃至格言中に國際的殘忍を是認し若しくは寬恕したる例は東西共に夥し。平生信尊する authority が斯く認可せること、たしかに此の點に與りて力あるが如し。

さて最後に當事者の心的態度も外國に對する場合には一種特別なり。普通の場合に於ては同胞はいふに及ばず、家畜をすらも故意に殺すことを敢てし得ざるほどの君子人といへども、一度外交の術に當りては數千万人を犧牲にして平然たることあり。是れ果して如何なる理由に基くか。按ふに彼れが斯る殘忍を敢てして其の良心晏如たる所以のものは主として下に語る數ヶ條によるならんか。

先づ第一は前に擧げたる「止むを得ざるの事情」「是認せらるべき理由」等を明かに又は暗に意識する所あれ

ばなるべし。次には、我が對外の當事者としてなす所は決して私慾の爲にあらず、各利の爲にあらず、多數公共の爲めなり、此のことは天地に俯仰して愧りなしと思惟すればなるべし。要するに理智の上より、自國を護るは人の性の必然なり、人間の本能なり、吾れながら忍び難きなり、天の命なりなど解決して安んずる所あればなるべし。且つ自ら任じて、第一には國家の爲、第二には人類の爲に頑昧殘暴の敵國を膺懲するなり、懲して以て遷善せしめんと欲するのみと辨解する所あればなるべし。

以上は主として當事者が智見理智の上をいへるなるが、其の感情良心の上よりいふも、彼等をして安心せしむべき理由數ヶ條あり。第一には人類全躰の爲にすと思ふ心、即ち公道を行ひつゝありと思ふ心あるに安住して自ら欺くに他ならざる果斷をも行ふに至るなり。古來宗教家、愛國家ほど殘忍なるもの稀れなるは此の理に由る。次には愛國といふことは、東西南北を問はず、世界同胞主義の宣傳せらるゝに至りし前に於ては、おしなべて最上の美德とせられたりき。少くとも宗教と引離したる倫理より觀て德の頂點は此の美德なりき。されば此の遺傳的觀念は深く列國民の頭腦に浸透せり。取分け古來の政治家が最上の譽、最上の德となししものは是れなり。斯くも此の美德ある限りは、少くとも我が國民の多數は吾れに同感する也、吾れに應援する也と信ずる點、實に此の點こそは彼れ當事者をして甚しく大膽ならしめ、甚しく果斷ならしめ、殘忍ならしめ、陰險ならしめ、而も得々たるに至らしむる所以なりと思ふは非か。予は思ふ、人間は、詮じ去れば同感を求めつゝある動物なり、同感の乞食（ベッガー）なり、吾れは狷介世と交るを欲せず、吾れは醜穢の世を厭ふ、吾れは世を咀ひ人を憎むといふものすら、斯く聲高に呼號する所以を剖折すれば其實陰かに若干の同感者を求めつゝあるなり。之れに依て考ふれば國民過半の同感は、彼の現世の聲譽に渇し、名望に餓うる政治家輩をして忍ぶべからざるを忍ばしむるに至ることある、異しむに足らざるならずや。

然らば則ち國際道德は到底成立ち得べからざるものかといはんに、予は思ふ、必ずしも然らずと、只此れに至るの方法の一朝一夕にして實行せられ難からんのみ。試みにふと心に浮べるまゝの二三の方法を語らんか。第一策即ち予が認めて根本策となすものは列國の倫理標準を一ならしむること是れなり。蓋し世界の列

國が今尚ほ其の國特有の神を有し、法律を有し、習慣、制度、國語、文學、傳說、歷史等を有することが彼等の嗜好を異にし、好尚を異にし、利害を異らしむる第一の原因なれば、先づ之れをして一ならしむべきなり。即ち人に因り、形式に因り、歷史に因る倫理を撤し、通理に因り、通情に因る倫理を立つること、換言すれば特別なる境遇、事情、歷史、人物の下に成立てる種々の宗教的倫理を斥けて、寧ろ學理的なる即ち普遍なる基礎の上に立てる倫理的宗教を立つること是れなり。而して此れに導く手段としては普通教育を圓滿ならしめて、一國內は勿論、國と國との間の理智(リーゾン)の度鑑賞力(テースト)の度を相近似せしめ、學問、藝術、遊戲、風俗の末までも及ぶべきだけ相融通し相調和するを得しめ、異人種、非同類の意識と反感(アンチパシー)を減ずること最も必要なりと信ず。所謂黃人禍(エローペルリ)の思想の如きものは故意に政略上より說かるゝものは格別として、單に人種的感情として成立てるものは、其の風俗、嗜好、言語等の異るよりして來れるもの多かるべき也。而して之れを爲すに當りて最も力あるは普遍の人情に訴ふる文學藝術の作用あり、この事は嘗て「國文學の將來」と題して『文學其折々』のうちに論じおきたり。參考ありたし。かくはいへど列國特有の風俗の美、藝術の美等は之れを舊に依つて保存すべきこと勿論なり。

さて第二策は理論上より利害を考査すること是れなり、他なし、國家的利己主義を奬勵することは畢竟ずるに個人的利己主義を奬勵し鼓吹するに了るといふことを證明して、彼の國際無道德論者、似而非なる愛國家及び極端なる主戰論者の妄を破すること是れなり。前段にもいへる如く、中學程度の青年中にすら稍々智見進みたるものは國際的無道德問題に疑ひを挾み、國際に道德なきことを是認せば個人間にも之れを是認して可ならずやなどいひ出づる例なり。假しや此の理を推して個人間の道德を撥無することは成立たぬ論とするも、此の國おのが心に適はざれば去つて他の國に歸化することは道義上咎むべからざる事なるが如くにも解せらるべし。それこれ國家的利己主義の公然たる主張は早晩國內的道德の上に惡影響を及ぼすことあるべし。露西亞の利己的侵略が虛無黨主義の漫延に隱然與つて力あるべきを思ひ、ビスマルク及び獨逸皇帝の帝國主義がニイチエ一流の新道德說をして一面合理なるが如く思惟せられしむる所以を思へ。予は是等の理由に依りて侵略的帝國主義の、到底古羅馬帝國の經驗せ

るが如き德教頽廢に了らざるべからざるを信ず。故に或は歷史に依りて歸納的に此の山を證明し、或は倫理學上乃至社會の心理學上より此の理を說明し、今の所謂國家主義若しくは帝國主義の、利己一邊主義に墮し易き所以若くは其の假面たるに過ぎざる所以を辨析するの必要なるを思ふ。且つ夫れ個人の場合は或程度まで僞善、矯飾を遂げ得ることあれども、國家といふ大男は總身に智惠の回り兼ぬることあるが故に其の僞善存外に露骨なり、滑稽的なるほどに淺府なり、一時は列國の眼を眩ますとも、數月ならずして其の本體露はれ、他を欺かんとして自ら大に敗るゝの悔と失とあるや必せり。かくいはゞ世間の實際家、政治家等は吾人の說く所の白日夢に類するを嘲り、痴人黃金時代を語るとなさんか。如何にも此の策を立つると共に天下忽ちに泰平、世界立ろに戰爭なく、衝突なき、皷腹擊壤黃金時代を顯現せんといはゞ妄語ならん。又或一派の論者の如く極端に戰爭を否認し、怨に報ゆるに德を以てし、我が右の頰を打つものをして又我が左の頰を打たしめよと言はゞ痴夢を語るものにも近からん。されど予のいふ所は然らず、將來永遠の理想主義方針として國際道德の成立すべきを主張し、成立せしめざるべからざるを言ひ、之れを成立せしむるの手段劃策に着手せざるべからずといふのみ。夫れ現世界の國家は其の數僅かに八十餘ヶ國、其の中眞に獨立國として勢力あるものは僅かに四十餘ヶ國のみ。故に彼の億万無數の同胞を對手にする個人道德の場合とは同じからず、淑慝正邪美醜の別歷然として著し、焉ぞ瘦さんや、焉ぞ瘦さんや。君子國と小人國との別は火を睹るよりも明かなり。現下の戰爭に際して英米國民のみならず他の列國までが概して我に同情するの因緣は單に小を憐み、弱を贔負にすといふ單純なる心的作用のみならんや。

さて國際道德を成立せしむる第三策卽ち最後の一策は、須らく實利主義上より、並びに實際上の利害の經驗に徵して世間の妄を開くべきなり。彼のブロッホの唱ふるが如き手段に依るも一なり。戰爭の如何に殘酷なるか、如何に不經濟なるかを明にするも一なり。其の他今直に考へ及ばざる方法幾何もあるべし。但し以上擧げたる方策は主として學者、理論家、教育者、文學者等の實行し得る類の方策のみなるが、宗教家、政治家、實際家等の執り行ふべき方策に至つては尙ほ更に多くあるべし、予は未だ考へ及ばず云々。

赤十字社と其衣服改良及び日本人民活動上に及ぼせる感化

左に掲ぐるは先日基督教青年會館に於て開會せられたる赤十字社演說會に於て高木醫學博士の述べられたるものを速記社員をして速記せしめたるもの、誤謬あらば責任は固より本誌記者に在り。

醫學博士　高木兼寛

赤十字事業に就きましては私は石黒閣下に比すれば未だ赤ン坊同様であります、夫故に赤十字社其物に就きましてはトンと申し上る點はないのであります、唯此處にちよつと題が掲げてありまするやうな事に就てお話し致して見たならば幾分の御參考にもならうかと存じました所から此の如き題をお知らせ申したやうな次第でございます、私の想ふ所に依りますれば明治二十八年以來の赤十字社事業の進歩は我國民に大なる影響を及ぼしたものであると確信して居ります、如何なる點より之を起したかと云ふ、悉しく申しますれば長時間を要するものと思ひますから之を略しまして其及ぼしたる點を申せば即ち我國民の健康即ち身體の健康と精神の健康とに對し非常なる影響を及ぼしたものである且つ將來に及ぼすものであると信じて居ります、時間が誠に少數でございますからして成たけ簡單に思ふ所を述て見たいと思ひます。

健康に及ぼす影響

は如何なる點であるかと申して見ますると直接ではありませぬ間接に此事業が爲したりと申さなければならぬ其逕路、即ち影響したる逕路と云ふものは我田に水を引くのではありませぬけれども醫學上の關係から參つたものと信ずるのでございます、即ち看護婦の養成であります、我國に於て看護婦の養成と云ふことは明治十五年頃の發議でありましたけれども實際看護婦の養成に着手致しましたのは十八年後のことで僅かに二十年の星霜しか經て居りませぬ、別段赤十字社其物に就て看護婦の養成を初めたと云ふ順序ではありませぬが併しながら後に大なる働きを爲したものと云はなければならぬ、最初東京に其看護婦養成所を拵へて一般の需用に應じやうと致しましたけれどもナカ〱以て之を多數に養成して一般の人をして看護婦の必要を知らしむることは頗る難事であります、然る所赤十字社の設置以來各地方に於て看護婦の養成を初め多くの卒業生を以て救護班を編制する順序になつたのでありま

す、之に依て以て各地方に看護婦を養成する場所が澤山出來たのであります、從つて出來た所の看護婦が社外の病人或は怪我人等を看護する順序によりまして之が爲に一般の人が非常な幸福を受ることになつたのでございます、即ち醫者が如何に上手でも看護が下手であれば傷も治らなければ病氣も治らぬ、然るに相當の教育を受た看護婦が赤十字社のお庇で出來たと云ふ有樣から一般の人に大いなる影響を與へた譯であります、看護婦が働くと云ふことになりまして看護婦が如何に傷病者に對し必要であるかと云ふことが日本全國に普及した譯であります、進んでは看護の事業は唯獨り專門の看護婦に托すべきものではないと云ふことを一般の人も心得なければならぬことに今日はなつて參つたのであります、又一方に於ては即ち篤志看護婦人會なるものがあり上　皇族內親王を始めとし下庶民に至るまで之に續々入會して看護の業務に對する必要な事柄を修めつゝおいてになるのであります、依て今や我國に於て看護婦と云ふことを天下一般の事業として認めて居る、之に依て即ち此看護の事業が發達するに從つて我國民の身體に健康を及ぼす働きと云ふものは非常なものであると云はなければなりませぬ、之れ即ち私が赤十字社の發達は國民の身體の健康に非常なる影響を及ぼしたものである又將來及ぼしつゝあると申し上た所以であります　之は看護の一部の方法に依て見るのみでありますけれども尙此他に非常なる働きを又國民に與へて居る、それは何であるかと云ふと

衣服の制度

のことであります、どなたも御承知でございませう、高木兼寬の考へては今後我日本帝國をして歐米の列强と同等の地位に立しむるには衣食住の三種を改良するにあらざれば充分なる目的を達することは出來ないと云ふことを主張して居るのであります、然るに此赤十字事業が看護のことに關係して如何なることを今日產出しつゝあるかと申せば即ち衣服の改良を爲しつゝあるのであります、即ち看護婦なるものは何れの所に於ても角袖に襷掛けと云ふやうなものは日本國中到る所今日はございませぬ、即ち看護婦は盡く筒袖を着て袴を着けて居る、或は又袴でございませずとも之に類似の物を用ゐて袖だけは皆筒袖になつて居る、之に依て以て人の危急な場合に臨み必要な仕事を爲すに就ては從來の長袖では出來ないと云ふことを證明したのでご

ざいます、之は自他の爲め彼等病者の爲め又看護の爲め甚だ不便を感ずると云ふ點からして自ら看護婦は總て筒袖を着て居ることになつたのである、此の如く即ち日夜業務に從事するもの殊に忙はしく從事する者が從來の衣服即ち長い袖の着物を着て幅の廣い帶を締めて臨月の婦人に於けるやうな呼吸をしつゝ迚も働くことが出來ない、さう云ふ所から即ち唯今申し上るやうな服制を看護婦は一般に採用して居る、此の看護婦の殖へることは年々歳々非常な數である其爲に衣服と云ふものが一變しかけたのであります又此以上即ち奥樣方と云ふやうな所の衣服改良と云ふものが最も困難である、先年來改良服のことに就て大に盡力された方もありますけれども併し幾分か芽を吹さうであつたが今日は其勢ひが衰へて參つたことは實に悲むべきことである、併しながら婦人社會に於ても近來幅の廣い帶を廢して幅の狹い帶を締めて袴を着けて居るやうなことが一般の流行となつて參りましたから必ず退歩したとは云へない進歩して居るに相違ない、併しながら之は學校着物と云ふやうなことになつて學校を廢めて仕舞うと又幅の廣い帶を締めると云ふやうなことが行はれることてあります、之は實に惜むべきことゝてある、どうか學校を退いて奥さんになつても母親さんになつてもお婆アさんになつても筒袖を着て袴を着けるやうにして戴きたいものである、一般の事情はサテ此の如くてあります然るに篤志看護婦人會は如何である篤志看護婦人會はどうか、即ち昔しの通りで幅の廣い角袖を着てやつてござるが實際に臨んで仕事を爲される時には矢張一緒のやうになつて居ります筒袖袴と云ふことになつて居る、此間もマッギー婦人が米國より參られるに就て横濱あたりへ行て見ても軍人の御夫人始め即ち服裝がちやんと定つて居つて筒袖袴を着けて居られました、是れ即ち赤十字事業に從事した結果であると云ふことを證明するのでございます、篤志看護婦人會も各府縣に向つて注意を與へ、會員も續々出來て來るだらうと思ふ、左樣致せば上下共に即ち平時にあつても普通の傷病者などの看護の服裝も改まつて來るのである、一方に於ては中流以上上流の御婦人迄も平たく云へば洋服を着ておいでなさる此の如く服裝の變化が起つて來るのであります、他の方面より殊に婦人の衣服を改良すると云ふことを今日迄大分主張致しましたけれどもナカ〳〵困難でありまする所に幸ひなるかな赤十字が發達致せば致すだけ婦人社會に於て衣服を

改良すると云ふ氣運に進むのである之に依て初めて我同胞が男女共に服制を改良して參れば其身體は活潑に動作することが出來活潑に動作が出來れば實際身體の發育は益々盛になり、盛になつて而して終一般に發育した身體を强壯に維持することも亦出來る譯であります、之に依て即ち衣服の改良が此方面に依て出來るので他の方面でむづかしいことを學校でやつて見るけれどもナカ〳〵いかぬ、併し此赤十字事業より產出する衣服の改良は事實に基ゐて即ち實際の問題から起るのである、學校で折角筒袖袴を着せて見ても奧さんになると直ぐに廢めるやうになる、所が此方は働くのに不便であるから何時迄も着て居るやうな譯で夫故に事實より產出す所の改良はナカ〳〵止むものではないと云ふことを自分は信じて居る譯であります。

即ち衣服は先づ赤十字社が此の如くして參りました、ソコで日本全國の赤十字の事業が進むと共に社會に必要な衣服の改良と云ふものが漸次進行しつゝあると云ふことは今日明言して間違う所がなからうかと思ひます、而して私の最も希望する點は此方面の日本國民の衣食住を改良して强壯の者にすると云ふことは、折角今日或は戰ひ勝つかも知らぬ必ず勝ちませう、それに依て得る所の名譽を長く維持することが出來るやうにしたいと思ふのである、ソコで衣服に就て一通りちよつとお話し申すと衣服は寒くないやうに暑くないやうに又裸體は見ともないから着るもので、所で此着物に就て一通り申したいことはどう云ふことであるかと云ふと一般に

裁縫學教授

と云ふものがある其裁縫學教授の原理は何處にあるかと承つて見ると裁縫學の大家が今日迄答へて居る所に依ると一向感服することの出來ぬ點がある、甚だ失敬な言ひ分か知れませぬが今迄拵へた羽織は斯う云ふ風にする着物は斯う云ふ物である斯うすれば切が澤山入らぬとか、經濟學の上から云つたら善うございませうが併しながら衣服と云ふものは何か働く目的の爲に身體の動作の妨げとなつてはならない又身體の發育を妨げてはならない、然るに唯今のやうな裁縫の仕方では五體の運動を妨げるものである、夫故に五體の運動が妨げのないやうにてす寒さも善く防ぎ暑さも善く逃れることの出來る、人が見ても立派であるやうな裁縫の教授をしなければならぬと思ふ、けれども婦人方は非

常に澤山時を費やして裁縫のことをお學びなさるけれども衣服の改良がナカ〳〵進んで參らぬ、私は度々お話し申しますがかい摘んで云ふと四角な袖である爲に手などを自由に働かせることが出來ぬ、それに依て何か仕事をすると云ふ時には襷を用ゐなければならぬ、襷を掛けると、日本全國に四千五百萬人あると云ひますから唯今でも矢張四千五百萬人位あるだらうと思ひます此襷が一錢づゝにしても四十五萬兩――廉くないです、それを始終忘れないやうに何處か定めて持て居なくちやならない、所が時々忘れる、さうすると母親さんが俄かに「私の襷がないから坊や何處にかあるだらう搜してお呉れ」、坊やは尋ねるけれどもナカ〳〵ない、「どうもございませぬ」、それで母親さんは何分間と云ふ時を費やして搜してさうして襷を掛けて仕事をする世の中に襷掛けで仕事をするものは世界中にない唯日本獨りである、日本帝國の名譽が世界に類がないのは善いけれども襷掛けが世界に類がないのは餘り看板にもならぬ、さうして經濟から考へると時の經濟物質の經濟から考へて甚だ忌むべきことでありますからどうか襷掛けは一日も早く廢することに致したいものである、所が即ち此赤十字が段々襷掛けを少なくして來る、陣中へ行て看護に從事する者が、救護班が行く時に襷を持て行て救護する者は一人もない、若し襷を持て行くと云ふことになつたら甚だ不便だと思ひます、それから又は帶です此恐ろしい帶を廢することが段々出來るやうに看護婦がやつて呉れる、之は僅かの物であるやうでありますけれども日本の婦人達が腰の廻りに卷いて居る帶の直段と云ふものは大變です、大約二億圓即ち一師團の兵が一年間戰が出來るだけの費用を掛けて仕舞う、さうして其の帶を締めて樂であるかと云ふと非常に苦しいのである、其一例を申すと能く分りますが昨年大阪の博覽會では七百圓と云ふ片側帶があつた、非常に高い物です、其代り鐵の板同樣だ、さう云ふ帶をシッカリ締めて、お客にでもお出になる、ナカナカ苦しい、それで呼吸の樣子を見ると此位のものです(形容)それで其お客樣と客を呼ぶ者の趣意は丸つきり違つて居る、呼ぶ方では數日前から料理人を撰んで魚も好い材料を用ゐて調理して旨く召上つて戴かうと考へて居る、然るにお客にお出なさる方は幅の廣い帶を締めて、お出掛なさる前に少々召上つて之から參つても成たけ戴ぬやうにすると云ふ考へて、お客樣と御主人樣は丸つきり違つて居る、ですから呼吸は丁度私が眞

飢をしたやうに波を打て居る、どうなさるかと云ふと身體を眞直にして暫て少しづゝ召上る、どう云ふ譯で召上らぬかと云ふと「どうも戴き過ますとお腹が張ります」、「それでも折角のことてすからどうぞお上り下さい」、男の方には段々宴會の進むに從つて「どうぞお袴をお取下さい」とか「帶をお取下さい」と云ふことになるソコて男子は別特の取扱てすから人の前て袴を外したり帶を解くことも出來ますが御婦人に對して帶をお解き下さいと云ふことはない、それてありますから成たけ少し戴いて、歸りには大喜びてお歸りなさる、さうしてお歸りになつて女中を直ぐお呼びになる、夫から帶留から何からスッカリ取て仕舞つた所て一番仕舞に「アヽどうも好い心持だ」此の如きことが社會にあるのてあります、所て此弊害を赤十字社て取て下さる、さう云ふことてありますから私は誠に赤十字社と云ふものは國家の爲に缺くべからざるものである、戰時は別段てす戰時は尚更なくてはならぬが斯う云ふことに就ても非常に力のあるものてあるから誠に有難いものであると云ふことを自分は深く信じて居るのてあります。

それから食物です

食物のことに就てはどうかと云ふと一般の人は腹さへ張れば善いものである甚だしきに至つては、土を食つて水を飲でも善いと云ふ者がある、所がナカ／＼出來ませぬ直に赤痢が起つたり虎列剌が起つたり腸窒扶斯が起つたり、ナカ／＼目的を達することは出來ませぬ、ちよつと言て見ると身體を强健にする爲めの食物でそれには一定の割合がある、强壯な者と軟弱な者とは釣合に應じて食はなければ身體の爲にならぬものであります、所て之を一般の人に知らしめたいと思つて明治十五年頃から石黒閣下と大に盡力して日本衛生會を拵へて頻りに奬勵しましたが詰り食物を善く注意致しますれば人は病氣は格別せぬものて一體人間が病氣すると云ふことは間違つて居る、病氣はせぬ筈のものてある、夫を皆要めて病氣すると云ふことになつて居る、詰り多く飲食物から來る、然るに飲食物は此の如く大切なものであると云ふことを一般の人に知らしむることは困難であるが幸に看護婦なるもの又は篤志看護婦人會等の任と致しまして國民全體に此事を普及することを謀りつゝあります、之が即ち健康に對して影響を

及ぼす所以であります、篤志看護婦人會の人とか一般の看護婦是等の人が專門家と謀つて——篤志看護婦は專門家ではありませぬけれども一般の卒業看護婦は專門である此專門家が個々別々看護のことは勿論病氣の時の食物は此の如くするものであつて病氣でない時には斯う云ふものであると云ふやうなことを敎授して廻るのであります、敎授すると云へば言葉に不都合があるか知れませぬが彼等が即ち看護婦學校に於て授けられたる精神學とか解剖とか一般の衛生學と云ふやうなことを實際に行うて之を人に示せば多くの人が曉り易い覺へ易い譯であるのであります、從つて實際に現はすことが出來るから彼等が所謂一般の衛生即食物其他に於て傳道者となる譯であります、モウ長いことは申しませぬ。

それから住居のことです

日本人は疊の上に座はる、それがいかぬ、衛生上から申しても工合が惡い、疊は惡魔の巣窟である、何故かと云ふと疊の表を取て見ると塵埃が一杯ある、塵埃は何であるかと云ふと所謂黴菌です、藥になる黴菌もあるか知らぬが多くは毒になる黴菌であつて透があれば目さう／＼と睨つて居る、取も直さず疊の上に寢るのは賊の前に寢て居るやうなもので油斷をすると生命を取られる、それなら疊を廢するが宜いと云ふことになる、どうも衛生上から疊は藥ぢやない、其筈です疊は朝鮮の寢床である所謂寢る時に敷く者であつて下は板の間である或は土面である、そんな所に何もなくては寢られぬから疊を敷ては其上にゴロリ／＼寢た、それを日本で用ゐて居る、疊の下は總て板張になつて居る、近頃は大きい病院でも例へば大學の病院赤十字社の病院と云ふ所へ行て見ると皆寢臺です、看護する人も腰掛てやつて居る、廣島なり大阪なり何處でも變らぬ、戰時病院へ行て見ると皆寢臺です、看護婦は腰掛て、醫者も腰掛て診察しなければならぬ譯でどう云ふ譯からそうであるかと云ふと必要上そうなつて居る、疊の上に座つたり立たり、立たり座つたりしては迚も間に合はぬ、勞が多くつて仕方がない。

甚だ定まつて居る、詰らぬことを申して即ち衣食住を改良する基礎となるものは何であるかと云ふと前申した學問で之に對して働きを爲しつゝあるものは日本赤十字社の力でありますから日本赤十字社なるものは全國隅から隅迄盡く行渡るやうになることが即ち我國家

の爲めでありますからどうぞ滿場の諸君も御賛成下さるやうに特に希望致します。

伊藤侯の演說

（銀行倶樂部に於て）

今日の戰爭は日本建國以來初めて遭遇する所の千古未曾有の大事故と考へる、人も尙ほ己の目的を進行するが爲めに生死存亡を賭するが如く國も亦然らざるを得ない、若し今日の戰を避けたならば日本國安全なるかと云ふに左様でない長縮して仕舞ふの外はなかつと云ふ事は、諸君も覺悟しなければならない、長縮したら東洋の一隅に於ける所の一小國たるに過ぎない、若し露國をして其政略を極東に恣にせしめたら如何になる、滿洲朝鮮は勿論の事、日本も亦露國の命令を受けなければならぬと云ふ事になる、果して然らば日本國の獨立及び發達は到底望む事が出來ぬ此故に此戰爭を過めることは出來なかつたのである。固より戰爭と云ふものは申すまでもない、國と國と相對しての爭である、今日世界文明の進化は著しけれども未だ邦國相互の爭を決定する裁判はない故に是非を人類以上に位する所の所謂天神に訴ふる外はない、是に於て干戈に訴へて勝敗を決せんとして居るのが今日の事體である、自ら生存するの理由、斯くの如くならざるを得ぬと云ッて、今日は天に訴へて其存亡勝敗を賭して居る、而して此存亡勝敗を天に訴へて居りつゝ我々の國家の元素と相成つて居る所の國民の子弟は此存亡の爲めに快く戰地に於てドン／＼熱血を注いで死しつゝある、此等の子弟に對して、お互は己れ自ら死ぬると云ふ決心を以て充分の同情を寄せないと云ふことがあつては、一國同胞の感情として義務的道德的に於て濟まぬ譯である。

海外新潮

歐人の眼に映したる日露戰爭

海外大勢

露國將官の無智曚昧

「マイニング、ワールド紙」
「三月十九日」

露國の司令官クロパトキン將軍は已に出發の途に就き、一二週にして戰地に着すべしと傳へらる。彼が佛國新聞記者に向て打明けたる意見を見るに、今日の形勢を辨へざること實に甚しく、局外者たる我英國及び大陸諸國程も明かに其位置を了解せるが如し。彼れ語つて曰く我露國は東京に於て平和條約を締結するにあらざれば決して滿足せざるべしと。彼の下役たるサカロッフ將軍も亦他の佛國新聞記者に同て同様の意見を吐露せり。彼の下役も亦其上官の如く樂天家なりと見えたり。彼は今回の戰爭を意の如く落着せしむるには四十万の兵士を要すべしといひつゝ、日本の兵士は決して二十万を超ゆることなかるべしと考ふるもゝの如し、彼又曰く此等の兵士を輸送するは實に非常の日子を要することなれ

ども、我にとつては何の痛痒をも感ぜずと、日子を要するの事實は人の皆認むる所なれども何の痛痒をも感ぜずとは何たる愚言ぞや、是等の兵士を輸送する時日の短長は、實に重大なる事件にして、日本は如何に之を利用すべきかを了解せり。佛國將軍スタツフ氏の報ずる所によれば。日本の軍隊は單に二十万人に止まらず、實に五十二万一千人の多きと、十万一千の馬と、一千三百六十八の砲數を有するが如し、此等の事實は少しく戰爭の事情に通ずるもの丶明かに了解する所なりと雖も此大膽なる新將軍の目には映ぜぬものと見えたり、下役サカロフ將軍、上官クロパトキンの口吻を摸して曰く「戰爭は日本の内地に於て終りを告げ、條約は東京の市内に於て締結せざるべからず」と此れ恐らく世界のあらゆる滑稽の上乘を占むるものにあらずや。海戰に於ては海軍力の大部を失ひ、陸戰に於ても其形勢頗る宜しからざるの秋に當りて、彼等は如何にして東京に達せんとするか。天人夜下りて彼等に羽衣を給するにあらずんば終に行はるべからざるの恐論なり。然れども是れ恐らくは彼等か事件の重大なるをすら解すること能はず、夢の中に輕々看過する



黄禍は日本民族にあらず
支那民族に在り

問題の一例たるに過ぎざるなり。而して彼等か滿州に於ける四十万の兵士を輸送し又は養はざるべからざる大因難をも同一の樂天觀を以て放棄しあるなり、鐵路は單線にして且つバイカル湖の大障礙あり、彼等の暢氣たるたゞ呆然たるの外なきなり。

露國の軍人はかゝる不智蒙昧の聲を以て充たさるゝより推せば、彼の國人は日本が已に過去十年間鋭意勵精此戰爭に準備し、扨てこそかゝる效果をあらはしたるなれとの尤も重大なる事項を知らざるもの多しと覺えたり。日本の國民は朝夕此大事業を念頭より放たず、之が爲めには如何なるものを犧牲とするも吝まざるの氣概は内國に於て募りたる公債の高が、要求したる金額の四倍に上りたるを以ても明知することを得べきなり。日本の事情に向て精細なる注意を拂はゞ世界如何なる國と雖も之が爲めに蒙を啓かざるものなかるべし。彼の陸軍は今將さに其干戈を手にして來るべき勝利を企圖しつゝあり、而して一方に於ては旅順の砲擊頻りにして、一砲擊每に露國の力は減ぜられつゝあれば遠からずして港の安全を保持すること難きに至るべし。若し長く此港にして

陷落せずんば終に陸兵の攻擊に逢ひ、挾擊の危險に陷るべきや論を待たず、露帝が再びかゝる無智なる將軍に向て大權を附與したるの意は吾人の了解するに苦しむ所なり。

極東に於ける戰爭を評す

「アーミー、アンド、ネーヴイ、ガゼツト紙」

極東の野に於ける陸軍の行動は未だ、かゝる國に於て洪大なる軍隊を上陸又は進行せしむることの困難なる事情に通ぜざる局外者の豫想せしが如く迅速なる發展をなさゞるなり。日本の海軍は實に急激なる打擊を以て露國の艦隊に當り、其際想外なること彼れ日本人すら自ら驚ける程にして、以て敵の海軍力を痲痺せしめたる如く見ゆるなり。吾人は此異常なる海戰の原因を追究せず、又露國の失敗せる說明をもなさゞるべし。たゞ日本が海上に於て優勢を占めたるの一事は實に陸戰に於ける戰略狀態をして全く一變せしめたりといふべし、何となれば日本は今や其氣候風土に從て彼等の好む所の土地に陸兵を上陸せしむるの自由を有すればなり、かるが故に露國は其軍隊を配布するに於て實に非常なる困難を感す、殊に日本の海軍が優勢なるが爲めに露兵は鴨綠江を超えて進行するは到底不可能の事に屬す。

平壤が朝鮮半島の北部に於ける兩國の戰鬪地たるべしとは兼て豫想せられたる所たりきと雖も日本が仁川に上陸し、京城を占領せし結果、直ちに平壤に進みて以て之を占領し海軍の基礎を鎭南浦に進めたり。若し露軍にして平壤に進めば直ちに海軍に脅かさるゝ危險あるに加へて、夫れよりも北方に進むべき日本軍の爲めに挾擊せられて實に死地に陷るべきものなり、夫れ故に鴨綠江と遼陽の間に於ては大いなる陸戰の起らざるべきは事實なり、而して若し一旦氷の融解する時機に至れば日本軍は半島の反對側なる牛莊に上陸するを得べく、鐵路によつて遼陽に進行することと容易なるべし、かゝる事情より推測を下すときは大戰の起るべきは其地の南、即ち奉天の邊なるべしと思はるゝなり。

而して一方に於て旅順港の位置を考ふるに若し日本が遼東半島に上陸すれば此城郭の通行絕たれ、軍隊の强き一躰が南方に於ては營泥窪、北方に於ては金州の海岸に置かるべきは確かなるが如し、

露人は旅順を保持するには實に多數の軍隊を要すべきを自覺し、或一雜誌は鐵道、電信は海岸近くまで敷設しあるを以て此點に於ては尤も少數の軍隊を以ても露國の通信を絕つこと容易なるべきを自白したり。されば旅順は日本によりて海陸より圍まるゝの危險に迫りつゝあるものといふを得べく、日本は已に海軍の根據地を海洋島に於ける港灣に置め今や其行動を計畫しつゝあるものゝ如し、

然れども旅順の陷落は露國に取りて尤も重大なる事件なるを以て一大激戰なくして占領することは到底不可能のことなるべし。何となれば此港の陷落は此地に集合せる露國艦隊の全滅即ち極東に於ける露國海軍力の皆無に歸するの日なればなり、若し旅順が陷落し、露兵は奉天の方に向て退却したりとせんか、日本の成効は實に大いなりといふべきも而かも日本の前途には尙一層困難なる事情の横はるあるなり。軍人の熟知するが如く、軍隊が其根據地を離れて他國の內地に入り込むは實に一足毎に重き鎖を引き行くが如く、其困難や想像すること能はざる程なり。其道路や今將に融解し初めたる霜を以て通行し難く次に來るべき一ケ月の間は稍々可なりと雖もそを經過すれば又降雨の時機となりて再び通行し難きに加へて惡疫の流行するあり、其困難實に容易の事にあらざるべし。

最近に於ける浦鹽斯德の砲擊は日本がポイセツト灣より進みて琿春及び

寄古塔を通過し終に浦鹽斯德と哈拉賓の間の鐵道に達せんとするの希望を有することを示すが如し。而して其距離は三十哩にして山深く、木繁れり、以て其進行の運かるべきを察すべし。然れども若し浦鹽斯德が占領せられ又は圍まるゝにあらずんば其通信は危險となるの恐れあり、されど又日本が絶えず増加する露軍に向て進行を續けなば彼等は露軍の集冲せざる以前に於て激烈にして迅速なる打擊を加へざるべからざるなり。而かも此事をなさんと欲せば大軍を準備し、尤も嚴肅なる態度を取らざるべからず、日本が果して此事に成効すべきや否や、若し不幸にして失敗に了らんか切角南部にて得たる勝利も水泡に歸せんなり。露國の陸軍は其艦隊の如く、しかく不完のものにあらず、日本の困難は今後一層甚しかるべきなり。

科學的戰爭

「三月十五日」　　「デーリー、エッキスプレッス紙」

最近に於ける旅順攻擊の報告は科學的戰爭の尤も著しき例なり。東鄉司令官の戰鬪艦が發火しつゝある間に其巡洋艦は港灣の反對の側に止り、彈丸の効果を撿し、無線電信によりて其報告をなしたるが故に砲手を益したること實に小少ならずといふ。無線電信の戰爭に於ける効用は屢ゝ論議せられたりと雖も、かゝる特殊なる方途に利用せらるべしとは未だ甞て夢想だにせられざりき。單に通信を助くるのみにあらず、又發砲に向て正確なる方向を指示するか如きに至りては實に驚くべきの至りにあらずや。其發明者マルコニ氏と雖も其發明が戰爭のかゝる恐るべき機關となるべしとは恐らく思ひ浮べざりし所なるべし。



日本の武官外國從軍記者の通信文を檢す

日本人は終始吾人に向て嚴格なる思考の材料を給す。彼等のよく物を會得するは殆んど他に類例を見ず、彼等は舊習に束縛せらるゝことを忌み、新らしきもの、珍らしきものは悉く收めて自家藥籠中のものとなし、且つ之を時機に應じて利用することを能くす。彼等は所謂科學的戰爭を爲しつゝあるものといふべし、而して之れ恐らく尤も經濟的なるものなるべし、何となれば之によりて生命又は金錢を浪費す

ること少なく、各彈丸皆よく其功を奏すべければなり。

今や將に一大陸戰の機に近からんとす、夫れ故に今日に於て最後の斷定を下すは早計に失すべしと雖も、此科學的戰爭が古の野蠻的戰爭よりも大に效果の多かるべきは疑を容れざるなり。人間は元來臆病なる動物なり、たゞ訓練と教育によりて其本能的恐怖心を制することを得べし、古は身に甲冑を纏ひ、手に刀槍を携へて一騎打の場合多かりしと雖も、今ば鐵丸一度飛べば數哩離れたる數百の人を殺す。科學の戰爭に及ぼせる影響は實に驚くべきものにして且つ、年を追うて益ゝ然るべきは明かなる事實なり。而して日本は最新の科學を尤もよく應用したるものとして賞揚せらるべきものなりとす。

戰爭の費用

「デーリー、クロニクル」

「三月十七日」

戰爭の出來事中今日尤も注目すべきは經濟界の狀況なり、東京よりの通信によれば、日本は此戰爭に就て一週一百万磅―即ち一年五千万磅―の費用を要すといふ。是れを吾人の南亞戰爭が年々要せし費用に比すれば約半額に過ぎず。然れども此費用が日本にとりて比較的過大なるべきは疑を容れず。英國の歲入は軍費の金額を上ること遙かに多かりしも、日本の軍費は其歲入の殆んど二倍なるに加ふるに日本は固より英國程の信用を有せず、其經濟界の困難實に察するに餘りあり。

露國の軍費は遙かに日本より多きは疑を容れず、然れども其困難は比較的小少なるべしと察せらる。戰時に於ける財界の優劣は兵力のそれに讓らざる重大なる問題なり。此戰爭を成るべく長びかせんとするは露國の策略にして、成るべく早く步武を進めんとするは日本の希望なり、現今にありては氷結が實に一大障壁なりと雖も、其融解するの日は事件の進行甚だ速かなるべし、かゝる時にあたりて臆測を逞うするも何の益なきことなれども、財政問題と軍略とは兩々手を携へざるべからざるは明かなる事實なり。思ふに露國の策略ば退却するにあるべし、退却するに從つて其費用は減少し、日本の費用は增大す。日本は又其軍費を顧慮して漫りに內地に浸入することを敢てせざるべく、且つ彼等の最大要素たる海岸より遠く離るゝことを企てざるべきは明白の事に屬す、然れども是等は未だ遠き未來のことなり。今に於て日本が最大の目的とする所は勿論族順の占領にあるべし。是れ陸軍の運動を助け、國民の自負心を滿たし、國家の威名を輝かすのみならず、實に又大いなる經濟上の利益なればなり、かるが故に一方に於ては露國も死力を盡して其防禦に當りつゝあるなり、吾等は括目して此事件の進行を注視するを怠らざるべし。

戰時に於ける日本の財政

「デーリー、メール紙」

「三月十七日」

東京よりの通信によれば、日本は今回の戰爭を以て長年月に亘るものと見做し、大に其準備に着手しつゝあるものゝ如し、而して今其軍備金を募集するの模樣を開くに、此戰爭を以て來る十二月まで繼續するものと豫測し、一週一百万磅の費用なれば全額五千三百六十万磅を準備せんとしつゝありといふ。

現時に於ける日本の財界と、南亞戰爭の際に於ける英國のそれとを比較するは少からざる智識を供給す。吾人は僅かに一千万磅の費用を以て全く征服するを得べしとの覺悟を以て南亞に向ひたり、然るに世人の記臆するが如く實際の費用は大藏大臣の備へたる金の廿五六倍の巨額に上り、國內の財界は少からざる紊亂を來たしたり。若し日本にして一步を誤らば當さに吾人と同一の方向に出でざるを得ざるべし。而して日本は

貧國なれば英國に比するに一層重大なる結果となるべきは疑を容れず、然れども日本は過去の節儉と經濟は實に宜しきを得しを以て、今日の財界は强固なる位置にあるなり。彼の負債は僅少にして其商業は日に月に跳躍して進歩しつゝあり、而して經濟界の大立物プリンクーレー氏の明言せるが如く日本の國民が租税に堪ゆる力は年々増加し、現今は驚くべき高度にあることは尤も賴み强きことなりといふべし。

日本は早晩外國の市場に於て公債を募集すべきは事實なるが、彼が戰爭に於て優勝を示したるの理由により、必ず好意を以て應ぜらるべきを疑はず、若し彼にして自ら知るの明あらば適宜なる利子によりて公債を募ることを計り一定の資産を抵當となすに若かず、若し其擧に出でなば、今日五分以上の利子を拂ふ金額に對して四分を起ゆる些末たる利子を以て募集するを得べきも、國氏の自負心はかゝる擧動に出づることを好まざるべし、日本政府は國内の鐵道組織に於て大いなる價ある資産を有し、且つ必要の場合に迫れば關税の一部を抵當とすることも傳ふべきなり。

今回の戰爭が要する洪大なる費用は世界何れの資本家にも其影響を及ぼさゞるなかるべし。露國の要求も亦日本のそれに劣らず、必ず世界の市場に來て戰爭を維持すべき公債を募るべきは明白の事實なり。露國の資用は必らず日本のそれに勝り、軍隊に要するあらゆる物品及び軍隊夫れ自身さへ歐洲より其領地の果てまで遠く輸送せられざるべからざるなり、夫れ故に世界の市場は近き未來に於て大いなる變化を來たし、其利子の四分となるか、五分となるかは歐米の經濟界に向て大影響を齎らすべき事項なるを以て、苟も財政に志あるもの決して注目を怠るべからざる時機なりといふべし。



東郷司令長官旅順罇の口を塞がんとす

歐洲と戰爭

「三月十七日」

「ブリッテッシュ、ウイークレー紙」

最近に於ける尤も重要なる出來事は木曜日に於て日本艦隊が旅順砲擊を行ひたることなるべし、兩敵國の艦隊は港口に於て接戰し、露艦は一艘沈沒と四十の死者を出したり、日本の艦隊に於ても多少の損傷を出したるべしと雖も其勝利は東郷氏の手に歸し、其砲烈彈はよく功を奏して旅順陷落の風聞が四方に

ることを少なく、各彈丸皆よく其功を奏せざるべければなり。今や將に一大陸戰の機に近からんとす、夫れ故に今日に於て最後の斷定を下すは早計に失すべしと雖も、此科學的戰爭が古の野蠻的戰爭よりも大に効果の多かるべきは疑を容れざるなり。人間は元來臆病なる動物なり、たゞ訓練と教育によりて其本能的恐怖心を制することを得べし、古は身に甲冑を纏ひ、手に刀槍を携へて一騎打の場合多かりしと雖も、今ば鐵丸一度飛べば數哩離れたる數百の人を殺す。科學の戰爭に及ぼせる影響は實に驚くべきものにして且つ、年を追うて益々然るべきは明かなる事實なり。而して日本は最新の科學を尤もよく應用したるものとして賞揚せらるべきものなりとす。

戰爭の費用

「デーリー、クロニクル」

「三月十七日」

戰爭の出來事中今日尤も注目すべきは經濟界の狀況なり、東京よりの通信によれば、日本は此戰爭に就て一週一百万磅—即ち一年五千万磅—の費用を要すといふ。是れを吾人の南亞戰爭が年々要せし費用に比すれば約半額に過ぎず。然れども此費用が日本にとりて比較的過大なるべきは疑を容れず。英國の歲入は軍費の金額を上ること遙かに多かりしも、日本の軍費は其歲入の殆んど二倍なるに加ふるに日本は固より英國程の信用を有せず、其經濟界の困難實に察するに餘りあり。露國の軍費は遙かに日本より多きは疑を容れず、然れども其困難は比較的小少なるべしと察せらる。戰時に於ける財界の優劣は兵力のそれに讓らざる重大なる問題なり。此戰爭を成るべく長びかせんとするは露國の策略にして、成るべく早く步武を進めんとするは日本の希望なり、現今にありては氷結が實に一大障礙なりと雖も、其融解するの日は事件の進行甚だ速かなるべし、かゝる時にあたりて臆測を逞うするも何の益なきことなれども、財政問題と軍略とは兩々手を携へざるべからざるは明かなる事實なり。思ふに露國の策略ば退却するにあるべし、退却するに從つて其費用は減少し、日本の費用は增大す。日本は又其軍費を顧慮して漫りに內地に浸入することを敢てせざるべく、且つ彼等の最大要素たる海岸より遠く離るゝことを企てざるべきは明白の事に屬す、然れども是等は未だ遠き未來のことなり。今に於て日本が最大の目的とする所は勿論旅順の占領にあるべし。是れ陸軍の運動を助け、國民の自負心を滿たし、國家の威名を輝かすのみならず、實に又大いなる經濟上の利益なればなり、かるが故に一方に於ては露國も死力を盡して其防禦に當りつゝあるなり、吾等は括目して此事件の進行を注視するを怠らざるべし。

戰時に於ける日本の財政

「デーリー、メール紙」

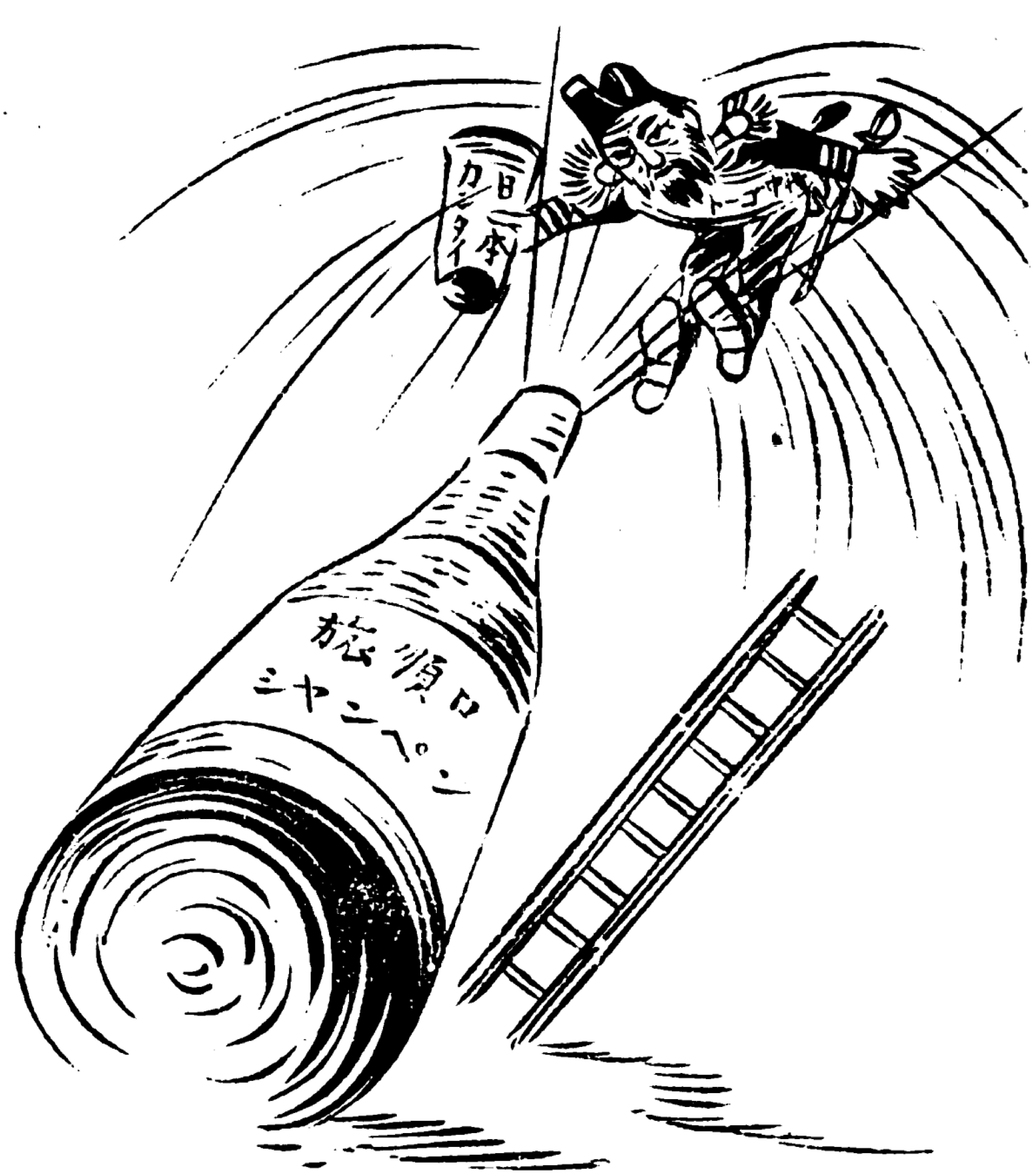
「三月十七日」

東京よりの通信によれば、日本は今回の戰爭を以て長年月に亘るものと見做し、大に其準備に着手しつゝあるものゝ如し、而して今其軍備金を募集するの模樣を開くに、此戰爭を以て來る十二月まで繼續するものと豫測し、一週一百万磅の費用なれば全額五千三百六十万磅を準備せんとしつゝありといふ。現時に於ける日本の財界と、南亞戰爭の際に於ける英國のそれとを比較するは少からざる智識を供給す。吾人は僅かに一千万磅の費用を以て全く征服するを得べしとの覺悟を以て南亞に向ひたり、然るに世人の記臆するが如く實際の費用は大藏大臣の備へたる金の廿五六倍の巨額に上り、國內の財界は少からざる紊亂を來たしたり。若し日本にして一步を誤らば當さに吾人と同一の方向に出でざるを得ざるべし。而して日本は

貧國なれば英國に比するに一層重大なる結果となるべきは疑を容れず、然れども日本は過去の節儉と經濟は實に宜しきを得しを以て、今日の財界は强固なる位置にあるなり。彼の負債は僅少にして其商業は日に月に跳躍して進歩しつゝあり、而して經濟界の大立物ブリンクーレー氏の明言せるが如く日本の國民が租税に堪ゆる力は年々増加し、現今は驚くべき高度にあることは尤も賴み强きことなりといふべし。

日本は早晩外國の市場に於て公債を募集すべきは事實なるが、彼が戰爭に於て優勝を示したるの理由により、必ず好意を以て應ぜらるべきを疑はず、若し彼にして自ら知るの明あらば適宜なる利子によりて公債を募ることを許り一定の資産を抵當となすに若かず、若し其擧に出てなば、今日五分以上の利子を拂ふ金額に對して四分を起ゆる些末たる利子を以て募集するを得べきも、國氏の自負心はかゝる擧動に出づることを好まざるべし、日本政府は國内の鐵道組織に於て大いなる價ある資産を有し、且つ必要の場合に迫れば關税の一部を抵當とすることも傳ふべきなり。

今回の戰爭が要する洪大なる費用は世界何れの資本家にも其影響を及ぼさゞるなかるべし。露國の要求も亦日本のそれに劣らず、必ず世界の市場に來て戰爭を維持すべき公債を募るべきは明白の事實なり。露國の費用は必らず日本のそれに勝り、軍隊に要するあらゆる物品及び軍隊夫れ自身さへ歐洲より其領地の果てまで遠く輸送せられざるべからざるなり、夫れ故に世界の市場は近き未來に於て大いなる變化を來たし、其利子の四分となるか、五分となるかは歐米の經濟界に向て大影響を齎らすべき事項なるを以て、苟も財政に志あるもの決して注目を怠るべからざる時機なりといふべし。



東郷司令長官旅順壜の口を塞がんとす

歐洲と戰爭

「三月十七日」

「ブリッテッシユ、ウイークレー紙」

最近に於ける尤も重要なる出來事は木曜日に於て日本艦隊が旅順砲擊を行ひたることなるべし、兩敵國の艦隊は港口に於て接戰し、露艦は一艘沈沒と四十の死者を出したり、日本の艦隊に於ても多少の損傷を出したるべしと雖も其勝利は東郷氏の手に歸し、其砲烈彈はよく功を奏して旅順陷落の風聞が四方に

傳へられたる程なりしなり。然れどもそは所謂風聞にして未だ何等の確報なく、露國は大いに其無根なるを主張しつゝあり。されど各攻擊俘に露國は其勢力を弱め、長く其敗を恢復する能はざるべきは事實なるが如し。又日本の陸軍は奉天の方向に其歩武を進めたるを以てクロパトキン將軍が其の旅行を終る以前に於て一大戰を見るやも計り知るべからず、日本に於て發せられたる勅諭は京城通信員の報告と連結して讀まざるべからず。日本政府は朝鮮國を以て其管理の下に置き且つ國王を以て其兵力の監視の下に立たしむべきを誓て宣言したることなきを斷乎として主張す。然れどもベンネット、バーレー氏は電信を以て報じて曰く日本人は朝鮮宮廷及び官吏を全く勢力の下に置き露人は全く黜職せられたりと。

日本人は實際の上に於て朝鮮の政府を取りたり、其軍隊は國境を壓し、國王は全く捕虜の如き狀態となり、伊藤侯は官廷に於ける長官の如き姿に見ゆ。日本は其目的朝鮮の獨立を維持するにあることを屢々揚言したりと雖も、今日彼の行動を見るに全土地を占領したるが如き形跡あり、大陸諸國は其行動を目して大膽なる侵伐なりと憤るに至りたるも怪しむに足らざるなり。日本の迅速なる勝利は歐洲の平和に對して恐るべき防害を與へつゝあり、歐洲の諸國は亞細亞の人民によつて露國の全敗に踪するを甘んじ居るべきものにあらず、吾人が日本と同盟したるを恐るゝは獨り露國の敵となりたるのみならず、實に全歐洲の敵となるべき危險に陷りつゝあればなり、吾人は亞米利加と雖も、日本に對して實際の助力を與へず、たゞ一片の同情を寄するに過ぎざることを信ずるものなるを以て、此際一嶋國の睦ゆき成効に迷い、以て來るべき厳格なる問題に盲することなからんを忠告せずんばあらず

奇怪なる豫言

「スケッチ」

數年間日本に在りし米國の法律教授は、今回の日露戰爭を評して曰く、今廿五才以上の人は何人と雖も此戰爭の終局を見ることを得ざるべし、何となれば此戰爭は單に大いなる戰鬪の手始めに過ぎざず、次いで來るべき大戰鬪は世界のあらゆる勢力を含みたる實に怖るべきものにして、世界の局面に一大變化を起し、五十年の戰鬪の終りたる日は、世界の文明國民の間に支那帝國の包括せらるゝことによりて初めて、極東問題の落着を見るべしと。若し教授の言にして眞なりとすれば、吾人は前世紀の初頭に於ける那翁戰爭の如きも到底比較すべからざる程大いなる戰鬪の開始せんとする時に際會しつゝありといふべし。

露帝と戰爭

「デーリー、クロニクル紙」

「三月廿二日」

セント、ピータースバルクよりの通信によれば、露帝は來る八月に於て其居を戰地に近く進むへしといひ傳へらる。其余と其年月とは中に重大なる意義を有す。此戰爭は其開始せられし當時或一部の人が想像せし如く、短日月の間に決着すべきものにあらずとは今や多くの人が認めつゝある事實なるが如し。露軍は極東に於て屢々敗を取りし結果、今や實際の敗軍に先ちて早く巳に敗報が傳へらるゝ程、ある英國新聞の信用を落したり。然れども露國は靜かに彼等の時機を待ちつゝあるなり、若し露帝にして其駕を進めんか、必ずや大に軍勢を鼓舞すべく、又露帝自身の戰爭熱も昂揚すべきなり。戰爭の開始前には多くの希望が露帝の平和好きなる性格の上に懸れり。彼れが平和好きなるは事實なれども、さりとて

彼は自國の膨大又は撃退に關して全く無關係のものにあらず。否な極東に於ける露國の膨大は殊に深き露帝の希望なりしことは忘るべからざる事實なり。兎に角露帝の駕を進めんとするは輕々看過すべからざることなりといふべし。

海外雜纂

外人より觀たる大隈伯

「三月十五日」「ワールド紙」

伊藤侯、山縣將軍、及び大隈伯は、日本が現今有する三大偉人にして國民の崇拜しつゝある所なり。而して此三人中にありて最後の大隈伯は最も偉大なるもの又は最も人望あるものにはあらずと雖も、而かも或點に於て最も興味ある人物なり。何となれば侯及び將軍は少くとも外觀上歐化したる人物なりと雖も、伯に至りては純粹の日本人、標本的日本人にして、彼の國民のあらゆる美點を備へ、又其弱點と其短所とを少からず有するものなればなり。彼は實に彼の國の人格化したるものにして、日本が考へ、感じ、望み又は恐るゝ所を知るのみに止まらず又彼自身も日本と同様に考へ、感じ、望み又は恐れつゝあるなり。彼は日本のあらゆる希望と嫌惡と夢想と野心とを一身に分つものなるを以て、彼は他人の談じ能はざる所を說破するの妙を得たり。かゝるが故に如何なる場合に於て日本の爲さんとする所を知らんと欲せば彼の行動を注目して以て察するを得べきなり。



小男大男をいぢめる

大隈伯は一大雄辯家なり、日本に於ける尤も大いなる雄辯家なり。而して日本人は實に雄辯の國民なり。彼が其反對者を攻擊しつゝある時又は其友人を賞讃しつゝある時に於ても彼の演說は實に完全なる雄辯の模範なり。一度演壇に立つや彼は恰かも生れ變はりし人の如く敵も味方も皆一樣に耳傾け皆一樣に拍手喝采す。彼は又日本に於ける尤も禮儀ある人なり。而して日本人は禮儀あるを以て誇りとする國民なり。彼嘗て外國の一外交官が、彼の家を去らんとする時に微笑して曰く「願はくは予が君を送らざる無禮を許せ」と。當時彼は彼の官邸の病床に橫はり實に生死の苦痛に冒されつゝありし時なり、何となれば一狂者が大臣として。彼の行蹟に不平を抱き爆烈彈を馬

車に投して彼の從僕馬丁を殺し、且つ彼の足を傷けたりし時なればなり。

大隈伯が最初に頭角を顯はせしは實に一千八百六十八年に於ける維新の改革の時にありしなり、當時彼は大名なりしと雖も、自ら其土地を皇帝に還附し、大名なるものゝ權を挫がんことに全力を注げり。彼、伊藤及び山縣は皆當時同樣の思想に動かされて同方面に活動せる人物なり。而して現に今日と雖も外觀上は兎も角、內實は皆同一の目的の爲めに活動するものなり。何となれば三人は皆其全力を擧げて彼の國の爲めに盡さんとするの熱望を有するものなればなり。かるが故に三人の有する黨派は各々異なりと雖も彼等の間には皆多少の同情を有する如く思はる。

大隈伯は獨り進步黨の首領なるのみならず、又實に政府反對黨の首領なり、若し彼を目して反對黨の首領となさずんば、日本には正しき反對黨なるものなし。何となれば彼は其余生涯を日本に於て送りたりしと雖も歐米の事情に通ずるに於ては如何なる日本人否な伊藤侯よりも遙かに勝れたる智識を有するなり、而して彼は若し一國にして議會を有し善良なる政府を作らんとせば。政府黨のみならず、又勢力ある反對黨を有せざるべからざる事情に通ずるを以て、皇帝が憲法を發布するや否や彼は直ちに反對黨を作りて以て皇帝を助けんとしたり、而して選擧の終るや彼の作りたる反對黨は遙かに政府黨よりも優勢なりし程大いなる成功を遂げたり、故に若し議會制度に從へば彼は直ちに總理の位置に立つべきものなりしと雖も然れども總理の職に當らんは彼の希望にあらず、又彼の嗜好に適するものにあらざるを以て斷然之を拒絶しぬ。爾來彼は大藏大臣の職に當り、又總理の任に附きしこともありしと雖も、彼は寧ろ之を嫌惡したり。何となれば彼はよく自己を知るの明を有し、己れはかゝる職に當らんよりも却て反對黨の首領として國家に貢献すべき所多きを自覺したればなり。而して彼がかく反對黨の首領となるには己れの利益を計るにあらずして全く國家の爲めに盡さんとする念より起れることは日清戰爭⊙當時及び今回の日露戰爭に於て之をを証して餘りあるなり何となればかゝる時に當りて彼程剛毅に政府を保護するもの他に類例を見ざればなり。

然れども大隈伯の尤も大いなる事業は政治家としてにあらずして、寧ろ教育家としてにあり、彼は實に純然たる東洋人なりと雖も其門下には甚しき西洋崇拜家を出し、又自身も熱心なる西洋文明の推奬家なる程西洋の文物に通曉せり。即ち彼が三十年間教育に盡瘁したるは、恰かも山縣が陸軍の訓練に從事し、伊藤が政治の發展に努力したるが如く、而して尤もよく其効果を收めたり。世界に於ける如何なる國と雖も近時に於ける日本の教育程迅速なる進步をなせしものはあらじ。如何なる村落と雖も今は小學の設あり、如何なる小兒も皆八年間之に通學せざるべからず、而して少しく大いなる市府に至れば更に高等の教育、專門の學問を授くる學校を有せざるなし。之れ大隈伯の與かりて力あることにして國民は大いに彼に感謝せざるべからざるの義務を有す。何となれば彼は單に政府に勸めて教育上に施設する所多かりしのみならず、又自ら金錢を投じて學校を設立し、大に高等教育の普及に盡力し、自ら其管理に當りたればなり、而して彼は、若し日本にして西洋文明諸國と相馳逐して敗を取らざらんとすれば、必らず教育の力によらざるべからざることを固く信ずるものなり、彼が日本の人種を信ずること實に無限たり日本人は其性質善良、其天賦賢明他に種類なしとは彼の胸中の自信にして、只だ歐米に一歩を輸するは教育のみなれば全力を盡して教育に從事せざるべからずとは彼の決心なるが如し。

伯は又實に非常なる富を有す、而して是れ全く經濟家としての彼の才識

に負ふものに外ならず、元來彼は武士の家に生れて職業を蔑視し、金錢を輕視するの教育を受けながら、而かも金錢を得るに妙を得、且つ熱心に之を蓄積すること恰かも教育事業に盡瘁するに譲らざるは實に奇觀なりといふべし。然れども是れ毫も怪むに足らず、何となれば彼は已れの私慾の爲めに金錢を集むるにあらずして、已れの事業、已れの新聞、殊に已れの愛する學校の爲めに金錢を要すること大なるを以てなり。而して彼は西洋の文物を崇拜すと雖も、決して之に心醉するにあらず、日本は斷然日本人の手によりて維持し、決して外人の干渉を受くべからざるものなりとなし、若し外人にして日本の有益なることをなすにあらずんば毫も其滯留を願ふべき理由なしとなせり、彼の有する此主義思想は著しく、其學風に影響を及ぼし、彼の學校に雇はるゝ外人の教師は皆日本人に適するが如き訓練を施さざるべからざる約束の下にあるなり。大隈伯は寧ろ狹隘とも目すべきかゝる見解を持する人なるに拘らず、東京に近き早稻田に建てられたる彼の美麗なる邸宅を訪問する外人に對しては常に鄭重なる歡迎を與へ、若し談教育上のことに及び、且つ最進教育のことに就て有益なる談話をなさんか、彼は喜びて如何なるを事も其人の爲めになすへきなり。彼は其外人を時に一方の日本風の邸宅に招ぎ—一方は全く日本風にして一方は全く歐米風の邸宅なり—以て自國の料理又は酒を饗することとあるなり。

現代に對するマッシュー、アーノルド氏の使命

「四月十六日」「リテラリー、ダイセスト誌」

一はダウソン氏の手により、一はラッセル氏の筆よりて殆んど同時に出版せられたるマッシュー、アーノルド氏の研究は、世人が漸く此偉人の生涯及び著作に大いなる興味を生じ來りたることを證して餘りあるなり。

ダウソン氏は開卷筆を起して曰く「今日は實にマッシュー、アーノルド氏を崇拜すべき時代なり一世の傾向は漸く彼の觀破せる所と符合し、且つ之に反する種々なる勢力を控きて以て人間胸奥の尤も健全なる本能及び世界文明の尤も純粹なる趣味を求めざるべからざるの時機に遭遇したるなれば、彼の崇拜熱の漸々高まるべきは毫も疑を容れざる所なり」と

ダウソン氏の主張を一言にして掩へば「マッシュー、アーノルド氏の崇拜は即ち理想の崇拜なり」。其哲學的見解は暫らく措き、人生の尤も價ある活ける主義として完全を追究することを指示したるは彼の滅すべからざる大功なり。彼が永久の勢力を有すべきは詩人としてにあらず、文學的論文家としてにあらず、實に社會、宗教、政治の批評家として、完全を追究すべきを推奬したる所に在るなりと。アーノルド氏が此三方面に於て寄與したる効果の細大はダウソン氏の著作によつて洩れなく記述せられたり。

ラッセル氏は之に反して、彼の全著作を觀察批評し、尤も大體に亘る記述を試みたりと雖も、其所説を約して歸着する所を求むれば、終にダウソン氏の論斷と大差なきにいたるが如し、今ラッセル氏が詩人としてのアーノルド氏を論じたる條を引用せんに

「彼は決して大詩人にあらざりき、何となれば彼は多數の讀者を空想の翼に載せて塵外高く飛ばしめ、又は世人の感興を湧かしむる程の天才を有せざりき、然れども彼は眞正の詩人にして、少數の讀者に愛誦せられ、又之を教育するの任務を盡したるものなり。屢々美の契點を捕へて其興味津々として盡きざる、常に純潔高尙にして絕えて塵界の面影を留めざ

ろ、彼はあらゆる大家の中に入りて決して遜色あるものにあらざるなり。彼は同時代の詩人中にありてチルッチルス派に屬せしのみあらず、又實に此大詩人と酷似せる所少からざるなり。彼が自ら詩人としての己れの位置を判じたるは一千八百六十九年の書簡に於て明なかり、彼記して曰く予の詩は大體に於て世紀の終りに於ける人心の最も主なる運動を記したるものなり、かゝるが故に世人が人心の運動の如何なるものなるかを解し且つ之を反映したる詩歌を愛誦するに至れば予の詩も亦讀まるゝ時あるに至るべし、予がテニズン氏よりも詩情に乏しく、又ブラウニング氏よりも智力才力の乏しきは尤も明かなる事實なれども予は恐らく此等の二氏よりも多くの融化力を有し、且つ之を近世文明の發展に利用すべき方法を知るものなれば予も亦決して無用のものにあらず、彼等と共に適宜の注目を拂はるべきを信ずるものなり」と

散文家としての彼を見んにラッセル氏は記して曰く

「彼は實に文體の大家にして一個獨得の趣を有す、其文の明斷なるは尤も著しき特徵にして、之に加ふる美辭麗句珠玉を連ぬるが如く而かも尤も自然にして斧鑿の跟を止めず、平易にして拮屈の弊なきにあるなり」

彼が生前批評家として尤も大いなる名聲を博せしは

「彼が書籍の批評を草するや、其趣味、其性情、其判斷殆んど誤りなく書きあらはされ、人間の要求を尤もよくあらはしたるホーマー、ソホクレス、セークスペア、ミルトン、ゲーテ等の大家を讃美するや尤も自然にして熱心を極め、他の累々たる批評家輩の遠く及ぶところにあらざりしなり。然れども彼は決して其美名に眩惑して其缺點をも見出さゞる程の愚なる者にあらず、よくバーク及びテーロアの贅言多き、チルッチルスの無韻（ブランクヴァース）話の平板なる、マコーレーの千篇一律、及びラスキンの用語の不自然なる等を指摘したり、彼は小事に對するも大事件に對する如く少しも謹愼の態度を失はず、如何なる著作と雖も其閲讀したるものは明瞭にして同情深く且つ眞實なる批評を下したり。」

「英國は最初に彼を詩人として知り、後文學的批評家として彼を目したり、然れども最後に彼は教育的改革者にして其指示せる所は實に後人の準據すべき所たるを知らるゝの日は近きぬ。今や將さに彼の實際的功勳があらはれ其前に閉ぢされし大いなる門は開かれんとす。彼の所說は全國人の理想及び迷妄を批判して有力なる感化を及ぼすべき新時機に際過し、其生活其思想行動、其偏見俗說等は悉く彼の所說によりて改善せらるべき機運に向へたり」

「彼れアーノルド氏は英國の英雄を輕視し、英國の功勳を蔑如し、在來の豫言を疑ひ、當來の希望を嘲けれり、彼は英人に告ぐるに彼等は深き迷ひの國民にして、其政治的改革は總て器械的皮相的にして毫も益なさゞることを以てし、且つ眞正の政治は社會の改革より着手せざるべからざることを叫びたり」

「彼はかく器械的政治、理論的政府、及び言論の放縱等を冷笑したりと雖も又一方に於ては大いに歴史及び國民の經歴を重視すべきことを教へ又外部の優美、壯嚴、華麗等は文明に缺くべからざる要素なることを說けり、而して彼の尤も主張したる所は即ち國民の教化にして其理想、其美感、及び智力德育の發展如何は人間を批判する最大なる評準にして、石炭の多寡、商業の盛衰、資本の增減、鐵道の長短の如きは毫も人間の價値を上下し得べきものにあらずとなし、殊に宗教を以て國民の教育に資すべき最大要素と斷言したり」

「四月十六日」「リテラリー、ダイゼスト誌」

朝鮮に於ける鑛物の豐富

朝鮮は金、銅、銀及び鐵の鑛山を有すること多く、外に尚石腦油の蓄溜を有するなり。

此國に於ける金鑛の產額は年々增加し一千八百九十八年より一千九百二年に至るまで僅々五年の間に於て二倍以上の增加を見るに至りたり、今之を表によりて示せば左の如し

一千八百九十八年	一、二〇〇、〇〇〇磅
一千八百九十九年	一、六〇〇、〇〇〇
一千九百年	一、八〇〇、〇〇〇
一千九百〇一年	二、五〇〇、〇〇〇
一千九百〇二年	二、六〇〇、〇〇〇

而して此等の金鑛の多くは日本に輸送せらるゝなり、鐵及び石炭の鑛山は其數甚だ多しと雖も、其採掘せらるゝは極めて少し、銅は數個所に於て採掘せられ、過去二年間の產出額五十六万四千四百三十三磅に上れり。朝鮮に於ける鑛山は國王の財產にして、之を採掘する人は特別なる允許を得ざるべからざるなり。而して朝鮮人は外國人を嫌惡すること尤も甚しき人種なれば之が事業を初めんとすれば先づ大いなる困難に打勝たざるべからざることを覺悟せざるべからず。

佛蘭西の音樂制度

「リテラリー、ダイゼスト誌」
「四月九日」

佛蘭西にては音樂の學生は九才にして學校に入り而して四十九才まで一厘の費用も要することなくして其學校に止ることを得べし、尤も初歩の音樂より其最奥の研究に至るまで總て政府の費用によりて此れを奬勵し、以て國民の趣味を高めんとしつゝあり。

其教育の制度は全く他國に於ける普通教育の如く、生徒は數組に分たれ、試驗を受け、以て卒業するの順序にして其教授法は最近の教育學を音樂に應用したるものなり、かゝる完備なる制度を以て音樂を推奬す、名人巧手の輩出する實に偶然ならずといふべし。

●米人の見たる決死隊

紐育のカマーシャル　アドヴアタイザー我が決死隊の精神を記して曰く

ケッシタイは之を英譯して "determined to die" となる、此の語はサムライノの言語中最も尊む可き形容詞の一にして日本の武士的階級の烈誠を語るものなり然かも "determined to die" なる語は的確なる譯語に非ず日本のケッシタイは夫のイスラムの惑溺者即ち武士の魂は戰場より直ちに極樂に行く可きものなりとなし其の之に達する捷徑として敵の手に掛りて死せんことを求むるものとは劃然たる區別ありケッシタイの精神は彼に比し一層靜冷にして緻密なり其根本的動機は自ら殺すに非ずして敵に對し膺懲を加へんとするにあり死を輕んずると同時に人若し死せば再び敵に損傷を加ふる能はざるを知る故に生命は彈藥と等しく節約せられ徒に之を費消せざるなり日本の武士的信條は死は無益なりとするも尙ほ且つ榮光を有すとは教へざるなり故に注意に加ふるに勇氣あり故にケッシタイは二倍に猛烈なり。

西人は日本人の性質を了解するに困む蓋し日本人には現世紀流と中世紀流の混合あり西洋流と東洋流の盟合あり迷信と科學の縫合あり西人が日本人の性質を解する能はざる素より其の處といふべし日本は熱狂と冷靜なる行動猛烈と巨智識、最も勁烈なる武斷主義と軍艦に對して花の名を付するが如き心を一致せしむるを得たり思ふに世界中斯くの如く戰爭的にして斯くの如く平和的たり斯くの如く男子的にして斯くの如く婦女的たり斯くの如く小供的にして斯くの如く大人的たり斯くの如く猛烈にして斯くの如く禮儀ある國民なかる可しと。(時事新報)



雑録

孟八郎語

一の谷占領公報其一

井上秋劍

第一軍司令官範頼大將の報告なり、一の谷攻撃には東門より向ふ、兵員五萬餘人、梶原景時監軍たり、

敵は一の谷の高地に據り、殆んど四箇師團に達する優勢なる兵員を有し、城塞頗る堅固を極む、軍の本隊は二月三日以來攻撃の方針を取り、五日一の谷城東門に向て總攻撃を開始せり、敵は最も頑固の抵抗を為し、河原高直以下數名の戰死者を出せり、梶原大隊は工兵をして柵を撤せしめ、直に敵前に吶喊を試み、劇烈なる戰闘を行ひしも非常に優勢なる敵に對したる事とて、遺憾ながら目的を遂行する能はず、背進の已むを得ざるに至れり、されど其効果は少なくとも敵をして震慄せしめたるを疑はず、此牽制に依り、西門攻撃に向ひたる第二軍の土肥旅團に非常の援助を與へ、且つ鐵拐峯より背面攻撃を試みたる第二軍鵯越支隊の運動をして、最も効果ある者たらしめたり、翌朝本隊は東門を撃破して城中に入り、海岸方面に向て敗走する敵を追撃し、午前八時二十分全く一の谷を占領せり、右報告す、

二月六日　一の谷に於て　範頼大將

梶原景時の方寸より出づる報告なるべし、昔はかく公平ならざる軍人もありき、

一の谷占領公報其二

第二軍司令官義經大將よりの報告なり、一の谷攻撃には西門より向ひ、更に三千の兵を分ちて大將親ら之を率ひ、所謂鵯越の逆落を為し、大捷を得たり、

二月五日、午前五時本軍は豫定の如く行動し、丹波路より進軍し、午後七時三草山に至る、山西に駐在せる敵將平資盛が率ひたる　一旅團の兵と衝突し、當時に

して之を擊退す、午前四時頃土肥實平に一旅團の兵を授け一の谷西門を攻擊せしめ、小官は別に一聯隊の兵を以て鵯越に向ひ、非常の苦辛を以て斷崖絕壁の間を通過し、一の谷城後より一齊吶喊を試ろみ、火を放ちて劇烈なる攻擊を加へしかば、敵軍大に狼狽し、毫末の抵抗をも試ろみること無くして、海濱方面に向て敗走す、午前六時頃全く一の谷を占領せり、又た第一軍の二箇師團及び本軍の土肥旅團が東西の門を攻擊して牽制運動を試みたるは、小官の行動に就て少なからざる援助を與へたり、要するに今回の戰鬪は殆んど一箇聯隊の兵を以て四箇師團の兵を擊破せし者にして、多く類例無き大勝利なりと信ず、右報告す、

二月六日　一の谷に於て　義經大將

此公報は武藏坊辨慶氏の草する所なりといふ

蚰蜒新聞の記事

蚰蜒新聞は梶原景時氏の機關新聞にして番場忠太氏從軍記者たり、其戰地通信記事の一節をこゝに援萃す

▲今回の戰爭を素人目より見れば、第二軍鵯越支隊の背面攻擊最も力ある者の如し、固より敵の不意に出で、彼を驚殺狼狽せしめたるは多少の効果ありしに相違無し、否寧ろ源氏武士の山岳を馳驅すること恰かも山獸の如くにして、戰鬪に於て恐る可き腕力と脚力とを有する者なることを證據立てしに相違無く且つ一聯隊の兵として一聯隊の運動を充分に成効したることに於ても誰しも非難すること能はざる可しと雖も二師團の大軍を以て堂々東門より進軍せし範賴大將の第一軍が大に敵軍を震慄せしむるにあらずんば、十萬の大軍を擊破して容易に此の如き大捷を獲ること能はざりしならん、範賴大將の此間に於ける苦心は決して能く他の覗ひ知る可き所にあらざるなり

▲範賴大將と義經大將との比較は、世論に於て一般に誤解されつゝあるなり、範賴大將は沈毅にして用意周到、決して輕擧妄動軍隊をして危險の位地に立たしむるが如き行動に出づること無し、兵員をして成る可く安全に成る可く損傷せしめざらんとし、一時の奇捷を貪ること無くして大局の勝利を期せり、故に人目を眩する演劇的戰鬪を爲すことなしと雖、しかも堅實にして沈着なる、金の橋を敲いて渡る的戰鬪を爲すの一事は、今日に於て何人と雖、之を企及することは能はざるなり、義經大將は勇猛にして進む

を知りて退ぞくを知らず、且つ幼時山中の寺院に於て生長せしを以て、斷崖絶壁を馳驅奔走すること殆んど平地を行くが如し、故に自己を以て人を律し、往々山岳の經驗無き者を驅て攀登顚落の危險に立たしむること有り、然れども短所は則ち長所にして、一の谷攻擊に於ての大將は實に此特技を揮ひ奇効を奏せり、世上徒らに外觀によりて戰を論ずるの徒をして、一の谷の大捷は全く義經大將の力に因る如く臆斷せしむる者、偶然にあらざる也、

▲世人多く梶原景時氏の一族を指して文事に長じ武事に疎き者と爲す、是れ大なる誤解なり、梶原一族の人々は實に日本武士の精華にして、勇猛にしてしかも人情に厚く、文事有りて且つ武事有り。第一軍の東門攻擊に於て最も勇敢なる最も美的なる戰鬪を爲し、天下の耳目を聳かしたる者は實に梶原の一族なりき、景時氏及び景季、景高以下の忠勇なる軍人は、一大隊に足らぬ軍隊を以て、先登攻擊を試みたり、一戰利あらずして更に再戰を試み、また利あらず、景高氏は最も猛烈なる體度を以て進擊したり、友人中其危險を慮り暫らく退却せんことを勸告せり、しかも景高氏は之を肯かず、

武士の取り傳へたる梓弓
　引いては人のかへすものかは

の和歌を詠じ、以て其決死の志を示したり、景季氏は餘りに深く敵陣に突入し敵の頑强なる抵抗の爲め、兜落ち鎧千切れ箙空しきに至りて、毫も屈撓する所無く、梅花一枝を折りて箙に揷み、散髮となりて奮鬪せり、景時氏は衆寡の數已むを得ず退却して更に景季氏の在らざるに氣附き、引き返して又も矢石の間に入り、奮鬪して景季氏を救ひ圍を衝いて背進せり、文あり武あり、義あり情あり、眞に武士道の龜鑑として千古の歷史を飾る可き者たり、是を一の谷總攻擊於ける最も記臆す可き美談とす、

▲斯戰爭中に於て最も滑稽なりしは、義經大將の鵯越支隊に加はりたる下士卒中にて、其山路攀躋の危險に堪えずして中途より逃亡し、西門に向ひし土肥旅團に加はりし者少なからざるが中に、かねて勇猛の聞こえある熊谷直實氏は、其息小次郎氏と共に同じく中途より隊を離れ、土肥旅團に加入し、獨り旅團に先だちて功名を爲さんとして、無謀にも西門攻擊に從事せしに、豈料らんや平山季重氏の魁する所と爲り、且つ敵の猛烈なる抵抗に擊退されて名譽の

敗北を爲し、且つこの失敗を補ふの目的を以て、未だ丁年に滿たざる無官太夫敦盛を追ふて之を斬り、漸くにして功名を立てたり、之が爲め某士官の如きは熊谷氏の行動を以て、我軍隊の名譽を傷づけたりと爲し、非難の聲高し、

番場忠太氏の梶原氏を彈發するは、固より其處にして、義經大將に攻擊の餘法を向くる、また然る可き所なり、獨り熊谷氏に對し最も發鋒を弄し、名譽ある自己の軍隊を傷づけんとするは、彼扇屋にて姉輪平次と共に非常の耻辱を受けたるを、犬糞的に仇を報ぜんが爲めなるか呵々、

辨慶の軍事郵便

是は新聞の記事にあらず、義經大將の帷幕武藏坊辨慶氏が一の谷屋島の戰爭を終り、同地より在鎌倉の友人に戰狀を報じたる私信の一節也、

(上略)如上戰爭の狀況に就ては委細新聞紙にて御承知の事と奉存候、平氏の據て以て堅城と相恃み候一の谷も、義經大將の鵯越支隊にて暫時に占領致し候、屋島も同じく大將の乘槎冒濤にて是亦少許の時間を以て占領致し候、今更申すも疎かに候得共、大將の奇謀勝略には險阪激浪も物の數には無之候、小生等何の幸ぞ此千載の一時に生れ、斯不世出の英雄の下に愉絕快絕の戰鬪に從事す、實に萬戶侯と雖代えずとは此事に候、御聞き及びにも可有之と存候、大將が鵯越支隊の運動の如きは、古來未だ聞かざる奇略に候、一般に平家は弱い〱と申し候得共、決して侮どる可き敵には無之、殊に一の谷の如きは凡そ四箇師團に近き大軍にて形勢の地を占め、其將士も此城迚も落つ可しとは思ひ寄らず、兎角する間に京都を盛り返さんとする意氣天に沖する有樣にて、就中能登守敎經氏の如きは、最も勇敢善戰の人物にて、新中納言知盛氏の如き亦た耻を知る武士的華族に候由、之を攻めんこと決して容易にあらず、大將が神出鬼沒の略有りてこそ能く速かに至りしなれ、迚も優柔不斷の大將、佞辨利口の小人輩に一任し置かんには、一の谷の天險、屋島の要害、之を占領せんこと百年河淸を待つと同樣、到底及ばざる事に可有之候、

佞辨利口と申せば、例の梶原の事に候、屋島攻擊の際卑怯にも逆櫓の議を提出し、雄斷なる大將の一喝に遭ひ、非常に相含み居る樣子に候、自然鎌倉表に如何なる通信を爲すやも難計、可然御注意奉願候、御惠送の蜿蜒新聞日々拜見罷在候、梶原之機關に候得ば、無理からぬ事に候得共、義經大將に對し種々ケチ

を附け居候、曲筆のところ實に滿紙の衒氣、文章の厭味、只だ嘔吐を催す耳に候、四天王以下いづれも切齒致居候得共、蕭牆の爭は外侮を招く者なれば暫らく胸を摩すり居り候、彼梶原は元々平家の侍にて、且つ平家を姓と致し居候、或は平探かとも被察候、

戰地の事に候得ば風流韻事には乏しく候得共、時々面白き事にも遭遇致候、須磨寺の梅なか〳〵珍木に御座候、俗客の汚されんことを恐れ戲れに、

此梅江南所無。做天永紅葉例。伐一枝斬一指。

御一笑被下度候、追々暖氣に相成り、輕き行李も荷厄介に相成り候、御存知之七ッ道具の如き、御推察奉願候、呵々。(下略)

當年辨慶の情懷、想見するに足る、と評をクッつく可き所也、

ものゝ音

中村春雨

犬潜る穴に根方疎らなる杉の生垣を隔てゝ我が家の裏隣の二階家からは朝まだき、卓上の牛乳の、コップの中に芳野紙の沸立つやうな薄膜に皺を暢べつ縮めつ揚る烟の底に搖らめいてゐるのに片手をかけて、唇に宛てんとする時しも、忽ち耳に響く春鶯婉囀の妙音、ピアノの奏(しらべ)が聞え始めて何時(いつ)ながら一家團欒の朝餐の、箸の音、茶碗の響の合方となり笑ひ聲話聲をも曲の中に疊み込んで了ッて軒端に囀づる雀の群も、天の小い唱歌者が隊を組んで合奏の仲間入かと、埒もない空想に耽らしめるのであるが、その音がハタと止むと、今回は又爪音ゆかしき琴が聞える、松竹梅の調が響く。けれども屋前の街上を觸れゆく豆腐屋の鈴の音新聞賣兒の鐸の音、近所の橋を轟かして驅去り驅來る重くるしげなる車輪の響、小刻に道を踏み鳴らす下駄の齒音、忙しげな靴の音、天秤棒の風を切つて肩に軋る氣ゐ皆生活の靴の響である、中にも近頃聞え出した、向屋の長屋の格子戸を洩れて朝から午、午から夕、夕から夜半に及ぶ、蟋蟀の秋の末枯を壁の破れ目に鳴きしきてゐるやうなミシンの響は何となう人の胸に苦の針の痕を縫縫するやうな一種の感を與へねば止まないのである。

ピアノの音は何となく金髮眩ゆく湖上に流るゝ夕榮の雲の影かと靡いて眼には綠の光、顏には淸らかなる乳の泉に散浮く紅薔薇の匂脊のすらりとして若ゝしき搖色絹の服裳長く地に曳ける白き麗人の指頭の浮世の塵に染まぬ玉の艶をサフアァハ、星と輝ける純金の指環に

飾れる鋪、椅子を臺の、幻の中に立てるを聯想せしむるかと思ふと、その琴の調には斯ら艶やかなる高島田、金絲の色も派手やかに、遠山霞む眉黛に櫻の雪散る海化粧、暈染の裾模樣は青海浪を千羽鶴鳴渡りて、紅上を撫づる振袖の雲の奥にや消ぇ入るらむ、芳紀も二九の花半ば春風に綻びて、笑める眼元に媚ゆたかなる處女姿を眼前に描き出さしむるてはないか、

戀を繪にして色を音に響かすその嬉しさ、樂しさ、浮世離れた美の世界半ばに我が身を誘つて遊ばせて置くかと思へば忽ミシンの響は切々と人生の苦を囁くが如く浮世の辛酸を呟くが如く、歡樂を咀ひ、光榮を嘲る樣に、しきりと我が耳朶を襲ひ來り、鼓膜を刺撃しつゞけて、やがては我心をも現實界のいかめしい牢獄の鐵の柱に、縛り附けんとするのである、

彼のピアノの音は往々夜半、將さに安息の眠に就かんとする頃、突如として隣家から聞ぇて來る事さへもある、その妙音が夢路に我を導いて呉れる時は、天國の門の扉自と開けて白い翼ある小天使の一隊、雲に乘り樂を奏しつゝ迎の小羊を追立て、近づいて來るやうに覺えるのてあるが、ア、そのミシンの響が遠く我が枕邊を音づれて來る夜頃には、鐵槌を振かざしながら姿醜く、老ひ窶れたる惡鬼羅刹が毒炎を吐きかけ〱襲ひかゝつて、我が夢を骨灰微塵に打碎かんと犇めきながら押寄する樣な思がするのである、

隣家には今日も亦ピアノの音、向の長屋には今宵も絶ぇぬミシンの響、彼は樂しげに、此は苦しげに、我家の奥にはその音、その響が打混つて聞ぇてゐる。

露國革命黨員の眼に映じたるブラゴヴェスチェンスクの虐殺

（西比利亞日誌の一部抄譯）

（露國革命黨員レオ、トウィッチ著）

カラ及びストレチェンスクに於て多少の視察を試みたる後、余はブラゴヴェスチェンスク市に至り當地二新聞紙の一に筆を操ることゝなりしが、此は從來のものゝ中に就きて余には最も興味ある職業なりき、而して此地には敎育ある士民多く、且つ又余の如き國事犯の爲めに追放せられたる人々も多かりしを以て、社交も中々に面白く、而して此地には學校、圖書館、劇場、電話局等も存し、其他諸般の設備の外部的文明の度に於ては、同廣袤に於ける歐洲の諸市に比しても遜色あ

るを認めず、寧ろ或點に於ては一歩を前にせるの觀さへあるなり、然るに最近數年中、即ち一九〇〇年此地に清國人との戰鬪ありし以來、欽羨すべからざる、否甚だ忌はしき名聲を負ふに至れり、而して當時此地に在りし余は端なくも自ら、此際に續出したる慘憺たる椿事に關して露國政府が世界に與へたる虛僞の報道に對し證人となるに至りぬ、之を談ずる亦興味なきにあらず、余は當時の事件を目擊のまゝ記さんか。

先づ余をしてブラゴウェスチェンスク市に關して少しく説かしめよ、此は此地方(州)の首府にして、數年前までは多數の歐洲諸國よりも著しく廣濶なる面積を有する此アムール州に存する唯一の都會なりしなり、實に數年前に在つては此市を除きては此地方に一箇の都市も存せざりしなり、而して其位置は、長距離の間露淸兩國の境界をなして流るゝ「アムール」川左岸の平原中にありて、戰爭以前には三萬八千の人口を有し、而して木造家屋多く、堡砦の設備なかりし。

此河流の右岸、即ち此市の正對岸には「サガレン」と稱する支那人村あり、此等兩岸の住民間には絶えず交通ありて、夏期は端艇、唐船により、冬季は氷上によるものにして、此等支那人及滿洲人はブラゴウェスチェンスクの住民に對しては主なる需要品供給者にして、殊に肉類及野菜等の供給は一に之に仰ぐなりき、一九〇〇年春に至る迄は此兩地の關係常に平穩なりしが、北京に於ける獨逸公使フォン、ケッテレル氏の虐殺及一月廿四日に於ける西比利亞軍召集が露國政府にて決定したる後に、事態不穩の色、敵意の暗流は自ら起り、清國側の河岸には毎夕練兵行はれ、時に半宵呼號の聲起り、大砲の響さへ聞ゆることありたり。而して斯くの如きは全く何人の豫想にも上らざりし所にして、此等一切の事情に關する露國官廳の質疑に對して、清國は只一小部隊の兵士夏季の間此地に旅營するのみと答へたり、ブラゴウェスチェンスクに在る官廳は此答辨を以て滿足したるも住民等は決して然らず、斷じて清國は何等の目的なくして砲術演習を此地に試みるものにあらずとの私見を有し、且つ又双眼鏡を以て望めば、サガレン村附近に築造中なる幾多の土砲臺を認むを得たり、而して是等を觀察したる人民等は官廳に對して種々陳告する所ありしも、只アムール洲陸軍知事グリプスキー將軍より「此等は些事に過ぎざるを以て何人も之が爲めに不安の情を懷くを要せずとの確言を得たるに過ぎざりき。

當時此市には只僅少の兵士、即ち歩兵二三聯隊、コサック兵一聯隊及砲兵旅團駐屯し居りしが、此等の軍隊も總督グロデコッヴ將軍の命によりて七月十一日殆んど全部此地を去つてハバロブスクに向ひ、今は只一小隊の兵士一百のコサック兵及砲二門を殘すのみにて、此砲門さへ一は全く用に堪えざりしこと後に至りて知られたり、此他に召集令の爲めに集まりたる約二千の豫備兵ありしも、此等は全く武器及彈藥を缺き居る爲め何等の用に堪えざるを以て、僅かに此市の防備として數へがたかりき。

ハバロブスクに向ふ陸軍の出發は非常の盛大なる儀典を以て行はれ、幾多の汽船、端艇は之を搭載してアムール河流を下るなりき、而して幾多の市民は皆此の盛擧を見んとて集ひ來りしが、斯くの如きは僅かに對岸なる支那人の目に觸れ、殆んど此市には何等の防備なきことを知られたるに相違なかりしなり。

ブラゴウェスチェンスク市より河流を下ること殆んど二十哩にしてアイダンと名くる一箇の小支那人市あり諸船舶がブウェスチェンスク市を發したる露國軍隊を搭載して七月十二日此地を過ぐるや、支那人等は何等の妨碍をもなさず之を通過せしめ、最後の一船即ち彈藥を搭載したるものゝ至るに及び、俄然之に對して砲門を開き、爲めに之をしてブラゴヴェスチェンスクに歸航するの止むなきに至らしめたり、此砲聲の報は翌夕刻當市に喧傳せられ 住民は不安の情に滿ち、官吏も亦遂に警戒の念を起すに至り陸軍知事グリブスキーは翌十四日朝市會を召集せり、而して此に出席したるは單り議員のみならず、此市の有力なる人々、種々の官吏、銀行支配人等にして、余も亦新聞通信員として其席にありき、

オルフェノッ大佐は陸軍知事の名を以て一場の演說をなし、當市に於ける陸軍防備の極めて不充分なるを告げたる後、氏は自ら此局に備ふる組織を企つべきことを告けたり、實に去る十一日軍隊の出發後、當地に多數の兵士の駐在せざるは己に知る所なりしも、今オルフェ・ヴ大佐の示すが如き少數ならんとは何人も想像せざる所なりしなり、彼の明晰なる陳述は聽衆に對して大なる感銘を與へ、著しく彼等を驚かし、數多の面々は或は蒼白となり、或は他の感激の情を表はし、引續きて壇に登りし議員等の聲は激昂の爲めに戰き居れり、短時間の討議の後遂に義勇兵を募るに一決したりしかば市は直に軍區に分たれ、各區に長一名、副二

名を擧け、而して數人の議員は此決議を報じ且つ此地の事に關して商議する所あらんが爲めに陸軍知事の許に赴けり。

余は後に至りて、當時知事と面談したる此等議員の一人に聞きしに陸軍知事は此等代表者に對し、其防備を企つるの敏捷を謝し、且つ支那人に對する危險の感を和げんと試みたりと、而して此ブラゴヴェスチェンスク市及其四隣に住する多大の支那人に對しては何等の處置をも執るを要せさるとこの間に對しては、知事は自己の意見として、露淸間に宣戰の布告あらざるを以て何等特別の處置も要せさるべきを談じ、更に又知事は、此市に於ける支那人の代表者の來りて、露地在留の支那人は適當なる時機に於て此地を引上く方善かるべきかとの問に接したりしも、已に余の意見は前述の如くなるを以て、（實は知事自身の爲なりしなり）此事支那人代表者等に對しては、我が大露帝國政府は決して平和の外國人民を惱ますが如きことを許さゝるべきを以て、大露帝國領土内に在る以上は何等の懸念なく各其在住の地に留まるべき樣同邦人に傳ふべしとの答を與へたりと告げ最後に余等露國在留人の代表者に對して知事自身在留の兵士及一百のコッサクを卒ゐて、馬賊の手より其地を救ひて安全にするか爲めに之を占領する目的を以て翌日アイグン（支那人市）に赴き、斯くしてアムール河上に於ける露國船舶の航行を自由ならしむべしと告げたりしが、然かも此劃策は全く畫餠に歸したり、即ちブラゴヴェスチェンスクの市民に對する支那人の劇甚なる敵意は、何人の豫想よりも早く爆發したりしなりき。

其日夕刻に於て、各階級（貴賤上下）の多數の人民が各義勇兵籍に加はらんとて市會堂に集まりたる際、大砲の響は俄然支那河岸より高く響きたり。當時余も亦此に在りしが、窓より望めば「支那人は砲擊す、支那人は攻め來る」と叫び沿岸の人民の群かり急ぎ來るを見るを得たり。

此叫喚を聞くや堂内の義勇兵等は支那人等か何等の防備なき此市を襲擊し來るものと信じて名狀すべからざる周章を來し、或者は街路に馳け出て或者は「武器を、武器を與へよ」と呼ひつ市會堂の武器室に急くなりき、（此室には兼ねて人の知る如く一百の古き銃器貯藏せられあるなり）、然れども此等武器の數は固より悉く義勇兵を武裝せしむるに足らざりしを以て、多數の人民殊に貧民等は商店に闖入し、……折しも日曜日

なりしを以て店舗は閉ち居りし爲め之を打破りて入り、手當り次第の武器を以て各自武裝したり、今や全市街は極度の恐怖に陷り、多數の住民は皆其貴重品を取纏め、徒步又は馬に依りて此市を脫走し、或は此河流より遠距離なる知己友人に依托し、或は銃丸砲彈に對して比較的安全なる石造家屋等に隱匿したり。實に支那人等が此防備なき市街に闖入し來り、住民に如何なる殘虐を行ふやも知れずとの觀念は、全市民を驅つて絕望の深淵に陷らしめたりき。

實に若し訓練せる兵士を以てせば、極めて少數の兵員を以てするも僅少時間內に此市を陷るゝは易々たる事なりしなり、然るに幸にも支那人等は射擊に拙にして其砲彈の多數は市に達せずして、或は河流に落ち、或は爆裂せす、此全攻擊中我市民の死傷僅かに十五乃至二十に過ぎざりしは天祐と言ふべきなりき。

此攻擊の翌日フラゴヴェスチェンスク市は全く荒涼たる光景に變し、各商店は閉ち、窓戶は固く鎖され、街上には馬もなく、徒行者もなく、人々皆壁を離れず、若し已む無く出てゝ十字街等にかゝるものあれば流彈（ソレダマ）を恐れて急に走り行く等の有樣にして、商工業は全く杜絕したりき。

一方に於て吾人は已に義勇兵の防備を組織したり、即ちアムール沿岸數哩の間に土砦を築き、其裡には老弱貴賤の義勇兵ありて對岸支那人の動靜を視察する等非常なる大恐慌を演じたり、而して多數の人民は又更に方面の危險を見たり、即ち此市に住する支那の營居是なり、此地には支那人及滿州人の居住するも甚た多く、而して其種類は行商人、貿易商、日雇人等しにて此等の人々の業務は此地の露人に取りては最も有用なるものなりしなり、即ち彼支那人等は非常に勤勉にして且其の要求する所少なく、此等の支那人露人に對して全く何等不平の原因をも與へざりしなり、又其品性正直にして且つ良心を重んじ、多數の商館、又は個人の住居に於ても、雇人として充分なる信用を與へられ居たり、年少支那人を其家事上に使用せる露國人によりては彼等を友人視する程親まれ、又露語等を敎へらることとあれば非常なる出精を以て之を與へりき、只下級及敎育少なき露國人等には親まれず、彼等は頑固にして露人と相和するを拒避する民と見られたり、之れ或る例外を除くの外此等支那人は其慣習又は外貌を變することをなさゞるより誤解せられ居たり、又露國勞働者等は、支那人等かアムールに來らざりし時に在つ

ては賃金の高價なりしを知るが故に（戰後には低廉なる支那勞働者去りて、下級民の歲入中に在りたる諸製造品等の物價は再び非常に騰貴せり）危險なる競爭者として之を見たりき。

此等の諸原因及び露人の邪惡殘忍なる性情‥より卑劣殘忍なる素質は何れの國民にも存するが故に‥平和の時に於てすらも支那人は街路等にて相遇ふ時往々露人の爲めに虐待せられ、押付けられ、突當られ、又は辨髮を牽かるゝ等のこと屢々なりき、加之此等謙遜小心なる支那人に對する壓制の例は新聞欄内にまでも見られ、此種の例は西比利亞豫備役召集後最も數多く、幾多の豫備役等が各地に於ける其職業より離れて召集せられ此市に來りし時、而して殊に其醉ひたる時には、行會ふたる支那人をば攻擊し毆打し此畜生、乃公等か職業を離れ、家族を離れて死に往くのも、皆貴樣等か惡いからの事だ」と罵れりき、實に通常の歐洲人の眼には支那人は人類とは映し居らず、只是れ家畜又は野獸に過ぎざりしなり。而して斯かる感情より生じたる種々なる事態は、遂に知事をして「平和の清國民を惱ましたるものは刑罰を受くべし」との布告を出さしむるに至れり。

此最高地方官憲の確言を信じブラゴウェスチェンスク市及其郊外の支那人並に滿州人等は各其在住の地に留まりしが、然かも彼等は直に其停留を甚だしく後悔せざるべからざるに至りぬ、已に七月十四日に於てすら、支那河岸より砲火發り、驚駭せる群集か周章して逃走する際等には、如何に逃走の露人が行會ひたる不幸の支那人に報ひ之を虐待したりしか何人も能く之を見得べかりしなり、支那人及滿州人等は偏に安全なる潛匿所を索めつゝ、如何に哀れむべき狀態にて此市の彼方此方に逃走し居たりしか、而して同日夕刻に於ては街路に於て支那人等は虐殺せられつゝありとの報ありき、或る信すべき人の言に依れば警察官自身さへも、其夜此市に於て戶外に在る支那人は何れを問はず悉く之を殺すべしと訓示せりと、蓋し多數の露人等は露地に於ける支那人等は此市に火を放て對岸なる其同國人に聲援すべしと懸念し、又此等支那人等は馬賊の一支柱となるやも圖りがたしとなされたればかり、而して此等の恐怖に對しては嘗に市會議員等かなしたる「土民に‥して然るべき處置をなすべし」との獻策最も適切なりしものにして、更に一層適切なる意見を言はゞ、若し露人によりて充分なる保護を與へられたる人民‥

‥斯かる安全の民は多數あるべし‥‥は其保證者の管理に委任し爾餘のものは一塲所に集めて、適當なる管理の下に置きたらんには慥かに良好なる結果を得べかりしなるべし、然かれとも地方官廳は意見を異にし、遂に死に出づることをなさゞりき。

攻撃開始後第二日めに於て歩騎の兩コサック兵は警官と共に、家內に同居の支那人は無きやと問ひつゝ各戶を巡回せり、若し之に問ふに支那人等を獲て如何になさんとするやを以てせば、彼等は此市內に在る一切の支那人等を集めて警察權の下に置くなりと答ふるなり、然れとも多數の歐洲人等は慥かに吉事の生ずる等なしとて皆穴藏又は屋根裏(物置等に充つる所)に潛ましめて之を隱匿せんとしたりしが、時に或は隣人等の告發する所となり、直ちにコサック兵は來りて支那人を隱匿せるに相違なしと主張し、遂に或は拔劍を以て迫ることとすらありき、此くて支那人の拘引は爾後數日間引き續きたりき。

此等不幸なる支那人が警察署に行かさるべからずと告けられたる際の悸惧、恐怖、余は殆んと之を名狀する能はざるなり、急き其所有物を取纏め、言ふべからさる失望悲哀の顏色を以てコサック兵に從ひ行くなり、其歐洲人の友人等に別るゝ時には將來の看護を得んとて金錢等を贈與し、又は負債の償却を依囑し、或は其の財產‥‥貴重なる財貨に滿ちたる家屋、店舖‥‥をも皆其自由處分權を與へ去りたるなり、彼等は皆自己の悲慘なる運命を豫見して一樣に彼等は「我等をして頭顱を存せしむべきか」と問ひ合ひぬ。

(以下次號)





思潮

戰爭と平和

「成功」　井上哲次郎氏

平和と戰爭といふことに付て之を論じますれば、平和は目的で、戰爭は手段であります、戰爭は實に慘酷なるものでありまして、敵身方とも雙方必ず無數の死傷を生ずるとて、決して望ましきとてはありません、それで若し避け得らるゝことならば、無論之を避くるに若くはないのであります、我々人類のためを思へば、一切殺生などゝいふ不祥なる現象を悉く一掃して、萬人互に相親愛し、相調和して、天國の如き一大樂境を現出したいものであります、即ち永遠の平和を保障し得るが如き大平無事の社會を作り出したいものであります、元來社會の發達進歩の傾向を察しまするに、害惡の數が次第に減少して、不完全より完全に推し移つて進歩するの有樣であります、けれどもかゝることは唯自然の進行に一任するのみては十分でない人類としては更に進化發展の必要を自覺して、自己の力によつて之を促すことを要するのであります、そして其の究竟する所を擧げて之をいへば、一點の害惡もなき、圓滿なる理想的の社會であります、斯る理想的の社會は唯平和のみあつて、戰爭といふようなことは痕迹だもない、けれども之は今日の狀態にあつては單に腦中に描き出されたる理想に過ぎないことを自覺せればならない、かゝる理想的の社會は單に想像に過ぎないとしても、矢張り期する所は玆にあるでなければなりませぬ、即ち吾人々類の進化發展して行く其目的地は、決して之に外ならざる次第であります、但し此目的地に到達するためには戰爭も避けられない、戰爭は其手段の一であります、何分社會に害惡多くして、到底戰爭にあらざれば之を一掃することの出來ないといふ、已むを得ざる場合があるものであります、斯る場合に斷然戰爭によつて之を一掃するてなければ一歩先へ進んで行くことが出來ません、唯戰爭は理想的の社會に到達するの手段に過ぎないのでありますからして、其動機が正しくなくてはならん、戰爭は固より單に道德によつて決すべきではないけれども、文明的のものならば必ず道德と一致して居なければなりませぬ、即ち無謀の戰を起して何等の遠慮もなく、隣國を妨害し若くは橫領するといふ樣なことは、昔はありましたが、今日の如き文明の世には決して許すべからざることであります。

露探よりも甚だしきものあり

「時事新報」　五月十三日

過般來俗間には露探の評判喧しく甚だしきは我軍事の局に當りて相當の地位に在る人の中にも其疑を受くるものありなどあられもなき風說さへなきに非ずと云ふ苟も日本帝國の軍人にして敵國の爲めに間諜を働くが如き不忠不義の國賊はある可からず況や名譽の地位に在るものに於てをや唯是れ俗間の俗說、所謂齊東野人の語に過ぎざるのみ敢て意に介する

に足らずとして爰に注意す可きは我國社會の一部には平素より一種偏固なる思想を懷き奇怪なる言論を弄して世間を惑はさんとするものあるの一事なり此種の論者は決して無知無識の輩に非ず人並の學問もあり文筆もありながら其口にし筆にする所を見れば文明進步の大勢に反するの言説を喋々して憚らざるのみか自ら誠意誠心の忠愛家を氣取りて得々たる其有様は寧ろ憐れむ可し若しも此輩にして單に一種の言説を恣にするのみならんには固より銘々の勝手なりと雖も動もすれば政府の威光を笠に着て恰も其言説を世間に押賣せんとするの擧動を敢てするに至りては決して之を默々に附するを得ず前年彼露國の宗教監督として頑迷の聞隱れなきポベエドノスチフの著述に係る獨裁國の見地より立憲代議制を非難したる著書を飜譯して各地方官に頒ちたるものあるが如き即ち此輩が或る部分に跋扈しつゝあるの證據に外ならず蓋し此輩の思想は極めて單純にして複雜なる社會進化の事相を會得し文明大勢の全局を通覽するの明に乏しく單に一時一局部の不都合不始末を見て輕々に事を判斷し立憲代議制の如き既に腐敗して其弊害少なからず歐米諸國の例に徴するも云々にして其學者の中にも云々の議論あり日本人が遲蒔にも外國に倣うて政黨政派などを形造り中央の議會に又地方の自治に其弊害を輸入するが如き以ての外の次第なりとて前後の分別もなく露國人の著者などを金科玉條と心得、之を飜譯して頂門の一針以て人民の迷を醒まし其腐敗を救はざる可からずと思ひ込みたることならん露國人が立憲代議制の缺點を非難するは自ら考のあることにして無理ならぬ次第なれども之を眞面目に崇拜して恰も專制獨裁の福音を我社會に傳へんとするに至りては其淺墓さ加減唯驚く可きのみ立憲代議、固より絕對の美制に非ず種々の缺點もあり又時に由りては甚だしき腐敗もある可しと雖も一國の政治が獨裁專制より立憲代議に移るは文明進化の大勢にして區々たる人力を以て止むるを得ざるのみか今の世界に國を立てゝ其繁榮幸福を全ふするの道は唯この大勢に從て推移するの外なきのみ或は一局部に就て見れば專制國の運動は頗る活潑にして時に觀る可きものなきに非ずと雖も其運動の活潑なるは恰も一時の付元氣にして遂に其本性を暴露するに至らざるを得ず論より證據は露國の現狀を見る可し政府部內の權官輩が漫に虛喝を逞うして外交を誤りたるの結果、我國に對して無謀の戰を開きたるは大失策この上なきは勿論、其國內の人心は如何と云ふに今度の戰爭は政府の權官輩が私利を謀るが爲めに開きたるものなり吾々人民の與り知らざる所なりとて馬耳東風相關せざるは尙ほ可なりと雖も學者學生の社會には大に反對の運動を催ほし寧ろ日本の戰勝を祈るなど公言するものさへなきに非ず露國の人民中に常に政府の壓制に反對して革命の思想を懷くもの多きは實際の事實なれども現に敵國と交戰の最中にも拘らず公然敵の勝利を祈るものありとは實に驚く可き事相にして畢竟惡政苛法の結果、人心をして此極に至らしめたるものに外ならず斯る人心の有樣にては今後立國の運命も甚だ覺束なしと云ふ可し彼の專制崇拜論者の如き今日に至りては如何なる顏色あるか或は恰も知らざる爲して世間並に擧國一致義勇奉公など唱へつゝあることならんと雖も一たび當年の事に考へ至らば竊に慚死曾ならざる思なきを得ざる可し此輩の如きは其思想極めて單純にして決して深き分別あるに非ず其心事は强ち咎むるに足らずと雖も常に官權の下に隱れて一種の僻說を逞くし世間無智の人心を惑すに至りては決して恕す可からず否な國家の長計より見れば其害は寧ろ露探よりも甚だしと云はざるを得ず

戰時に於ける大國民の態度

「新人」

遼國の戰爭は、啻に我帝國の運命に取って一大重事件たるのみならず、又た廣く世界の人類と文明とに取つての一大事也。若し露國にして勝利をえんか、是れ横暴と驕詐との正義に克ちうべきことを證する也、侵掠的意志の尙今日に貫きうべきことを證する也、少數權臣の功名心が他國人民の安寧と權利と世界の公益とを犧牲にしたることを證するもの也、野蠻的大勢力の前には文明の利器も教育も屈服せらるゝの外なきことを證するもの也、しかして是れ、獨り東洋文明の精華を傳へ、傳へたるのみならずよく之を伸長せしめえたる唯一の民族、よく最も平和的に最も開發的に西洋文明の精華を東洋民族に與へうる唯一の族をして、一島國內に局促せしめ、若しくは其存在を危うせしむるもの也。之れに反して、吾人が豫想する如く、我帝國をして十分の勝利をえしめんか、非道横暴の正義に克たず、侵掠的意志の今後に行はれず、野蠻力の必ず文明力に征服せらるべきことを天下に證明すると共に、東洋否世界の平和を永遠に保障し、日本民族をして其天職たる東洋の教化に全力を傾注するをえしむるに至るべき也。吾人は實に世界の人類と文明とを代表して此戰をなすものといふべし。さらば我國民が其國力を擧げて之がためになす傾倒し、他の國民生活を犧牲にしてこれが爲めに狂熱するも、誰か不當の價を拂ふものといはん。

されど軍事なるものは戰の時に於ても尙、國民生活の全部にあらず、如何に軍隊の活動が盛に且つ成効ありと雖も、他の經濟的政治的學藝的生活の機能が衰ふる時は、國力は決して旺なること能はず。しかしてそが久しきに亘る時は國民生活の困憊となり、疾病となり、解體となり、軍隊活動その物さへ亦た止まらざるべからざる也。吾人は我軍の奏功以外に早くして戰爭の終局の早からんことを望むものなれども、耐久性に富む大露を對手とせる今回の戰役に於ては、久きに亘つて之を持續するの覺悟もなかるべからず　是に於てか吾人は、此際上下心を一にして各其屈勉姑勵し、以て消極的に國家の財源を富まし、國力を涵養し、國民生活の均整的進長發展を遂げしめんことを切望せざるをえず。今回の開戰を以て單に一時の激憤心復仇心に基くものとなし、露軍の壓服を以て其目的を遂げ了したるものとせば已む、もし夫れ日本民族が其大使命を果すべきための膨脹と東洋民族の幸福てふことゝに由つて催起せられたるものとせば、我國民の眞事業と眞任務とは戰爭後に於てこそ存するなれ。此戰爭や決して一時の烟火的現象にあらず、我國民の、否東洋民族の過去と將來とを連ぬる重大の意義を有するものにして、我が勇敢なる戰士の骨と血とに貫ひえたる戰勝の光榮をして、不朽の價値あらしむると否とは一に我等內にある國民の覺悟奮勵如何に存す。冀くば我國民をして其外部的膨脹力に伴ふ、否其基礎たる內部の膨脹に對して、我軍隊の戰振りに適ふ積極的の態度を取らしめよ。世界の文明は日に月に進み進んで一步も息まざる也、吾人は露國を敵とせる間にも、世界を競爭の對手としつゝあることを忘るべからざる也。

人道主義の發現

「國民新聞」五月十五日

博愛は口にするに易くして行ふに易からず、人道は言ふに難からずして行ふに難し、況んや之を戰塵深り、砲聲轟くの戰時に於て試み、之を敵國の人民に對して施すに於てをや、然も、我國の露國に對するや、交戰の目的を達するが爲に餘力を剩さずと雖も、其の行動は正々堂々として、文明と國際法の常規に則り、其の傷病兵、俘虜に對するや、仁慈り發露し、彼等をして我が仁慈博愛に感泣するを禁ぜざらしむ、是れを人道の發現といふも過當に失せず。

試に看よ、我國は開戰の劈下に於て、二月二十二日の勅令を以て、千八百九十九年の條約に基き俘虜情報局を東京に設置し、二十九日を以て、其の事務を開始したり。其の事務たるや、俘虜に關する一切の狀況を調査し、其の銘々票を調製し、諸方よりの問合に對して通信を發し、若くは俘虜に對する贈品、俘虜の發送にかゝる金錢物品を傳達し、若くは俘虜死亡者の遺留品及び遺言書を保管し、且つ之を其の遺族及び其他の關係者に送付し、若くは敵國の戰死者に就き我國陸海軍隊に於て知り得たる事項を調査し其の通信に應じ、若くは戰死者の遺留品及び遺言書ある時は俘虜のものと同樣と取扱ふ等其主たるものなり。我國に於て、此迄收容したる俘虜は將校十七名、下士以下四百十九名にして、情報局は、此等の俘虜に關する詳細なる狀況を調査し、問合に應じて通報を發し居れり。斯の如きは、今回創始の事に屬し、世界列國に先例なき博愛事業なりとす。

若し夫れ、我國の俘虜取扱に至りては、懇勤懇切を極むるものあり。俘虜にして、負傷せるものは先づ之を病院にて治療し、快癒するを俟ちて、之を俘虜收容所に收容し、彼等に對するや、軍紀風紀に反せざる範圍に於て、身體及び精神上の自由を許し、其の名譽と健康とを尊重するに周到なる注意を拂ひ　供養は充分にして足らざるの憂なく、或は屋外運動を爲さしめ、或は遊技具を供し、其の彼等を待つや、殆ど賓客を遇すると異ならず。殊に我が地方人民は同情を以て彼等を慰問して、食料品、嗜好品、日用品を寄贈し、爲に彼等をして、身の敵國に俘虜たるを忘れしめ、彼等は今や我國の敦き好意に對し滿足と、感謝の意を表し、寧ろ本國の生活に優る幸福を喜びつゝあり。其他佐世保の海軍病院、松山の赤十字社病院にて、露國の負傷將卒に對して加へつゝある治療と看護とは我が博愛の精神を發揮し、彼等をして、我國の仁慈に感泣せしめつゝあり。

然るに、翻って露國の爲す所を見るに、露國は自ら基督教國を以て居り、博愛仁慈は、其の常に口にする所なるにも拘らず、其の軍隊は、或は無辜の良民を虐殺し、或は家財を掠奪し、或は婦女を凌辱し、蠻行至らざるなく暴行爲さゞる無し。我社特派員の戰地よりの通信に依れば、露兵は、其の捕虜としたる我が兵卒を慘殺し、尙之に飽らずして、面を剝ぎ、腹を抉し、足を寸斷して、之を遺棄したりと云ふ。其の慘暴苛虐言語に絕す。此を、我軍の軍紀森嚴にして、規律嚴重に、寸毫と雖も侵す所なく、敵の傷兵と雖も之を收容して治療を加へ、戰死者に對しては禮を以て之を葬り俘虜に對して寬容なる待遇を與ふるに比すれば、其の孰れか文明の味方にして孰れか之に敵たり、其の孰れか人道に則り孰れか之に反するかは多言を要せずして明なり。吾人は、日露戰爭を以て、文明對野蠻、人道對非人道の戰爭といふの決して偶然ならざるを見るなり、然りと雖も、露國をして、其の橫暴を擅にせしめよ、其の殘虐を逞うせしめよ、我國は暴を以て暴を伐ち、血を以て血を洗ふが如き擧に出づることなく、益々博愛人道の精神を行ふべきのみ。蓋し、仁慈を以て惡虐に報ゆるは、最も有力なる報復にして、是れ敵の頭に熱火を積むものたり。殘忍露國の如く、橫暴露國の如く、野蠻露國の如きは、單に文明、人道の公敵たるのみに止らざるなり。

戰爭と國民

「體　育」

リギール博士稿
前田長太氏譯

今日世に一種の論者あり、四海兄弟主義を採りて、萬國平和の基礎を確立せむと正直に熱捽しつゝあり、而して彼等は戰爭をして人間社會に跡

を絶たしめむが爲に、萬國相共に軍備を撤せむことを提唱す、其意や或は嘉す可しとなさむ、然れども彼等は一の忘却しつゝある所あり、他莫し、人性を改變することは彼等の職内に在らずと云ふ事即ち是なり、軍備の有無に係らず、人は必らず相戰はむ、唯其の區別ありとする所のものは、國家の干城となる軍人なるものを別に設定し置かざるときは、國民皆各々其身を擁護するが爲に武備せざる可からざるに至らむ、乃ち知る、軍備の撤去は『萬民の軍備』を意味するものなることを。

如上の所論にして果して眞なりとすれば、人間萬事を司配する天の攝理に於て戰爭なるものも亦其が存在の理由を有して、設令人生の慘禍此に過ぐるものなしとするも、尙且多大なる効果なくんばあらず、唯々然り、戰爭の利害得失は之を檢覈ずること極めて困難なるを見ても知る可し、吾人の見て以て不思議とする所は、戰爭の最も良好貴重なる効果は正しく是に由りて生ずる人生悲哀苦痛の慘事壯擧に在りとす。平和は國民に取りても、人生最貴最重の實なりとして、人皆之を希望す、蓋し其の齎す所の無事安息は身に取りて極めて嬉しきものたると同時に、國に取りては亦極めて効果豐かなるものなり、學術文藝の蔚然として起り、國運の隆盛日に月に増進するは、實に天下泰平無事の時に在りとす然れども天下の美事、人生の盛擧にして、人の之を濫用して以て家國の禍害に變ぜざるもの果して幾許かある、平安は人心を文弱に流れしめて、道義の紊亂頽敗を產むものなり、而して柔弱頽敗せる人は最早や人間の大半を失ひたる者と云ふ可し、此時に當りては人皆國家の平安無事に馴れ、危殆を眼前に見るの憂もなければ、只管私利私慾をのみ是れ計り、彼の眞個の國家を蠹毒し腐蝕する利己主義なるものが天下共通の病弊となるものなり、而して天下の大敵、國民の宿仇とすべきものは此の文弱と利己とに如くものなし、此の二者は天下國家の根底にまで深甚なる病毒を及ぼして、容易に之を救治すること能はざらしむるものなり、然り、此二大仇敵は其の當眼の敵手にあらざれば、到底之に勝つこと能はず、當眼の敵手とは何ぞや、曰く忍苦と義俠即ち是なり、而して吾人は此の二德が戰爭によりて完全に發揮せらるゝを目擊耳聞するものなり、嗚呼戰爭豈大効果なしとせむや。

試に見よ、道義頽敗利己主義橫行の今日に當り、如何なる有權有力の倫理學者が能く、戰爭の日本國民より獲得しつゝある所のものを、一國民に期待することを得るや、財囊を傾けて獻金し、奢侈虛飾を全廢し、増稅を甘んじ、增苦を忍び如何なる窮困慘事に遭際するも、曾て一言悲哀の辭を發せず天下有數の道德家の行ふを難んずる所のもの、今や全國の民皆易々として之を行ひつゝあり、戰爭なるものよりして美態壯擧の出て來る、蓋し其が自然の約束なるが如し。

戰爭によりて家族は別離すと云ふ、然り、別離す、然れども此の別離こそ正しく彼等をして恩愛の深き繫ぎを以て結合するものなれと知らずや、子弟の中に最も愛せらるゝ所の者は誰ぞや、遠く家鄕を遺して出征する者にあらずして何ぞや、最も其の家族を愛する所の者は、國民の義務として之を遺棄せざる可からざる者にあらずして誰ぞや、良人の其妻を遺し、父の其の子供を遺す、何等の勇擧ぞ、何等の忍克ぞ、而して父子夫婦の恩愛情操の繫ぎは是が爲に愈よ益す切實に緊束せらるゝに至らずや。

主義政論の軋轢が人心を乖離分裂せしめて、禍亂の種子を此の大帝國に蒔き、刻々危殆に瀕するに足らしむる時に當りては、一擧にして人心を糾合し、區々の異論を絕ち萬緒萬慾をして一に歸向せしむるが爲には、戰爭と國家の危急とよりも有効有驗の道を誰か案出するを得むや。

蓋し惟ふに戰爭が人心に生起せしむる効果は凡て一婦人が其出征の夫



詞藻

白（夏季）　漱石選

白幣に夜川の風や夏祓　初聲
百反の白帆をまくや青嵐　同
散り松葉窟に白蛇拝しけり　同
巻帯や單衣身輕き白薩摩　同
卯の花に月白けたる流れかな　同
白鷺や藺を渡り行く雨の風　同
麥の穗に白きシグナル見ゆるかな　翠謳
白き富士近き小山の若葉哉　同
祭見や紺足袋白き砂ぼこり　圓外
白檀の香や彌陀堂の風薫る　同

色白き人髣髴として青簾　圭園
褌の白さが動く夜振かな　同
若竹や夜明けて白き月かゝる　浦亭
夏の月敷砂白き社頭かな　同
白木綿の日よけ暑しやさるすべし　黄村
神の灯の白く明けたる茂りかな　同
青簾白洲に人も無かりけり　七三
樓門へ鳩ぱつと立つ白雨かな　同
色白き京の女や日傘　苦風

金閣寺

立札や白蛇の塚に草茂る　同
目白籠葱に低う吊しけり　鳴子
咲き殘る白き躑躅や草茂る　同
麥秋や白壁見ゆる鹿ヶ谷　紅花
白川や石切る軒の青すだれ　同
短夜の湖白らくと明けにけり　五遷
夏木立白木造りの奥の院　淡子
白らくと障子に浦の明け易さ　松溪

菖蒲湯に白き男の子は無りけり　紅白
薫風や白砂踏み行く小松原　盧牛
白壁に蝙蝠うつる月夜かな　夕村
白い根の涼しき瓶の慈姑かな　青龍
行水の人肌白き月夜かな　同
晝貌や凋れたる河の砂白き　五習
湖を渡る白帆や夕立ちけり　同
床の間に白木の大刀や夏坐敷　柳家
山清水眞白の花のうれしけれ　同
白壁の河岸の倉庫や明け易き　同
明け易き月や白浪松の風　柳波
短夜を老の化粧や白髪染　同
炎天や白き花咲く河原道　同
色白きわざをぎの子や夏羽織　同

選者吟

花びらの蝶あざやかに白牡丹
酒庫や窓に燕の糞白き
白柏子涼しき灯連りぬ

七月分課題　黒の字讀込（夏季）六月十八日限
八月分課題　短夜　七月十八日限

夕雲

尾上柴舟選

○　正富汪洋

小兒よとわれを知りげの一言やいざ酒くまむわれ知己得たり

弱しと云ふなわが歌一つ此ごろの博士の文にかふるを否む

ひんがしに男子見えざる年や久しあゝ立てよ君ひかり負へよ君

わが戯れたはれさながら詩の神をやさし仕業とほゝゑましめむ

○　神田文子

ほゝゑみて御膝にすがる稚子ふたり君なほ戀を説きますか今

霧つひにあめとにじめる河そひの柳がくれにきみが傘

ゆく

棕梠花のこぼれ目にたつ板びさし濱には惜しきをきな住むとか

○　　木村鈴子

世をすねてうなだれがちの籠居やすさまし春をわがみだれ髮

草わたる風の音にもわれをのゝく戀かさならぬおもひそも何

裂けよいはほわが立つまゝに我隱せこの天地によらむかげなき

春に傲る蔓は百尺いはをおほふしら藤あめにみだれみだれたり

○　　塚越華畝

春雨のしめりおもたき夕まぐれ牡丹の花のしろきがくづる

一村の若葉のみどりひかりみちてみ空よこぎる虹の輪ほのか

夜あらしに狂ひ狂へる野の大木矢おひし猪のあるゝに似たり

歌に繪にたびけむ園のはなすみれ此子才なく神にそむきぬ

○　　紅花

うつくしき歌の女神の夢うけてあしたわか葉の露ひかりあり

百合の香にさまよふ野邊の夜はあけて露に流るゝあかつきの鐘

○　　東薫

悶え悶えつひにのろひの術しりぬかくて消ゆべき運命もつ身か

人ふたりやみに住むべき宿世なりみやこ大路の春よ老い行けし

○　　高林柳子

藤つゝじ御車よそひうぐひすの譜におくられてゆくか春姫

くだけたる敵の砲車に腰かけて笑みて見かはす兄よ弟よ

○二羽の雀

酔美生

同じ一つの巣に住みて
朝夕睦みし二羽の雀、
一羽は捕られて籠に飼はれ
一羽は寂しく外を飛べり。

風暖かに空晴れし
夏の夕暮、籠なる雀、
羽をひろげて飛びてゆく
外なる雀を止めていへる。
「幸なるかや君の身や、
見よ、われ憂へてひとりこゝに
生命を恨みて羽をかむを」。

吹雪はげしく道閉ぢし
冬の早朝、外なる雀、
内にこもりて餌に飽ける
籠なる雀に来りていへる。
「幸なるかな君の身や、
見よ、われ凍へて食に餓えて
運命を嘆きて、聲をのむを」。

籠には籠の生活あり
外には外の生命あり
いづれか幸か、禍か
神より外にたれか知る。

に語れる單純なれども高崇なる首句の裡に在り曰く『私の事に心配なく出征して、國家の義務を竭しなさい云々』と、然り、眞人は出征して國家の義務を竭す可し然れども此時の別離の辭は終焉之を忘れざる可し、思々念々常に此に懸り、戰場に於て一念此に到らば、勇氣將に百倍すべし、勿論戰場に出てゝ血を流す者は有數の將校兵士なれども、四千六百萬の同胞兄弟は絶へず彼等と共に苦戰健鬪しつゝ終局の勝利を期待するものなり。

嗚呼這箇の美事壯擧は、國家の永久不滅の魂なるものが戰士を活動せしむるにあらずんば、爭ぞ能く此に至らむや、國家なき民には英雄豪傑はあらざるなり、分裂乖離せる國には人はあらむ、軍人はなし、所謂大和魂なるものゝ驚天動地の偉業を樹る、豈亦た怪むを須や。

戰局と日英同盟

「國民新聞」五月十七日

試に思へ、日露戰爭によりて、帝國の武力の有効力は最も、適切に證明せられたりしにあらずや。歐米の列國は日本の陸海軍の精鋭なりといふは條件附にてありき。即ち日本の陸海軍は、支那及び其他東洋各國の軍隊に比して精鋭なりといふに過ぎざりき。日本の武力が歐洲强國の武力に比して互角若くは優勝なりとは彼等の到底承認せざる所にてありしなり而して英國民の一部に於ても、斯る思想を有せしもの必ずしも尠なからざりしなり。然りと雖も、今や彼等は、其の評價の謬れることを當面に認識せざるを得ざるに至れり。

吾人は、玆に英國陸軍中將サー、ウイリアム、ニコルソン氏が、十二日夜日本協會の宴會に於て、我が陸海軍に對して爲したる祝盃辭を引用するを禁ずる能はず。卓識炯眼なる英國の將軍は曰く、『日本の陸海軍が實際に示したる勳績は、如何なる賞詞よりも強く人心を動かす、世界が今戰場に在る、日本軍人の赫々たる功績に就て知れる事實は、デモスセニース、若くはシセローの演說よりも雄辯に其の眞價を語りつゝあり、予にして、日本軍の勳績を適當なる言辭を以て讃美せんとするは猶ほ美花に彩色し、精金に鍍金するが如し』と、又た曰く、『日本は、歐洲列强の陸海軍の制度中最良最善のものを取て全く之を消化し同化したり(然れども若し日本國民が其の祖先の有したる勇敢なる精神と名譽の懸念とを維持し能はざりせば又た西洋文明の爲に忠孝心と愛國心と献身的精神とを薄弱ならしめしならば。如何によく摸倣し、如何によく同化し得たりとするも其の摸倣や其の同化の効果の大ならざる知るべきのみ』と。吾人は、我が同盟國の陸軍部内に於て重きを爲すサー、ウイリアム其の人の如き武人によりて。我が陸海軍に對する斯の如き批評を聞くを喜び。中將の此の評價は、亦た我が同盟國の我が陸海軍に對する識認たるべきを思ふて、特に愉快の情殷なるものあるを覺ゆ。

若くは、列國の一部に於ては、我國を目するに異教國を以てし、半開の野蠻國となし、表面には文明國を粧ふも一皮剝けば、殘忍なる野蠻國なりと觀察するものも無きに非らず。然りと雖も今回の戰爭に對する我國の行動は、斯る觀察の全く誤謬に屬することを事實上に於て證明したり、即ち、我國の人道主義は、日露戰爭によりて最も明快に發現せられたるなり。

吾人は、此の場合に於て、英國を日本に代表し、同盟の締結、兩國の親交に與りて力ある、英國公使サー、クロード。マクドナルド氏が日本協會に於て同氏に呈せられたる祝盃辭に對する答辭の一節を引用するの適當なるを見る。曰く『戰前の外交々涉を研究したる人、及び我が同盟國日本の國民の戰時に於ける行爲、即ち恐を知らざる彼等の勇敢、敵の負傷

者に對する彼等の親切なる待遇、敵の死者に對する彼等の鄭重なる禮遇を觀察したる人は、勇敢眞理名譽の三詞の彼等に向て決して過當にあらざるを知らん、余は再言す、英國の政策は、日出の國の人民の高尚なる仰向を實際的方法に於て、啻に認識したるのならず、最初に識認したるものなるを、即ち英國の政策は、卒先して條約の改正をなし、また戰爭なる同盟の條約を締結して、實際的に日本國民の性格の高尚なる事を識認したり」と。我國が、常に期し、且つ之が實行の爲に努めつゝある所は實に此に外ならざるなり。吾人は。帝國の行動が、同盟國の公使により て斯くも識認せられ、且つ言明せられたるに對して感謝の情なき能はず。

戰後の日本

「六合雜誌」　島田三郎氏

余は我陸海軍の勝利を見て偏に我軍人の犧牲の精神に因るものなることを斷言せんと欲するなり。彼の廣瀨中佐が部下の爲に三たび危險を冒したるが如き、是れ實に我軍人特有の精神にあらずや。然れども此犧牲の精神なるものは軍人獨得のものなりや將た亦國民全躰の所有せるものなりや。是れ余が問はんと欲する所なり

犧牲の精神何ぞ必ずしも軍人のみに限らん。國民は誰にも此精神なかるべからざるなり。然らば我國民には果して此精神の潛伏せるあるか。若し不幸にして戰破れ、敵艦は北海道及び朝鮮近海に出沒するに至らば、吾等は果して戰士に勝りて犧牲の精神を發揮し得るや。若し亦經濟界の恐慌來るあらば我國民は果して其苦痛に堪へ得るや。余はこれを思ふ每に國民殊に責任の位地に立てる者が充分眞面目ならんことを希望せざるを得ず。然るに吾等が往々之に反するの形跡あるを見るは何ぞや。一方には軍人に犧牲の精神發達せるにも拘はらず、他方に於ては公人の道德大に欠乏せり。是れ歎ずべきの事にあらずや。



岡山の裸體問題

成川

軍國多事の際、岡山高等女學校の教員等が女生徒を裸体にして檢査せりとは、よく／＼暇多き人々なりと見ゆ。而も原因は一人の盜難者（其の實は然らざりきと）の爲なりしと言ふに至つては、社會の攻撃、手厳しきも亦無理ならじと謂ふべし。

そも／＼裸体になして、檢査したるを咎むるは末なり。吾人をして言はしむれば、全級の生徒に、嫌疑を掛けたりと言ふが、非常なる過錯なり。諺に曰はずや、七度捜つて人を疑へと。人を疑ふとは、非常の場合ならずば、決してなすべからざるなり。夫れ一人に對して輕々しく嫌疑をかくるすら、非常なる罪過と言ふべ

し、死や之れを多數の生徒に及ぼしたるに於いてをや。

彼れ等は教育家ならずや。この位の理窟は、他より聞くの必要もなく、辨へ居るべきは勿論、他人を戒むべき地位に在りながら、一少女の言を輕々に信じて、己れ等が教育したる女生徒を疑ふとは、殆ど常識なき白痴に近しと言ふべし。斯くの如き愚昧なる行動に出づるは、これ即ち自身等の教育全然無効なりしを、自白するに異ならざるにあらずや。彼れ等教育家は、其の行爲に於いて、既に無能力者たるを證言せり。當局諸氏、何ぞ迅かに相當の處置を行はざる。一校一人の盜賊を出してさへも、全教員は責任を負ふべきが當然なるに、盜賊も居らざるに、馬鹿々々しき騷動を起したる彼れ等は、今日尙平然たるが如し。教育家根性の化肉と蛙の面とは、さても〳〵無神經なるかな。

去るにても意屈地なきは該女學生等なるかな。否、其れ等の父兄なるかな。人權を蹂躙せられても、何等の抗議をも呈出せざりしとは、餘りにお人好しの話ならずや。原因は知事の娘なればとて、はた相手は教員なればとて、何の畏るゝ所か之れあらむ。愚物は根底より愚物なり。其の愚物にして、大に侮辱を與ふるに至つては、之れを等閑に附すべからざるなり。

高等學校の減少に就きて

文部省が高等學校生徒募集の廣告を出すや、山口高等學校の生徒を募集せざるを看て、遽に高等學校減少の非を鳴らす者あり。曰はく、これ高等學校の數を減少せむとするものに外ならず、斯くの如きは、一國の高等教育の發達を阻害するものにして、文部省の處置としては、默許すべからざる過失なりと。文部省にして、果して山口高等學校を廢止せむと欲する者ならば、其の非や、喋々論ずるの必要もなく明瞭なり。然れども吾人の看る所を以つてするに、文部省か、該校の生徒を募集せざるは、深く慮る所ありしが故にあらざるか。

元來我か國の教育機關は、何人をも帝國大學に入らしめむとの方針より成れりと言ふも不可なき程なり。元より有識的に此の方針を定めたるにもあらざるべしと雖も、現在の事情より推せば、教育界には、此の一大街道の外に、道路らしきもの一もあるなし。されば若し此の街道を踏まずんば　皆な逆境の辛苦を忍ばざるべからざるなり。これ豈不完全の教育機關にあらずや。

文相は夙に茲に見る所ありて、在野の頃より、中學校及び高等學校を、二種に區別して、一は大學の豫備門たらしめ、一は實際的たらしむるの至當なるを主張せり。今の情態にては、中學を卒業するも、高等學校を卒業するも、社會の需用に應ずるの力なきは、一に機關の不整頓なるが故ならずや。

文相は在野の頃より二種中學及び高等學校の必要を唱へたれば、今日となりては、之れが實施を計るべきは當然なり。去れど國家多事の際、新に實際的學校を起さむは困難なり。然るに一方に於いては實際的學校を起すの急は目前に迫れり。されば今日存在する一校を改造して、これに當てむとするには、蓋し恰好の策なるべし、山口高等學校の生徒を募集せざる、蓋し兩三年の後に於て改造せむとする計畫の一端ならむか。吾人此の故に、今日遽かに高等學校減少の非を鳴らすを輕佻なりと言ふに憚らざるなり。讀者以つて如何となす。

教育縮少の說

開戰以來、地方に於いて、教育事業の縮少を見たるは事實なり。官設の學校にして、教師を減じたるが如き私立學校にして、學門を閉したるが如き、これ其の近例なり。されば或る者は、直に教育の縮少なりと信じて、盛に攻撃の聲を放てり。

されど吾人をして言はしむれば、是れ單に教育機關の縮少のみにして、決して教育其の物の退歩にはあらざるなり。それ教育の盛衰は、就學兒童の數。學校の數、教師の數等を以つて量るべきにあらず、又教育の施行は。機械の有無多少には、深大なる關係を有するものにあらざるなり。要するに形式の如何は、實質の上に、至大の關係を有するものにあらず。實質ありて形式生ず。形式備りて實質生ずるにあらざるなり。形式備らざれば、教育を隆盛ならしむると能はずと主張するが如きは、畢竟教育の本旨を解せざる者のみ。

吾れ等をして言はしむれば、今日の場合、全國の學校を閉鎖するも、何等の損害なしと信ず。否、此の壯擧によりて、從來沈滯不振なりし教育界は、却つて一進歩するを得べしと信ず。從來の教育とは、什麼の狀態にありしぞや。恐く形式に流れて、精神の教育は行はれず、只文字を敎へたるのみ。而して教育者は、乾燥無味なる教育學を遵奉し、教育と機械業との差別を明かにせず、只これ形式の完備を尙び、自身等の榮進

安樂を願ふの外に、何等の理想をも抱かざりしなり。所謂教員根性なる者は、全教育界に瀰漫せり。猜忌、嫉妬、利己的、而して不遜の心、滿ち充ちて、而も無氣力なりしは、吾が教育家なりき。彼の輩動もすれば、教育家の不遇を歎きて、社會の不公平を論ずと雖も、今の教育家に對しては、今日の位地は相當なりと謂ふべし。斯くの如き教育家にして、教育の大任に當る、危險これより大なるは莫し。さればこそ吾人は此の際此れ等腐敗分子を一掃するこそ好しと主張するなれ。

戰爭とは一大教育機關なり。全力を以つて覓め難き機關なり。而して戰爭とても、數年に亘るものにあらざるは明かなり。戰爭が如何に道德的精神を動かすかは、今日の社會を看ても明白ならむ。戰爭より生ずる現前の事實は、一大教訓として、不言の中に幾百万の老若男女を薫陶す。啻に德育起るのみならず、國民は不知不識の間に、多大の智的教育を受くるも亦日常の經驗に照して瞭かならずや。小學兒童と雖も、新紙によりて、韓國、滿州、さては西比利亞などの地理を誦んずるを見ても、戰爭より生ずる智的教育の有功なるを知るべし。既に斯くの如し、二三の教育機關を縮少したればとて、何の憂ふる所か之れあらむ。

陸軍の成功

開戰以來、海軍は連戰連捷、歐米の諸國をして、驚嘆措く能はざらしめたれど、陸軍に關しては、幾多の疑問は提出せられたり。露人は陸軍に於いて、海軍の失敗を償ふべしと廣言し、其の他の歐米諸國は、日本如何に勇猛なりと雖も、露國の陸兵には、敵し難からむとの憂を抱き、我か國內に於いてすら、海軍の勝利に比肩し得るだけの成功は、陸軍の克く企て能ふ所なるや否やを疑ふ者ありき。而して吾人は早くより陸軍亦大勝を占むべきを言へり。果して然り。鴨綠江畔に於ける大激戰は我か軍の勝利に歸し、遼東半島上には、剛勇なる我か將校士卒の上陸を見るに至れり。噫、何等の快事ぞや。

陸軍はじめ、海軍の成功を看て、これ歐洲の軍備式を採用し、其の長所々々を集めたるが故なりと論ずる者あるか如し。多少は其の原因もありしならむ。然れども是れ唯一小原因たるのみ。其の大原因たる、實に我國民に傳はれる本能性なりとす。三千年來鍛練せられたる武士道こそ、實に今日の大成功を產みし母なれ。

露國の某氏は、露人には幾多の缺點ありと雖も、日軍

に決して劣るとなし、何となれば最後の勝利は、數代の訓錬を經たる兵備を要すればなり、而して日本には斯くの如き訓錬なしと論じたりとか。其の論の基礎は興と謂ふべし。たゞ是れを應用するを誤れり。數代の訓錬にて競爭すれば、露は到底日本の敵たる力なき弱者ならずや。吾れには、開國以來訓錬に訓錬を經たる武士道あり。露の野蠻的訓錬は、年代幾百歳に及ぶと雖も、美々しき武士道の訓錬に遠く及ばざるなり。

露軍に於いては將校の戰死する者比較的多く、我か軍に在りては、其の數比較的に僅少なり。此の現象は、兩軍の士氣を語りて餘ありと謂ふべし。露兵は長官の指揮あるにあらずんば、活動するを好まず。將校は陣頭に立つて兵卒を導かざれば、兵馬進まざるなり。それに反して我が兵は、長官の命令を守ると共に、將校の嚮導なくとも克く前進す、その戰場に臨むや、生を忘れ死を厭はず、たとひ將校の先導なく、又先導長官の戰死するあるも逃走するとなく、ます〳〵一致して敵陣に突進す、これ露兵は勿論、恐らくは歐洲如何なる國家の兵卒と雖も、模倣し難き長所なりとす。而して其の由つて生ずる所は、三千年の鍛錬を經たる武士道なり。

我か國民の腦中には、理窟の上の武士道あるにあらず、本能性としての武士道あるなり。而して其の本能性の活動は、戰場に於いて最も鮮かなり。吾人は我田引水の論法を以つて、陸海軍の勝利は、何々の事業に起因すと論ずる者を好まず。勝利は僅少なる年數の用意を以つては、決して望むべからざるなり。言はず語らず、日本國土に傳へらるゝは、實に此の武士道なりとす。此の壯嚴俊高なる武士道を讃美すべきは、これ新時代の詩人が責任也。

海軍給與令に就きて

三十七年勅令第六號海軍給與令に依れば、海軍々人にして戰死に臨み、生死不明となりたる時は、生存の事分明に至るまで、俸給の支給を停止すとの規定あり、然るに陸軍にては、同一の場合には、全然俸給を停止するとなく、唯だ減給を行ふとあり、同じ軍人にして、一身と一家との和樂を棄てたる者に對して、二種の異れる給與令ありとは、これ吾人の了會に困む所なり。

海戰に於いて、生死不明となる場合、決して尠しと言ふべからず。現に旅順口第三回閉塞の壯擧あるや、幾多忠勇なる猛士の、生死不明となりしにあらずや。

斯くの如き場合に於いて、遺族は忽ち糊口の道を斷絕せらるゝは、法令の文にて明白なり。これ豈軍人に對する至當の給與法と稱し得るべきか。吾人は常に軍人に對する給與法の、文官の其れに比して、甚しく薄少なるを思へり。而して今日此の法規あるを見て、再び其の冷淡なるに一驚を喫しぬ。誰れか我が忠勇なる海軍々人諸氏に平和を與ふる者ぞ。

露畫伯を吊す

露國畫伯ウエレストシヤン氏、六十餘歲の老軀をも厭はず、旅順に來つて、マカロウフ中將の賓客となり、遂に旗艦と共に、不幸の最後を遂げぬ。

氏は戰爭畫を以つて大名ありき。其の壯年の頃には、クリミヤ戰爭、又は中央亞細亞遠征隊に加はり、晚年には印度に遊びて、ヒマラヤの靈峯に躋攀して、畫材を取れり。而して日露の危機迫るや、親しく滿洲を視察し、露國して某誌に投書して曰はく、露は滿洲に於いて勝利を占むるとも、遂に損失者たるべしと。其の人にして遂に旅順の海上不歸の客となりぬ、誰れか又之れを悲まざらむ。

然れども氏の最後は、我れ等に大なる教訓を與へたり。何んぞや。吾れ等は職に忠實なるべしと。これ生れてより以來しば〱聞きし所なりと雖も、其の實行は至當なり。今や畫伯は其の行に於いて、錚らしく我等に教戒を與へり。我が不振の畫界は、氏の其の天職に忠實なるを見て、大に奮起せざるべからず。

紛々錄

◎露國の捕虜一人、申請して曰はく、願はくは、日給三十錢にて傭はれたしと。而して嘆じて曰はく、吾れ俸給を受けざること三ケ月の久しきに及び、昨今は煙草を購ふの金すらなきに至れりと。

◎誰れか亦、彼れを嗤ふ者ぞ。彼をして斯くの如き愚かなる言を吐かしめたる者は、露國の國家ならずや。人道を無視せる國家は、啻に他國の害を及ぼすのみならず、自家の臣民をして、斯の如き醜行を演ぜしむ

◎彼れ等捕虜の境遇、憫むべきのみならず、其の思想亦憐むべし。彼の一人とても、まんざら馬鹿にてはあらざるべく、其の屈辱を忍んで此の言を吐きしは、已むを得ざるに出でたるならむ。吾れ等は、啻に隣邪を救ふのみならず、彼れ等不幸の國民を救はむが爲に、正義の刄を振はざるべからず。

◎トルストイ伯は、巴里の某誌通信員に語つて曰はく、若しも黃色人種にして殘忍無道の人種と云ひ得べくんば、歐洲人亦然りと。遂に世界的偉人なるかな。

◎げに歐洲人こそ殘忍無道なれ。彼れ等は、自己の發明せる機械を以つて憫むべき蠻人を威嚇し、而して彼れ等の國土、財寶を橫奪する者にあらずや。

◎露は歐人の虎狼の心を代表する者なり。彼れは變國に行ひし方法を極東に向つて應用せむとする者なり。其の愚や寧ろ憫むべし。

◎北條時宗從一位を贈らる。聖恩枯骨に及ぶと謂ふべし。相模太郎か靈地下に感泣せむ。

◎相模太郎、壯年にして死せり。されど彼れは堅實なる意志の化身なりき、强國なる武士道の權化なりき、元の暴威を挫し彼れの大業ば、洵に大叙事詩の好材料なりとす。

◎肝付小路部長の嚴父、兼武氏曾つて時宗を贊して曰はく『天縱聖明也、追贈官位之盛典可期也』と言ひしは、先見の明ありしと言ふべきなり。

◎提灯行列にて、幾十の死傷者を出したるは、吾人の最も悲む所なりこれ斯く程迄の大混雜を極めざるべしと豫想したる不注意に基くのみ。決して人々の秩序を重んぜざりしが故にはあらざるなり。

◎彼の行列中、秩序を紊さむとする者もなく、酒醉者もなく、皆なよく紳士たるの體面を保ちたるは賞すべし。

◎警視廳は、學生風紀の取締訓令を出せり。曰はくナイフ、小刀、或は短刀の類を所持するに就ては、相當の取締をなすべしと。少壯時代には、兎角刀劍類をひねくりたきものなり。況や戰爭の時代に於いてをや警視廳が此の際訓令を與へたるは、時期に適へりと謂ふべし。

◎全廳は之れと共に、道路に小兒を遊ばしむるの危險を注意せり。街道上愛らしき小兒の危難に遭ふは、概して親の不注意なれど、一は各所に相當の遊戲地なきにも因る。乃ち親の注意と共に小公園の設備を要す

◎ニコライ主教が、松山病院の露兵病患者に向つて送れる信書とは、實に不可解の雜文字なり。曰はく

不幸なる病者の境遇を變じて露土を助勢することを滿腔の熱血より神に祈禱す祖國を愛する爲に鄕等か犧牲せしは今日の不幸を理會に於て慰むべし此不幸か精神の利益に向ふべきとを心掛け且自分を救ふ敵の將及び永久の滅亡にも鄕等の健康を守らむことを神に祈禱すべし云々

隨分解し難き文章ならずや。

◎外債募集に關しては諸說紛々たり。而して多くは之れを非難して、日本の國辱なりと言ふ。吾人をして曰はしむれば、こんな事を國辱の何かと騷ぐは狹き識見なり。

◎金か無ければ借金も爲さゞるべからず、借用には、何を抵當にしたればとて、恥づべき理由なし、其の之れを恥とするは感情の上のみ。

◎大國家、文明國にては、何々の事は決して爲さず、關稅の擔保の如きは、小國民のなす所なりなどゝ論ずれば、如何にも至當の如しと雖もそれが日本國家の恥辱なりとの理由は成立せず、外人にして嗤ふ者あらば、彼等をして、腹減るまで笑はしめよ。我れ等只金の利用を目的とし其の爲には道德上、國際上の法則に觸れざる限りは、手段の何たるを問はざるなり。

◎徒らに非難すること勿れ。經濟上に於いては、海外の信用甚だ薄き國にして、克く外債の募集を巳に得たるは、當事者の苦心大なればならむ。我れ等先づ當局者に感謝の意を表せざるべからず。

◎露國に在りし栗野公使は、露西亞の空氣にかぶれたりと傳へらる、まさか、其の樣の事もあるまじ。人の口はうるさきものかな。

◎昨夏は華厳瀑が才子の死場なりき。今年はドウやら淺間の噴火口らし。さりとて火口の周邊に驛も築れず。困つたものなり。

◎宮古艦、吉野艦、初瀨艦の損失は、實に遺憾なり。戰ひて破れたるよりも、更に殘念なるは、世人一般に感ずる所なり。

◎されど三艦の不幸を見て、意氣沮喪すること勿れ。艦船は再び製造

するを得む。たゞ忠勇なる將士の、空しく海底に沈みたるは、千載不滅の恨なり。

◎黄人禍は、海外に於いて、ますく喧傳せらる。我れ等噴飯に堪えざるなり。左程に黄色種が恐しくば、平和の態度にて交るが宜しからむ◎白人程勝手の者はなし。自身等が慾望を逞せむためには、有ゆる手段を用ひて、異人種を苦め、而して異人種の偶ま强力なるものあれば、忽ち之れを惡寃とす。

◎黄人禍を意味すると共に、之れを芟除すべき必要を說きたるは、獨逸皇帝の物し給ひし繪畫ならむ。これ東方闇黑の雲間に、黄色人種を描きて、歐洲同盟國が、之れに嚮はむとする圖にて、北淸事件の頃、公に せられたるものなり。

◎去れど獨帝にして今日の形勢を觀じ、其の眞相を知らば、彼の繪畫を破棄せざるべからざるに非ずや。黄人禍は東方にあらずして、隣國の露國に伏在しつゝあるなり。

◎憐むべきは佛國なり。露の信用すべからざるは日一日に明白となり注ぎ込みたる金の將來は心細し。さりとて緣を引る譯にも行かず、獨の露と提携せむを懼るればなり。而して英國の睥睨に會ふ。これをこそ腐れ緣とは謂ふべけれ。

軍國の心的經濟

高須梅溪

由來形式的、有形的の方面に關する論議は能く一般の視聽を引くに足るも、無形的、精神的の方面に於ける言說は、稍もすれば、我國民諸子の閑却する所たるを免れず、これ一に我國從來の精神的發展傾向が、現實にのみ偏倚したるによる處多けれど、誠に喜ふへき習慣に非ず、今日軍國の時潮に乘じて、有形的方面即ち衣食上の經濟節約を唱道するものあるも、無形的方面に於ける經濟即ち心的經濟の事に關して、何等の重きを置かざるは、吾人の甚だしく贊同し難きところなり。

彼『軍國貯蓄論』を唱へ『衣食節儉說』を提する人士の意向は那邊に存する乎。余の見るところを以てすればこれ一に軍資を補ふべき準備たるに外ならざるなり、これ愛國の赤誠を致す方法として、慥かに適切の一法たるに相違なし、如何に我國の陸海軍が勇將猛卒に富むとも、將た廟堂の諸豪が能く才幹膽氣を發揮するとも、軍資にして缺亡し、國富にして萎靡せば、何等の功果をも擧ぐること能はさるのみならず、却つて意外の邊より挫敗の慘狀を現出し來らん、此點よりすれば『軍國貯金論』は、甚だ其當を得たるものなり、戰時經濟の理法に協ふものなり、されど吾人は單にこれのみにて滿足すべき乎、吾人は唯如上の事實を遂行したるをもて一切の能事終れりとすべき乎、否、事は決してしかく、單純ならざるなり。

軍國に於て尙ほ吾人に要求するもの一あり。曰く、そは心的經濟なり。われ等は、素より有形上の國富を形造らざるべからず、而かもこれと同時に無形の國富を形造るべきことを自覺するを要す、無形の國富とはわれ等國內に止れるものが、其精神を快活ならしめ、皎爽ならしめ、剛健ならしめ、以て心的活動の範圍を豐富にし、心的機關の運用を輕快にして、常に綽々たる餘裕を存するに至らしむることこれなり。

蓋し心の經濟は、無形的方面に於ける經濟の根抵たり得べき資格を有すると同時に、又密接の關係を有するものなり。若し心の經濟にして、其當を得ざらんか、惡影響は自ら有形的經濟の方面に及はん、若し心の經濟にして可ならん乎、善影響は期せずして、有形經濟の上に傳波し來らん、一は能動的にして、一は所動的なり、一は自覺的にして、一は他覺的なり、一は主にして、一は客なり、前者は根幹にして、後者は枝葉なり、故に事實上有形的經濟の成果を得んとするには心的經濟の方面に力を致さゞるべからず、然らざればこれ皮相の幻覺にのみ迷ひて、眞實の法相を辯せざるものなりと言はざるべからず、心的經濟此に於て乎、誠に輕視すべからざる勢力を有す。

さらば心的經濟法の圓滿なる見現を致すの術如何、これ吾人の略述せんとするところなり、されどこは甚だしき難問題にして、滿足なる解決を與へんこと素より思ひもよらざるなり。

按するに戰爭時代の精神的通弊とも言ふべきは、一に勝敗の上にのみ執着し、眼前の匆忙にのみ着目して、往々吾を煩雜なる心的境地に投するにあり。これ國民の常情としては、誠に避け難き勢なるべく、何人も絕對的に之を抑壓すること難かるべし、されどこれのみにては、精神常に餘裕を得ず、從つて意外なる瑣事の爲めにも、自ら心的經濟を破却したることなしと言ふべからざるなり、かゝる事態のみ永く續かんには、却つて精神の活動力を萎靡せしめ、混沌冥濛、前後の事態を判斷すること能はざるに至らんとも限り難し、されば吾人は深く此點について靜思する處なかるべからず、殊に戰局の發展につれて、我國の狀態は一層煩雜となり、國民の聰明なる判斷と、剛健なる意義と必とすることゝなるをもて、愈よ心的經濟の方途を確立せざるべからざるなり。

さて此方法には種々あるべけれど、吾人が當面に思ひ當りたる處は、後の三箇條に過ぎず。（一）戰時中平

時の如く靜穩沈着、餘り妄想熱狂に走らざること（二）戰爭の現在よりも遠く戰後の未來に想ひを馳すること（三）戰爭に關する娛樂趣味よりもこれとかけ離れたるものに歸依する事、これ等は何れも其一方法たるに足るべきものなり。

第一の方法については、余之を他雜誌に於て論じたることあるが故に、詳説せざるべし。唯言ふべきことは、妄想を除却し去るべきことこれなり、吾人は稍もすれば、其心的領域を擧げて、情慾、惡德の想念に讓り渡すことあり、殊に此六、七、八月の候は、吾人が心的透徹を錯亂せらるゝ時にして、種々の妄想の爲めに心を過度に費し、無形的大不經濟に墮することと少からざるなり、此點は深く注意せざるべからず。

第二の點に關しては、之を超時代的方法なりと言ふも可なり。蓋し現前の光景、事象のみに着眼し、一に此點にのみ思ひを寄する時は、一事一物悉く自己の心を勞する種となり其間何等心的方面に餘裕あるを見出す能はざるなり、かくの如きは、現前の煩雜なる些事によつて、心的大不經濟を釀生するに外ならず、今少し思ひを悠遠の境地に馳することを要す、彼れ現前の「成功」を追ふの徒が神經衰弱に陥り、種々の精神病を得るは、必竟他に餘裕を存する方法を講ぜざればなり故に戰爭時代に於て、遠く戰爭收結後に空想を馳せ、現在の煩雜境より脫却し、解脫することは、時にとりて極めて愉快なることゝ言ふべく、その結果心的經濟の軍行を圓滿平滑ならしむる功力あり、これ余が第二策を勸むる所以なり。

第三の點に關しては、之を惡趣味の解脫法と言ふも可也。何となれば、戰爭開始以後の文藝美術は如何ばかり下落したりとするが、之を寄席の方面に見よ、「日露義太夫」とか言へる淨瑠璃の如何に沒趣味にして、殺風景なるかを思へ、之を劇場の方面に於て、日露戰爭に關する演伎が如何に現實の實感を挑發するかを考へよ、更らに轉して文學の方面に見れば、可なりの健筆家諸氏が移し玉へりとか言へる軍歌の類ひが、大抵形式的に雄壯らしく、暢達流麗に近き文字を列ねたるに過ぎずして、何れも平凡以上に出つる能はざるを思へ、將た又軍事小説と言ふが如きものも、概して淺薄單純、唯其名を以て他を驚かすに過ぎず、三面雜報の少し進化したるものらしき面影を存するのみ、其他繪畫の如きも、何等感興に打れたるが如き佳什に接すること、終に不可能なり、如上の文藝に親むは、これ決

して自己の美感を享樂する所に非ずして、實感を惹起するが如き惡果を生じ、吾人が慰藉源泉は、忽ち涸渇して砂の如く化し去らん、かくては心的經濟を打破し盡するものにして、精神を萎靡せしむべき原由なり、某雜誌々上に於て、戰報の外に、常の如く普通の三面記事を掲載せよと言ひしは、矢張此邊のことを憂慮したるが爲めに外ならさるへし、かるが故に、寧ろ戰爭に關係なき小說、詩歌、繪畫、音樂に親みて一切の實感を離れ、熱沸せる頭腦を冷やし、綠蔭楊下徐ろに美の別天地を逍遙することは、心的經濟に對して、非常の利益を有するものなり、快活靜雅の精神、透明健全の心意一にこれによりて、今の幾部分を受け入るゝことを得ん、これ適切なる心的經濟法に非さる乎。

以上は、單に吾當面思ひ當りし處を略說したるに過ぎさるを以て、此以外に恰好の方法なしと思惟すべからず。將た又人によりて種々氣分を異にするが故に、直ちに吾言說の行はるへきや否やを判することは能はず、されど少くとも吾人の言に耳を假すものは、必ず心的經濟の一部を圓滿に成就し、いざと言ふ場合に臨みて無形的軍資金の若干を提供することを得へきなり、これやがて有形的經濟の好都合を豫示する前驅なり、符號なり、根本にして既によく健全ならんには、枝葉も亦自ら健全ならん、此無形的軍資も有形的軍資の貯蓄も、相互平均的に經濟の好運用を誤らざるらん乎、我國の基礎は、以前に比較して數層强固のものとなるべし、かくの如き狀態に立ち至らば、戰局の延引何かあらん、敵國の姦策何かあらん、戰後の收拾又決して困難を嘆するの要あらんや、われ等は充分の勇氣と機敏と冷靜とを持して、敵に對することを得ん、これ一に追々富なる精神的貯金を有する果のみ、吾人が戰時に於て心的經濟を奬說する所以のもの、此旨趣の外に出でさるなり。

浮世の相

小梅閑人

▲愚にせらるゝ資格があるから愚せらるゝのだけれども、大坂新報は此度デモ文士を愚にせんとするの廣告を出したり。「新脚本懸賞募集」といふよりも何ぞ改めて「其實文士愚弄法」とでも言はざる。壹千圓といふ懸賞金は必ずしも少額にはあらず、然れどもウカと之れに釣られぬ用心するが專一なり。上方贅六の腹の底見え透きて可笑し、余輩「社長厭敵」などゝ艶々しく吹き立つる何の要かある、若し眞に文學を得んと欲せば規定(六)を公明にすべし、文士心せよ妥協示談の弊風は文壇にまで吹き荒めり。

▲三尺地の下の虫が死ぬと申す罪深き業なれども、ツイ聞えたから聞いたのだ、僕の向隣りの家で此の頃、内村鑑三の聲がして曰く、「黒岩周六といふ奴は徳富猪一郎のやうな奴だ」と。

▲平民新聞の枯川先生等に對しては幾分の同情なきにあらねども、特更に力めてデモ迫害を招かんとする、志士遭難の名を樂まんとする態度の臭氣鼻をつくものあるを嫌ふ。

▲黒岩が堺や幸徳等を許して「苦勞の足らぬ人」といつたといふが、流石に破的の評語である。

▲パーツ、アイ、ピウで現代を見ることが六ケ敷いから、今日社會の人に果して何樣な性格の人があるかは之れを史上の人物に比べて却つて見るとが六ケ敷いけれど餘り好いたらしい人物もない。然るに我が國史上の人物に對しては僕は常に豐かなる欣慕敬愛の念を捧げて居るのである、歷史美といふ一種の審美の戲を隔てた奧を見るからでもあらうが、史上の人物は大抵僕の好きな人々である。其の數ある中で最も好きなのは明智左馬介光春である。彼れが光秀に殉するの意氣と、信長の首級に對して士人の禮節を重んするの襟懷と是等を想ふ毎に僕は一種の嬉涙を浮べることがある。古の武士道は今日に必要がないけれども、明智光春の如き性格は我が國民性の典型とすべき點がある。吾人の祖先に光春のやうな人物があつて吾人は取りも直さず其の後世子孫であると思へば、日露戰爭のある現代に居つても一段と志氣の昂然たるもののあるを覺ゆるのである。

▲社會改良といふをは誠によい事であるが、惜しむらくは濆々たる口舌者流に徒だ好辭柄を貸す虞がある、二流三流の獨りヨがり的思想家達の弄ぶ物となり易いのである。廣き意味の社會改良の一たる社會問題の如き事件も決して獨立に進展せらるべきものではない、演繹的に一定の信條より打算し來れるものではない、吾人は彼の徒に社會改良を口にするの徒が漠然たる談議を止めて一箇の確實なる職責に從事せんとを望む、社會改良は個々物が進步改善を遂げたる後の總額なり、吾人は此の點に於ても今の所謂社會改良論者が多く歐洲大陸の同意見なのみ云々して却つて英吉利に於ける社會問題上の意見を參酌するもの少きことを悲まずんばあらず、ミルやトインビーの如き思想家の敎ゆる如く社會問題の事は矢張普通敎育の徐々たる而して確乎たる事業に待たざるべからず、今の社會論者がいふ所の如きは神經銳敏なる靑年や田舍の一知半解の人々に不健全なる考へを抱かしむるに了らんのみ。

▲靑年雜誌にして大人の仲間に入らんと欲し、自から靑年ならざることを辨ずるものを往々見受くれども、子供が大人ナブリをする態度を改悛せざる間は依然として靑年の域を脫せざるなり。

▲單純にして突飛なるとを言へば俗人や靑年の注意を呼ぶ、此の注意を呼ばんが爲に浮身を窶し奇言怪語をならぶるものあり、非戰論の如きは其一なり。

▲言論自由を揮回して、非戰論を與へて其の筋に譴責せられたるものを辯護せんと試みたるものありき。言論の自由、言論の自由、こは明治拾八九年頃までは最も盛にしてまた最も之れを唱ふることを要する時代なりき、今日に於て言論の自由だなどゝ今更らしく騷ぎ立つは如何にも幼稚なり。言論の自由を當然要求する資格は其の時代の聰明なる見識を有するものにこそあれ、小供が親を困らす如き態度の者に對しては其の筋に於ても相當の取締りを要す。小供の內は兩親の看護を要すと一般なり。今又しても言論の自由呼はり片腹痛し。



浮浪人問題

天涯茫々生

一

日露戰役は、我國に在りて古今未曾有の大事變たるとは今更言ふ迄もなし、然かも斯くの如き一時の事變にあらずして、今日我日本の社會に何人の眼にも能く觸るゝ所の事實は人口增加の大勢なるべし。

帝國統計年鑑に掲ぐる所に依れは、我國の人口は年々五十萬宛增加す、斯くの如きは他に多く例を見ざ所爰に工業問題起り、移民問題生じ、世界政策稱道せらる、亦偶然ならずといふべし、併しながら東京市の人口增加は更に現著にして、全國人口千百〇六に對し東京市は千三百二十一の割合を示す、歐米諸國の各都市に於ても、蓋し其の例多からざるべし。

右の如き膨脹の結果は、東京市の社會階級に如何なる反映を見めせるぞ、木賃宿の增殖も反映の一種たべし、共同長屋の現出も其の一種たるべし、豫戒令被執行者增殖も同じく其の一種にして、而して警察監獄の繁忙も正しく其の反映の一種たらん、經濟學者の間に「勞働問題」の行はるゝも其の反映にして、一部論者の間に社會主義を唱ふる者生じたるも其の一種に數ふるとを得べし、然りと雖も、余輩は下層の社會と以上の階級とを問はず、一定の職業を有せざる浮浪人增殖に於て最も著しきを覺ゆ、爰に讀者を伴ふて其の消息の一般を研究せん乎。

二

大江戸の中央日本橋と相竝びて、最も地方來住者の注意に上ぼる神田眼鏡橋の袂、電車、人車、旁午錯綜せる處に掲示板あり、之を見るに

> 宿るべき錢なきものをたゝて宿泊せしむ
> 貧兒、孤兒、貧病者は養育院、孤兒院へ入院の世話をする
> 職業なくて困るものは職業の世話をする
> 本所の世話になつても金は一文もゐらぬ

是れ無料宿泊所の掲示に拘はる、該宿泊所は、養育院幹事安達氏等の手に依りて創立せられたる者にして、東京市唯一の浮浪人救濟所たり、其の組織は特志者の寄附に依りて成れる者なれは、之を一の社會事業として見んには、敢て注目に値せずと雖も、東京市膨脹の上に注目すべき明治三十四年に、該宿泊所の創立せられたるは、余輩の甚だ珍とする所、創設の當時、舞ひ込み來る浮浪者は、放蕩書生の類多かりしが、一二年來漸次勞働者の數增加し、今や生活社會の劣敗者たる浮浪人を充滿するに至れり、僅に此の一小事實に依りて見るも、年一年東京市に浮浪人の增加せるを知るヿを得。

因に、明治三十四年は、日清戰役の景氣を受けて活氣ありし我國が、不景氣に入りし最初の年にして、東京市に於ても、最近十年間最も地方の來住多かりし年なり、地方人の來住多かりし反響として、木賃宿增殖著しく、今日迄我國に見ることなかりし共同長屋の生ぜるも、實に此の三十四年にして、二六新報社の勞働者大懇親會ありしも、社會民主黨の起りしも、同じく此の三十四年に屬す、蓋し同三十四年は、東京市膨脹史の上に、注意を逸すべからざる年なり。

無料宿泊所の現狀如何といふに、一日二十名を限りて止宿を許可し、二十名以上に出づる時は、斷然其の依賴を拒絕す、是れ規模の尙未だ小なるが故にして、而して昨年頃迄は一夜平均十名內外なりしに、本年に入りて俄に多數を示し、特に日露戰爭以來は、地方の流民にして軍夫募集の風說に惑はされ上京せるもの多かりしより、流れ〳〵て無料宿泊所に來るもの頗る多となり、今、昨年七月より十二月に至る六ヶ月間の成蹟表を見るに

	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
養育院に入院せしめたる者	一	一	一	一	—	五
業務を與へたる者	二	一	二	五	三	三
宿泊のみせしめたる者	二八二	二六五	二五二	二六七	二七七	二八八
計	二八五	二六七	二五六	二七三	二七五	二九二

にして、其の統計千六百四十六人、即ち一日九名餘の

成績を示す、但し其の止宿者にして、後日其の恩義を謝し來りしは、僅に七名――、其の恩義を手紙に酬ひ來る者、千幾百人中僅に七名なるの事實は、余輩は讀者の前に止宿者――浮浪人の性質を發揮して餘りあるを覺ゆるなり、其或者は、平日木賃宿に寢食せる者にして、其の日の木賃料を得ざりしが爲に、偶々該宿泊所に舞ひ込みしならんが、其の多くは思案盡きて擧句の果、飢餓と失望とを懷ひて來れる者にして、例令翌日に至るも、眼前一條の活路だもなく、布團の上に溜息を洩らす固より其の所、之を以て當所內規の午前六時に至るも、寢所を出でず、主管者の注意を受けて初めて衣服を改め、顏を洗ふて……再び悄然たる幻影を地上に落として、電車の響ける街路に、その悄然たる幻影を沒す、斯くて渠等は其の新しき日に於て、別に希望を拾ふべき乎。

余輩は、例令七名にもせよ鄕里に歸りて書信を送る者あるを寧ろ意外とする者なり、蓋し渠等浮浪人や、當所に來らざる前に、既に其の身上は、普通人と異なる一種の消息――假に離るべからず棄つべからざる幾段の浮浪的境涯を經過し來りし者なるべきを以て、其の心理狀態は、一と度監獄に入りて人寰外の消息を味へる者と異るとなきものなり。

無料宿泊所主管高島氏の內室、語りて曰く、「一人として滿足な者は參りませぬ、きよと／＼した、變な、横着なやうなといッて何んだか、ぼんやりしたやうな人達ばかり參ります」と、然り、浮浪人の特色は即ち是れ。

三

今日都市の人口增加が胎みつゝ在る所の浮浪人は、無料宿泊所に盡きたりと言ふを得じ、無料宿泊所に來り投ずる者の如きは、僅に一夜の寢處に苦める路上の彷徨者にして、職業に離れ生活に窮せる者、無料宿泊所以外甚だ多し、都下所在の貧民部落に、幾多の浮浪人あるは讀者の知る所なるべし、加之、貧民以外、幾多の浮浪人あり。

蓋し世に貧民と浮浪人とを混同する者多し、然れ共貧民と浮浪人とは、多くの場合に在りては相同じきものありと雖も、生活に窮迫せざる階級にも浮浪人あり而して法律上の浮浪人あり、經濟上の浮浪人あり、經濟上の浮浪人は貧民に屬する者多しと雖も、生活は最下級に落ちざる者にして、尙浮浪人の名稱を下だすべ

き者之なきにあらず、一定の職業なくして、窮迫に就ける者の浮浪人たるは固よりなれ共、生計の方針を一定の職業に置かずして常に風塵の間に彷徨する者、悉く浮浪人に屬す。

故に嚴密なる意味を以てせば、政治社會にも浮浪人あり、文學社會にも浮浪人あり、産業社會にも浮浪人多し、封建制度破れて爰に三十七年、歐米數百年の變遷を僅少年月の間に經過せる我國に在りては、到る處の階級に浮浪人あるは固より其の所、特に都市膨脹の反映として、其の生活社會に浮浪人の生ぜるは、蓋し亦自然の數なりと謂ふべし。

四

二三ヶ月前、一勞働者――嘗て某官省の小役人たりし男にして、或る事情の爲に人力車夫となり、再び身を轉じて馬丁の群に入りて男を賣り、今は心を改めて電氣工作所の電氣工夫と爲れる者の妻が「子供は可愛ゆけれど貧乏世帶が嫌になりし」と、稱して、蹤跡を韜ませる不思議の事實に會せり、余之を知人より聞き、一日、偶然の機會より、其の住處なる築地南小田原町に訪へることあり、而かも爰に奇なるは、其の棟割長屋に、四五年前、ある業の必要より、友人を中間にして屢ゝ會見せる人にして、過去の經歷に一種の異彩を放てる某氏も、同じく其隣家に住める事忘れなり、机邊のノートブックを翻へして、此の勞働者の住める周圍の人物を擧ぐべし、文學の異ろは、當時の記錄をその儘、摘載せるが故とす。

＊　＊　＊　＊

此の棟割長屋は、春野の家を合せて、五軒。最初の入口の家は、三四ヶ月前引つ越して來た家で、主人は四十格好の、家族五人の家で、聞く所に依ると、二三年前、東北地方より東京に出たものであるとか。

主人といふは、商人とも會社員ともつかぬ風體の判らぬ男で、朝早く外に出てゝ、夜は八時――九時、時に依ると、十二時過ぎの深更に歸るともあれば、其樣歟といへば、二日も、三日も、家に凝然として、ぶらりと爲てゐるともある、何商賣の人だらうと、噂の高き長屋の中では、專ら評判と爲つてゐるが、誰も斯樣と判斷を下だす者がない、その內室も、近隣と言葉を換はすのが嫌かして、滅多に外へは出ないが、言葉振こそ東北音であれ、すつきりとした見醜からぬ風釆、國許は如何なる身分の者であらうか。

何商賣の者であらう！　自分にも判らぬが、思ふに此の判らぬ所が、此の家族の身上で、二三年前田舍より出た人とあれは、「車も挽けず、かといつて商賣もできぬ」といふ、自身でも如何したらよいか判らぬ、と

いつたやうな人達でてもあらうか、近年東京市中には這樣な爲体の知れぬ人物は、日增に殖へて來てをる。

次は春野の家で、その向は、僅に夫婦二人の小薩張した家族、亭主は二三町先の味噌問屋とかへ出てゐる味噌職人、自分は未だ一度も會つたとはないが、春野の妻の言葉に依ると、身體に中廢のない實體な男であるとか、その女房殿は、如何した譯か、春野の妻と、妙に仲が良い、殆ど丸一日、春野の家へ來て、愚にも附かぬ話説を繰り返へして、ぶらんとしてゐる、その容貌は、取り立てゝ言ふべきでないが、那處やら妖艶やかな、愛相のよい女、併しながら、自分は二三度會つて、直にそれを此の婦人の價値を知つた。

といふのは、此の婦人は一昨年の末頃迄、芳原に源氏名を呼ばれてゐた者の果て、その態度の妖艶やかなのも、成程それと首肯れるが二三度しか顏を知り合はぬ者に對しても、若勞した昔日の事を大びらに語るので興が醒める、如何にも功名手柄を現はしてゐたやうに誇り顏に語るのである。春野の妻も、最初は可笑しな人だ、と笑つてゐたが、後には即處が性が合つたものと見え、殆ど同胞のやうに、親しく爲るやうになつた、不思議なもの!

平常は妙に見識を立てゝゐた春野の妻も、居は氣を移す、で今も所天に、理窟を駢べるにも似合はず、女郎上りの女と親しくして、向の內儀は氣樂だ、と歸りゆく後ろ姿を眺めてゐるともあつた。

奥には二軒駢んでゐて、春野の家の橡に當つてゐる方の家は、小說家の材料にでもなるやうな家族――といつて、五十七八ばかりの老婆と、二十二三の娘と、母子二人切の家であるが、此の娘については、自分は頗る興味を覺ゆる、常に身を綺麗に飾つてゐるのが、別に不思議でないとしても、その樣態が、ちよと此樣な長屋には見られぬ。何時も雪駄をちやら〳〵高い響音を前に、外へ出てゆく彼は蓄へ者だらう、とは何人も判斷を下だすに躊躇せぬ所で、自分も一兩度路次の中で摺れ合つたが、何んだか虫の好かぬ、いやな女。

髮を揚卷にして、隣家一同には、挨拶一つ與れず、つんと澄まして氣位を示してゐる、今の身分を誇つてゐる者と見ゆる。斷うして、毎日――午となく、夜となく、例の雪駄で外へ出る、其樣鈍かと、一日家に在りて、聲高々に小說本を讀んでゐるが、その讀み具合といつたら、聞きもので、六七尺離れてゐる春野の家へ、手に捌るやうに聞こゆる、その身振聲色も、も、眼に見ゆるやう、またな嫖樣小說かと、向の女房は、陰口を聞つてゐたが、此の陰口丈けは、自らも快哉を叫はざるを得ない。髮を束髮にしてゐるのを見れば、普通の若い者でなく、近頃流行つてゐる新式のポツ〳〵嫖、女學生の成れの果と察せらるゝが、あの聲で蜆……の反對で、あの風采で、此の聲が、と入らぬ心配ながら、傍にゐる母親に注意してやりたい。

小說が嫌に爲ると三味線、三味線に厭けは箏、奥のお孃樣の日々の仕事は、此の三つ。日露戰爭の起つてゐる、社會主義の呼ばゝれてゐる新時勢は、ちよと變はつた現象を、細路次の割棟長屋に現はしてゐる、そは兎も角も、長屋の者も、此の新來の珍客には、何れも好奇の眼を放つて、注意を怠らない、或時春野の妻は、左も羨ましげに、

「あゝ氣樂な身分だ

と呟いてゐたが、井の水一ッ汲まず、三味線を膝に身綺麗に仕てゐるのが、世帶に疲れた者の眼には、氣樂に見ゆるのであらう。

「あゝ氣樂な身分だ」、と春野の妻に羨まれてゐる、所謂お孃樣の隣は、お孃樣の家とは反對に、晝は雨戶一枚明けて、一枚は何時も閉ておつてある寂寥とした陰氣な家、主人は白毛交りの、口髭嚴めしきりゆとした人で、何時の間に出るのやら、此の主人公の外出を見受くるのは、一週に一回か、十日に一回、平日は頓と姿は見えぬ 然れば在宅かといへは、矢張大抵留守である模樣、その職業や身分は、前の入口の家と同じく悉皆判らぬので、今は長屋中でも不思議の一ッに數へられてゐる。

女主人は病身、醫者の出入は見掛けないが、絕へず家に臥つてゐるらしく、偶ゝ家外に出るのを見ると、顏眞靑の弱々しい姿が、何んだか憐れに見ゆるが、如何歟すると、此の弱々しい內室の疳高な聲が、外に洩るゝこともある、娘はつい二三町先の小學校の女敎員に出てゐるので、近隣では、あの娘さんは、兩親を養つてゐるのであらうといふ說もあり。然るに世間は廣いやうで狹いもの！自分は一日偶と此家の名札を見て、△△▲▲▲とあるので、吃驚した、家の主人こそは、嘗てなにがし政黨創立の際、卒先して盡力した、一時は新聞紙上で、その名の喧しかつた民權家の後身で、中頃某事件に關係して牢獄の身と爲り、出獄後は何を職業としゐたかは知らぬが、四五年前、或會合で屢ゝ言を交へたことがある某氏であつたので、自分は深くその奇遇に驚いたので。

* * * *

余輩は特更に軟文學を弄して、讀者の喝采を望む者にあらす、余は假に名稱し置ける春野の妻の失踪せる狀態を敘述し描寫せんとして試に筆記し寫しける者を摘載せるにて、改て浮浪人問題と關係なきが如しと雖も、今輩の見る所を以てすれば、此の五月の生活者の中味噌職人を除けは、他は悉く浮浪人を以て目する者なり、而して妻を失へる春野の如きも、妻を失へるが爲に、今は電氣工夫の職を離

ち、再び馬丁に還りて、從事せんと計畫しつゝあり、馬丁となりし後の渠の消息よ果して如何なるべき。

而して△△▲▲の如きは、時代の風潮が作りし浮浪人の一種にして、余輩の最も同情する所、△△の如き僅に其の一例にして、明治二十年頃迄に起りし各種國事犯、及政治事件に連りて入獄せる當年の有志者にして、今日能く生活の定れるは、果して幾人ぞ、天下の非論を一と手に引受くると稱して、多額の收入ある人の如きは蓋し智惠者にして、其の多數は何等一定の職業を得る能はずして、其の運命を俗衆に翻弄せらつゝあり。

五

神田三崎町の水道橋に出でんとする曲り角に、雷燒を賣れる一漢子あり、（不景氣の年は、雷燒の賣行多しとの說あり、如何にか）余一日之を過ぎて、大驚を喫す、是れ余が郷里に近かきなにがし村の者にして、數年前迄は、保守の空氣充ち滿てる農業村落に在りて、卒先して羽二重業に着手し、縣下に於ても實業社會の先覺者を以て待たれたる成れの果にぞある。

蓋し旅行を好める讀書子は、農業を以て基礎とせる我國も、今や到る處の村落に工業起り、大に村落の風氣を改め居るを知るべし、余が郷里の村落の如き、未だ鐵道の音響だも聞こへざる草深き僻地なるにも拘らず、早くも這の大勢に動かされ、今より六七年前――日清戰役の景氣を受けて、平蕪の青々たる間に、機業工場起り、數年にして、僅に數百戸の村落より數十万圓の羽二重を産出するに至れり、當時余故郷に歸省し工業の起りたる新村落を見、甚だ之を奇とし、更に村民を卒ひて新工業を導きつゝある某々の行動に注意を置き、深く一種の興味を感じたり、而して當時最も余の注意を惹きたるは、此の甲某なりき、然るに二三年にして生糸相場の變動より、此の新造の氣に富める村落も、俄に破綻を示して、間もなく某々の工場は閉鎖するの止むを得ざるに至れり、甲某の如きも、其の一人なりしが、今爰に東京の十字街道に雷燒を賣りつゝあるをは、此日初めて之を知れるなり。然かも余は渠と言語を交へ、其の語りたるを聞きて、尙一層の驚愕を加へり、曰く

『雷燒も此の不景氣には駄目て御座います、今二三日で、商賣換しやうと思ひますが、何歟好い職業はありませんか

と、六七年振に會へる余に、曩日の氣位を捨て、見識を沒して身の上の相談せるなり、而して三四日を過ぎて再び此處を過ぎたるに、雷燒の屋臺は見へざりき。知らず、渠は今如何なる職業に身を變じつゝある乎。

渠は決して世の所謂冒險者流にあらず、唯、普通の村民より一頭地を拔ける者あるを以て農業より工業に轉じ、然かも之ありしが爲めに今は右の如き境遇に陷りたる者、余は渠に些少の過失なしと言はじ、併し乍ら其の墮落が農業より工業に移りし時勢の風潮に駈られたるもの多きを思ふて無限の感慨あり。

讀者諸君、社會の式部面に「煙り」と稱する言葉の行はれ居るを知れりや、其の服裝と言語とは堂々たる紳士に屬す、常に腕車を驅つて四方に奔走するを見れば、何等缺身に急件を帶べる者に似たり、而かも其の職業の如何は近隣は固より、友人と雖も、妻にと雖も、之を知らざるは奇とすべし、是れケブリと稱せられて局外者の覺知し得ざる消息を蘊める階級者と爲す。余輩は此の文章に何等の結末を告げずして、如上の階級者の生活のそれの如く中途に筆を擱くべし、知らずや、今日衣服を紳士せる社會に、此の局外者の覺知し得ざる浮浪者の多き事を。

戰爭と犯罪

高山血來

（一）

○犯罪と社會との關係は、常に多大の趣味を以つて研究さるゝものなり、特に戰爭と犯罪との關係は實に吾人が研究すべき最も趣味ある好題目ならざる可らず、例へば戰時に於ける犯罪の增減、及び其種類、戰爭が下民に與ふる感化力の如何、下民が戰爭によりて蒙るべき生計上の困難、及び戰後に於ける犯罪の增減と其種類、其原因等、之を一つ〳〵に就いて具體的に攻究するも、今日に於て最も趣味あり、また最も價値あるものゝ一也、教育家は勿論、宗教者はいふに及ばず、政治家經濟家の必ずや一度び逢着するは此問題なり。

○若しこれが精確なる統計を擧げ、更に細目に涉りて詳細に之を論ずるときは、優に一大冊子を作るを得べし、そは到底この限りあり紙面のよく盡くす處にあらず、吾人は先づこれが大體に就いて、聊か觀察せしものを記するに止めん。

（二）

○先づ第一に見るを要するは、開戰後に於ける犯罪の增減と其種類なり、今之を警視の統計に就いて見るに、昨年に比し、開戰前に比し、犯罪の數は各種を合して十分の二强を增加し居れり、平時にありて市內各署が擧ぐるところの犯罪數は、一署一日の平均約四件乃至五件に過ぎざりしもの、本年三月四月に入りては常に平均約五六件を出し、五月に至りては著しく增進して

七件乃至八件の平均を示せり、この驚くべき現象については幾分か他の原因なるものあるに相違なしと雖も、而もこれが十中の八九は凡て戰爭より來れる影響なりといはざる可らず。

○然らば其犯罪の種類は如何、其種類を區別したる上に於ては、何れに屬する犯罪が多くして、何れに屬するものが少きか、而して何れが甚しく增加して、何れか多く減退したるものありや、これ即ち戰爭と犯罪との關係を知る上に於て重大なる問題なり、曰く、

竊盜最も增加して、他は減退の傾ありと。

○いふまでもなく、竊盜にも數通りあり、或は壁を切つて忍び入るあり、戶を外づして入るあり、所謂明巢覗ひあり、金を目的とするもの、衣類に目を付くるもの。靴、下駄の類を盜むもの等、各々分業の狀態を以つてせり、而して今著しく增加し來れるところの竊盜は、これら幾種類ある中にて（若し泥棒にも上下をいふを得べくば）多くは下等の方に屬するものにて、即ち靴、下駄を盜み、或は店頭の小物品　吳服店に吊しある小布片を萬引するが如きの多きなり。

○これ等の原因は、全く戰爭に基因するものにして、決して他の影響によれるものにあらず、廿七八年日清戰爭の當時に於ては、此種の犯罪は頗る減少したりき、これ時勢の然らしめしにはあらず、否多少世の進步するにつれて犯罪は減少すべきもの也、現に平時にありては年々幾分かづゝ、犯罪數を減しつゝあるにあらずや、日清戰爭の時は、多く泥棒でも仕さうな奴、又は前科者等が人步として戰地に赴きたる爲め、內地には少數の無賴漢を殘せしに過ぎざりき、然るに日露戰爭は、苟も文明國と文明國との戰爭なれば、我國の體面に關するが如き事あらんを恐れ、無賴の徒、前科者は特に從軍を許されざりし也、即ちこれは日清戰爭時代より逆比例に犯罪を增したる所以ならんか。

○併しこは單に日清戰爭と今日とを比較せしに止まれり、其平時よりも竊盜犯の增加し行きつゝある現下の狀勢は果して何に因るか、勿論吾人は世間一般に叫ばれつゝある不景氣の聲、經費節減、勤儉貯蓄の結果といふに憚らず、何となれば、中流以上の者が節儉するに從つて、細民勞働者の生計はます〳〵困難を感じ來るは爭はれざる事實なれば也、見よ、建築工事の中止は大工、左官、土方、人足の收入を減じ、乞食門つけの物もらひは號外賣の爲めに人の同情を得る能はず、注目を惹く能はず、かくして平素に於てすら不足せる

彼等の經濟は最早や維持すべくもあらず、遂に惡心を起して背に腹は代へられずとなすに至る、單にこれのみにあらず、政府に於ける地方費の節減、諸事業諸工事の中止は殆んど勞働者の糧食を奪ひ、棉花の騰貴外國貿易の不振は各工場の職工をして路頭に迷はしむるに至り、其數全國を擧げて幾計なるを知るべからず、且つ地方の不景氣につれて、何等の目的もなく、何等の考をも有せず、只大なる東京にして職業のなき事はといふ果敢なき賴に驅られて、ブラリ〱と集り來り、案外にも己れが爲すべきは只泥棒の一職業あるのみなるを知りしものも亦數ふ可らず、而して一方にはこれ等の者を救ひ導くべき機關設備の一もあるなし、犯罪の日を追つて增加するは當に自然の數、まことに止むを得ざる也。

○而して警察の力は如何に、かれは平時に於て漸く八分の力を有するに過ぎず、此八分の力は戰時にある十二分の社會に用ゐられつゝある也、八を以つて十に當る、既に其不可を知る、况んや十二のものに於てをや、彼の祝提行列の如き、平時に於て嘗てなきところ、警察が力を此方面に注ぐに當つて、勢ひ他の一部に缺所を生ずるは、小なる新聞紙を以つて大なる机を包むと擇ぶところなき也。

○且つや警察の基礎をなし、其作用を爲す處のものは最下級の巡査にあらずや、其巡査は薄き俸給の上に重き職責を負せられ、之れに加ふるに法律訓令、上官の指揮命令を二重三重に行はざる可らず、彼等は千手觀音にあらず、其餘りに多き任務は、凡ての事に就いての注意力を鈍ましむ、彼等の一上官は吾人に語つて曰く、巡査は藁人形也、機械的に上官の命令によつて動く外自ら動くの能力なきものなりと、然り藁人形ならざれば到底續くべき仕事にあらざる也、即ち警察活動の元動力が藁人影なりとすれば、いかでか此戰時に於ける十二分の犯罪に對する取締を望むべけん、經費節減は必要の出費にて掣肘を加ふる事かくの如し、

○吾人はかくして罪人の增加し行くを傍觀せざるを得ざる乎、經費節減もよし、勤儉貯蓄も可也、而も他方に於てより大なる不利益なる結果を生みつゝある前述の現象は、吾人に大なる訓誡を與ふるものにあらざるか。

（三）

○然れども此の如き害禍の流るゝに當り、一方に於てまた喜ぶべき現象なきにあらず、そは泥棒以外の犯罪

が反比例をなして減少しつゝありといふ事これ也、謀故殺、刃傷、喧嘩、及び酒の上に起る犯罪が、戰爭によりて減少せりといふは頗る注意すべき價値あるものなり、普通の例を以つてすれば、戰爭の聲は國民をして殺氣を帶ばしめ、一般人心をして荒々しくせしむべき筈なり、從つて殺傷、喧嘩等の絶間なきは自然の理ならざるべからず、然るに不思議にも此種の犯罪は著しく減退せりといふにあらずや。

○これに就きて吾人は戰爭が與ふる愚民の感化なるものを思はざるを得ず、彼等が愛國心の盛んなるを認めざるを得ず、少くとも時勢の進歩を認めざるを得ざる也。今年の櫻花が例年の如く花下亂醉の客を出さず、極めて靜肅に見られたりといふ事實は、如何に彼等が戰爭の感化を蒙りたるやを示す好例證にあらずや、彼等の顏には明かに大國民の看板の打たれたりしを見き、戰勝者てふ字も深く刻まれたりしを見き、吾人をしてそゞろ朝日に匂ふ山櫻の優しきを思ばしめき、あゝベヲンメイの向ふ鉢卷は戰爭といへる偉大なる勢力の爲めに從順なる市民となれり。

○彼等は其晩酌の勢に乘じて仲間の頭上に舞ふべき鐵拳を露國の上に加へんとを思へり、少くとも彼等は戰爭の捷報を聞くより嬉しきものなく、敗報を耳にするより口惜しき事なき也、これ等の點はたしかに殺傷に關する犯罪を少からしむる原因の一ならざる可らず、而して他國に於て見るを得ざる現象なりとす。

○こゝに於て吾人は日露戰爭が齎せる反對せる二個の事實を見る、一は物質上より來る處の害禍、即ち罪人の増加にして、他は精神上より來るところの利福、即ち罪人の減少なり。罪人の増加と減少、一見矛盾の觀あるも、畢竟其立場境遇の如何より來るものにして増加は増加、減少は減少なり、吾人は今此利害の大小を比較するの要なし、そは戰爭の性質に亘るものにして、吾人の論ずることころと自ら問題を異にすれば也、吾人は戰爭の既に開かれたる今日にありてはこれが善果を得るの方法を講ぜざる可らず、否これとても今吾人の云はんとする處のものにあらず、吾人は單に戰時に於ける犯罪の狀況はかくの如きものなることを世人に示し、世人が反省の料に供すれば足れり、然れども一言附記したきは、戰爭すれば必ず金を要す、金の要るは覺悟の前也、戰後は經濟の困難に陷るもの、それも覺悟の前也、これらの多く憂ふるに足らざるは日清戰爭の經驗に見るまでもなく、各國の歷史に徵して明か

也、外債の募集、これが償還また最も易き事に屬す、只吾人の恐るゝものは極端なる節儉と極端なる節減が凡ての事業を減少せしめ、却つて國家の發達を妨ぐるにあり、徒らに消極的方針をとりて癒やし得べき經濟よりも癒し得べからざる禍害を貽さんことこれのみ。

（四）

○終りに吾人の想像せんとするは、戰後に於ける犯罪の發生なり、吾人は廿七八年の役後、如何なる犯罪が多く行はれたりしかを記憶す、當時謀殺故殺の多く行はれしを思ひ、之を日露の戰後に於て再び繰り返すなきやを懸念す、社會が十年後の今日、多大の進歩を爲せしは疑ふべからずとするも、尙ほ其道義の如何程までに高まりしやを知らず、却つて此點に於ては寧ろ退却しつゝあるにあらずやを思はしむ、日清戰爭後、何故に彼れの如き犯罪が多かりしや、或者はいへり、軍人の氣風が海外に於て敵を屠りし結果、大膽になり、殺風景になり、人を殺し傷くる如きはさして大事と思はざるに至りしと、これが及ぼせる感化が延いて一般下等社會に及びしものなりと、然り是等は最も重大なる關係ありし也、然れども尙一層深く研究せば、道義地に墜ち、背德汚行盛んに行はれしが爲めにあらざるなきを知らんや、夫が遠征の途に上りたる留守中、其妻は果して悉く貞節を守りたりしか、彼等の多くは其夫が凱旋を迎ふるに潔白なる身を以つてし、其勞を慰むる程の賢女にあらざりし也。これ恐るべき犯罪の起るべき有力なる原因なり、かゝる原因あるが上に、加ふるに其殺氣滿々たる、未だ血痕の乾かざる腕を以つてす、而して幸ひに生きて故國の土を踏みし命ひろひの彼等は自然暴飲を以つて身を崩せり、而して其結果は更らに人の妻を犯し、人の娘を傷くるの弊を生ずるに至れり、かくして至る處謀殺、故殺及傷悲劇を見たり、これ日清戰爭後の社會狀態にあらずや。

○吾人は日露戰爭終局の時に於て、再び此の如き犯罪の續出せざるべきを保する能はず、今日此種の犯罪が減少したりといふを以つて容易に將來を卜すべきにあらず、吾人は戰後發生すべき犯罪に就いて最も警戒を加へざる可らざる也。

* * * * * * *

ぼうふりや蚊になるまでの浮沈み　　祇　亟

雜評



鬼面魔語

醉美生

▲我が思ふ人の前に出でんとするときは必らず醜き人と一所に行くべし、然らざれば一人がよし、ゆめ〳〵美しき人を伴ふべからず。

▲美しき人は浮氣にて、醜き人は嫉妬深し。

▲青年時代は人生の最も活氣ある時にして、學ぶも此時進み早く、遊ぶも此際味深し。かゝるが故に此時學ばざれば後に必らず悔あるべく、此時遊ばざるも亦恐らく殘り多かるべし。此兩刀を使ひ分けて、而かも身を誤らざるものは眞に達人なり。

▲寡慾なれば安心あれども進歩なく、多慾なれば進歩あれども安心なし。

▲街にて物賣る人は始めに足らはぬと思ふ程に掛け、之に幾許かを加へて渡すがよし。先きに多き程入れ、之より取り去りて賣るはいたく客の氣を損ずるものぞ。

▲化粧品、洒落物など、凡て客の入り難き物品を商ふ店には成るべく物のわからぬ少男少女を置くべきものぞ。

▲相面して褒む、媚び諂ふに似たり、寧ろ其知人に向て其美を賞し、以て間接に其人に傳はるが如くすべし。相對して罵る。禮を知らざるに似たり、宜しく第三者の彼に似たるを觀て以て之を諷すべし。

▲醜き人、才なきものなど總て人より劣れるものゝ唯一の鎭痛劑は自惚なり

▲近來の流行はポンチと川柳。

▲美しき女の群衆の前に出づるや必らず高くトマリテあたりを振り向くことなし、是れ已れ振れ向かずとも群衆の注目皆已れに集まりたることを自覺すればなり。

▲悲しみの後の樂み、樂みの後の悲み程強くはげしきものなしとは古へよりいひ來れることなり。樂天家の眼より見ればあらゆる悲しみは、たゞ其後に來る樂しみを強くせんためにして、厭世家の眼より見れば、あらゆる樂みはたゞ其次ぎに起る悲みを激しからしめんが爲めとのみ思はるゝものぞ。

▲事を行ふに快樂を願しとせずして善徳を目的とするは、食物を選むに旨味を後にして滋養を先にするが如し。

▲我身程不幸なるものはなしと思ひつゝも、何となく他人と代へ難き或物を有するが如く考へらるゝは人間の最も面白き所ぞ。

▲鐘を鳴らさゞる號外賣程商機を知らざるものなし、一つを腋に、一つを手に、二つの鐘にて町中の眠を攪まさんず勢にて驅け廻らば、其賣高の多きこと請合なり。

▲韓非子とは多くの人が思ふ如く、理屈一遍、議論一方の人にあらず、なか〳〵人情の弱點に通じ且つ、之を利用するとを知れるエラキ人物なり。

▲こゝに絶世の作人あり、髮白く皺深き老翁老婆まで、一目見てうちほゝえまれぬべき顏形のしたれば、若き男はいはずもがな、十年連添うて三人の子供まで生せし男も家を捨てゝ迷ひ步き、之が爲めに學を廢し、業を顧みぬもの幾百といふ數を知らず、之を見たるあらゆる男は皆其色

に迷ひ、あらゆる女は皆其美を妬むが如きものありとせよ。是れまさしく人間の夢想する美の極致にして、又世界が産出する毒の最大なるものなるべし。あゝこの佳人をいかにかすべき。是れぞ美と實際との衝突問題なる。

▲齋藤緑雨の文は京女の如く、文にあらはれたる齋藤緑雨は執拗(しねもの)者なり。

▲人の考は十人十色、百人百色なり。これが爲めに大いなる衝突あり、何處にも喧嘩爭論などの絶えぬ所以、されど亦之が爲めに大いなる調和あり。亭主自慢嚊(かゝ)々自慢などの絶えぬ所以。

▲世に涙程眞面目なるものなし、涙を以て生れ、涙を以て死するは今更らしいはずもあれ、深き悲しみ、强き樂しみ、天地の莊嚴、人間の果敢なさなどの胸をうちて、本來の眞面目に立ち返りし時は、必らず涙落つるものぞ。但し狐や猫の製造する空涙の出所は未だ研究せず。

▲蠑螈の黒燒ありて鴛鴦の黒燒なきはいぶかし。

▲十人に評せられて十人より各異なりたる評を受くる如き人は必らず常人より大なるものぞ。

▲上野動物園の獅子と虎とを格鬪せしめなば興行人は立所に數千の利益を得べく、又之によりて數千の賭物する人少からざるべし。

▲近來渡米するものゝ多き驚くに堪へたり。國力膨脹の致す所自然の勢にして又尤も慶賀すべきことなりと雖も、其行爲にして當を得ずんば或は日本人排斥の聲起らんことを恐る。

▲雨降るに先ちて晴雨計の昇降するが如く、他人の何とも感ぜぬ時にありて堪ふべからざる壓抑を感ずる程の人にあらずんば、來るべき新時代の思想感情を發表し、又は歌ひ出づることを得ず。

▲我國歴史上の人物に悲壯劇の主人公(ヒーロー)に適するものなきは、佛教入り込みてナマ悟りのもの多きによる。

▲眠れる人の笑ほど凄くゾットするものなく、悲しみに沈める人の笑ほど淋しく哀れ深きはなしといへるに、傍らに座せる友の初嫁の涙程可愛きものなきと好一對なりといへる可笑しかりし。

▲最も健康の大事なるを悟るは身體の惡しき時、最も金錢の必要を感ずるは懐中の寒き時に限る。われこれを以て疑ふ、古より傳はりし主義學說の如き、多くは其人の理想にして其人本來の性格は却て其所說と反對の傾向を示せしもの多きにあらざるかを。無我を說きし釋迦は元來非常なる多慾の人にして、逍遙遊を談ぜし莊子は性來最も神經質の人なりしならん。

▲母の乳房を含みて泣聲を止めし咳兒が、紙鳶や獨樂にて笑顔を作る腕白となり、やれ女よ酒よと迷ふ青年に變じ、錢よ名譽とやかましき紳士と化し、後生よ孫よとつぶやく老翁となる。面白しとて笑はんか、悲しといふて哭せんか。

▲大隈伯の盛んにフキツケルべき時は今なるぞとはある政治家の言。

▲日の本昇太夫なるものあり、日露戰爭を材として義太夫を語り居るが如し、其文句を見るに皆在來の口調を模してチヤリ的ならざるはなし、心細きかな軍國の藝術。

新柳樽

呑吐坊

ロハ臺で式部隣をチョイト眺め

モデルにと豫期した妻を書伯取り
號外や逃け出すやうに賣ると驅け
貸といて鬼とは一寸合はぬやつ
メリヤスのあひに棧敷をじろ〳〵し
序幕から露兵七度び生かはり
十二階脚下の時計ボーン〳〵
せがまれて乳母も木馬に一寸乗り
號外や只大勝利ばかり知り
此頃は提灯屋丈ニコリ〳〵
提灯行列出ると女房は切火打

三日坊

施主に立つ昨夜の怪我の輕いやつ
提灯を持つた仲間が施主に立ち
桝形を壊はせと飛んだとばッ汁
提灯の無事天祐様と母はいひ
高利貸かばんを腕へ直ぐ通し
高利貸不在ときいて便所借り
高利貸何所へと聞けばマア運動
人間と云はれたくない高利貸
弔は道惡へ來て列がわれ
葬式に看護だけは車なり

鉢巻に國旗をたてる號外や
號外や一丁行くと帯をしめ
號外や聲ほどでない足はこび

啞蟬坊

卒業の間近い式部落付かず
社會主義居酒屋斗あるいてゐ
輿入の半年過ぎぬに産婆が來
式部の裁縫波動形斗出來

外人某

こりや溜らぬとベソブラベそをかき

呼子鳥

新版の地圖旅順湖と訂正し

京女

藻の中でアラよくッてよと蝦はすね
同志撃をロスケ演習さと澄まし

湖村

戰誌發行其命名に困ッてゐ
園丁に鷲は虐待鷹はもて

久良岐

旅順では探海燈行列負ずにし
白張の提灯行列あはれなり

初袷捕虜氣の利かぬ腕組し
普闘店こいつどうだと咽喉をしめ
商戰の下手が露國の付目なり
實業のふんどしジタイ緩いなり
戰勝に醉ふなと天のお告げなり
抜目ない香具師早速鷲を飼ひ
ヘボ軍歌斬れ〳〵と何を斬る
物共速けと捨鞭て鳴いそぎ
ある確なる筋とは知らずどんな筋
軍事郵便〇〇〇を〇〇仕り候
千早城以來貢禍はまだ聞かず
川柳とのみ其さま知らぬなるべし
川柳てなし俳句てなしの廿五字
社會主義ソレからトルストイの名を云はず
虐待防止會馬道の爲めに非戰論

女學校に於ける男教師の自白

靜一
動次 共稿

一、

もう三年になるが、女學校に於ける、僕の生活も、隨分復雜だつたよ。

そうだねー、隨分御互に、面白いこともあつたが、むつましく苦労したことも、決して少なくはないね。

僕が初めて、女子教育に、關係したとき、斯道には、多少經驗のあつた、〇〇君などからも、獨身の教師は、中々危險なものだから、注意しないと、隨分臍を噛むことがあると、忠告されたが、幸ひにそんな、恐ろしい目には、逢はなかつたけれど、……併し今になつて見ると大に思ひ當る節がないでもないよ。

いや御互に、こーやつて獨身で居る内は、自分てこそ、八面玲瓏、天地に俯仰して、何等疚しい所はないけれど、疑はれてみれば、疑はるべき餘地があるのだから、避けらるべき誤解は、大に之れを避けて行かなきやならぬ……それはそーと一昨々年の新聞事件なんぞは、君にとつては隨分苛酷の打擊だつたねー。あのときやあ單り僕斗りぢやあない、同人間ても君を知るものは、何れも君の爲めに憤慨して、寄るとさわると話しがそこに集まつたつけ。

いや、あの時のことを考へると 實に馬鹿々々しいやうだが、實は、あの時ほど不愉快な、ことはなかつたよ、だが世間の教師などゝ、云はれる人の中にも、案外理想の低い、野鄙な奴もあつて、其性行は、彼等新聞記者が、揣摩する、記事以上の醜行を、敢てして居るのもあるのだから、つまりそれ等のものゝ同類を以て目されたのが、不運の極と、諦めるよりしかたがないさ、けれど、依然信用を持續して居てくれた、君等もあつたが、當時に於ける、僕の信用の半は以上は、慥にあの御陰で葬られて居つたよ。

いや實に、當時の事を想ふと、衷心同情に堪へんが、あの自由主義の、

權化とも云はれて、君を信用して居た、〇〇君さへ…今だから話すんだがね…口を極めて、非難して、なか／＼僕等の辨解には、耳も假さなかつたのだからなあ…。

いやそれだて、隱れて話したとなり、〇〇君は、同じ先輩でも、よく事理を解する人物でもあり、且つ僕の精神を、悉知して與れる人を窃かに欣慕して居つたのさ。だからあの際の如き、多數の友人や親戚は、如何に離反しやうと、君や〇〇君の如き、知己からは、慰藉を受けることゝ、心窃かに期待して、居つた。所が君はあの通り、望外の慰藉と同情とを、寄せて與れたが、あの〇〇君の非難には、實に意外、いや寧ろ絕望であつた。實は直接にも、色々皮肉な、質問を受けて、大に腹が立つたから、いつそ絕交しやうとまで、思つたけれど、それでは穩かでなし、且ツ僕か平素の主義にも悖るから、とーと忍んで、打たれて居たのさ…人世賴みがたいは、人の心だよ…併し雨降つて、地固まると云ふべきか、今日になりやあもーその誤解も解けて、僕の性格も、明瞭になつたらしいから、愛が所謂基督の、右頰を打たれたら左頰をだせと云ふ、教訓に眞理のあることを認むべき點と思つて、いまでは、返て自己に克ち得たを、喜て居る譯さ。

そうだつたろふな…間接の僕てさへ、彼から苦惱に打たれて、煩悶したのだから、君が當時の懊惱は察するに餘りあるよ。けれど之れも人世の經驗てあつて、それが爲めに修養さるゝ所の多かつたのを思へば、遺憾は返て感謝となるべきだが少壯獨身の教師に免れぬ事と想ふと、女子の教育も中々考へ物されね…

いや實に其の通り、僕はつく／＼感じて居る次第だから、こゝに一つ過去三年の經驗を自白し威つて見たいと思ふ。て先づ塊まら初めるが、隨分面白い事もあるよ、まあ聞き給へ。ては先づうかがう。（以下次號）

思ひつき　一二三

▲此の間兩國の興兵衞すしを食べに行つた、あの露路を出る筋向の角の家を半分ほど仕切て薄暗い所に高座を構へて盛に扇子をパチつかせて講釋をして居るのがある。四邊（あたり）の立ん坊だの。仕事しだの。往還の者だの立止つて聞いて居る、これは何うしても德川時代…平賀源内時代に見た風流志道軒の末流だ、兩國…太平記講釋讀みの後孫電車に乘つて此の邊に行けば大江戸の昔が忍ばれる。

▲此の雜誌が出る時分には既に旅順口の落ちて居るかも知らぬ、軍艦て海岸線を封鎖せられ、後背より大崩れに攻寄せらるゝ具合は誠に氣味がよい、アレキシイフが此處に居たならば吾々はさぞかし樂みてあつたらうに。

▲此の間の金州城の陷落戰爭を號外て見るにつけ、吾が軍が數回の突擊を試み、累々たる伏屍を蹈んで敵に肉薄する有樣は何うしても熊谷直實、平山季重、平知盛などゝいふ趣がある。日本人の戰は關になると昔に返るやうてある。



美術評論

●新圖案會

川上　三槐

○「裝飾の圖案てふこと、世には專門をもて自ふ人少からず、けにひとわたりに考ふれば、圖案とて一種專門の技のあらざる可からざるが如し、されど熟々おもひ見るに、もし未だ建築の大様をしも知らで第宅堂房の意匠をくだし、居室文飾の旨をも辨へて家具什器の按排をいたさんとするものあらばそは所謂魚をもとめて樹による人のごとく到底そのよろしきを得るによしなからん」とこれ新圖案主旨の第一にいふところなり。

○然り、今の圖案專門家はまことにこれなるのみ、

○圖案なる一科がしむる範圍は頗る廣くして建築彫塑繪畫の諸科にまたがる、圖案なる單個のもの丶かくも多くを包括する以上、圖案を研究せむとするもの丶覺悟はこれと比例していよ／＼大いならざるべからざるなり、

○然れども人一個の能力はかぎりあり、この諸科をきはめむは人の力のよくなすべきにあらず、よしなし得るとするも、そは他のたゞに一科をのみ究むにものに比して深きこと能はざるなり、

○圖案はしかく深刻に諸科の研究を要とするものにあらざるべし、然り、圖案專門家は建築家彫塑家畫家の專攻せるほど多く且つ深くを究むるの要なしといへ、諸科の調和は均一の進步を基礎とせざるべからず、

○新圖案會成る、洋畫家あり建築家あり日本畫家あり彫塑家あり、識るに法を得、混ゆるに當を得んか、恐らくは應用圖案の精を得んなり。

○新圖案會は研究の團躰なり、新古兩樣式と和洋兩風格とすべてこれを究めて新躰をいださんとす、これ現

時世にときめき給ふヌエ圖案先生に與ふる痛棒なるべし、

○規に曰く、

△新圖案會はひろく世の装飾圖案の需に應ぜんとす

△新圖案會が考案に應ずべきものは大は建築物紀念像より小は釦子鈕鐶または書册の装綴にいたるまで即ち一切の種類における装飾意匠を要すべきものなり

△依賴者にして會員中某一人を擇びて考案せしめんとすること、もとより隨意なり

△事務所は當分のうち本郷彌生町三新海竹太郎方におく

兎角に望多き團体の生ひいでしことよ、吾人は新圖案會の前途に向つて多大の囑望をなすものなり、

○會員の氏名をこゝに錄す、

岡田三郎助　塚本　靖　大澤三之助
久保田米齊　結城素明　新海竹太郎
平子　鐸嶺

皆好望を有する青年諸家也、その研究の結果の如何なるべきか、幸にして江湖注視の集るところたれ。

◎太平洋畫會

五月一日より六月六日まで太平洋畫會展覽會は上野公園五號館中部に開會さるべし、

わが洋畫界の趨勢を知るものは容易に白馬會と太平洋畫會との二者ありて各相對し各相究めつゝあるを知るべし前者は東京美術學校洋畫科の殆んどすべてを化し去りて實に畫界の第一位に居り、後者は小山正太郎氏及び淺井忠氏門下の有志によりて頃者漸くその勢を増し來れりと雖もなほ白馬會に比して一歩を讓らざるべからざるが如し、

互いに相對して新派といひ舊派と稱したりし時代は漸く過ぎて今は互いに美術なる根本に立ちて相研鑽することゝはなれり、白馬會必ずしも新派ならず太平洋畫會必ずしも舊派ならず、勿論そこには多少相依るところあるべしと雖も、畢竟するに區々たるものゝみ、其大本に至つては即ち全く相等しきが如し、

太平洋畫會今次の展覽會は前回に比して、その數に於てのみならず、實量に於ても非常なる進歩をなしたるものゝ如し、

作の個々に就てはこゝに云ふこと能はずと雖も滿谷國

四郎木村梁一郎石井滿吉山本鼎藤島英二の諸氏が進步は實に著しきものにして、石井氏の小憩、街頭、山本氏の夏、滿谷氏の軍人の妻？藏島氏の氷川の寫生木村氏の兩大師等見るべきなり、

油水彩の外新海竹太郎氏の塑像數個あり、賄賂と題するもの稱に見る大作也、秤の折れるを持ちて立てる男、その顏面のすさまじく猛さ、その足に一二の書冊をふみだしける大いに見るべきもの也、たゞ一般の賄賂を意味するにあらずして教科書事件を附加せしかの如くふめる書冊の表題に教科書と記せる如き小なりと雖も蛇足の感なき能はざる也、

吾人はさらに同會を見、さらに次號に於て細評するところあるべし雖も、特にこゝに記さゞるべからざる一事あり、何ぞや、大阪の富豪住友家が特にその什物なる歐米の名畫數點を出陳せむとするにあり、由來富豪なるものゝ黃金なる勢力によりて盛んに藝苑の製作を買收しつゝ堅くこれを秘めて決して他に示さず、ひそかにその所有するところを誇るの風あるは、これ明かに藝苑の神聖を犯して彼等の專橫をほしいまゝにするものにして、その罪大いにとがむべき也、かの大倉某が集め得たるところの美術館あり、戶を閉すこと甚だ嚴ならずと雖もなほ平民の見るを許さず、今住友家のこの擧ある、吾人敢てこれを美擧といふをはゞからざる也、恐らくは藝苑を益する少々にあらざるべし。特に記して大阪富豪の美擧を賛し、また他の富豪のこれにならはむことを切望す。

短文

●風呂

▲一日の旅を終つてから風呂に入る程心持のよいことはない。（旅行者）

▲風呂屋では人間の裸躰ばかりでなく、社會の裸躰も見る者のた。

▲田舍の風呂屋程世間咄し、浮世話の出る所はない。僕は小說家になれば、宙外の樣に田園生活など、迂濶なことをやめて、田舍風呂屋の亭主となる積だ。（以上二件社會學々生）

▲僕は三馬の浮世風呂を君にすゝめる。（小說回顧生）

●余は風呂の文字風呂なる言葉を見聞する每に其肉躰と欲望との關係上常に一種の觀念を呼び起され而も其內外の觀察點を異にせるに依りて益々之を感ぜり。

抑も彼は裸躰問題に對して甚だ寬大にして文字は勿論繪畫彫刻に至る迄其趣味あり審美なる故を以て賞賛し虛心平氣に之を歡迎して憚る所なく常に之が發達を計れりと雖後者は全く之に反して小心翼々毫も斟酌することなく嚴格なる制裁の元に絕へず束縛し一足手を誤れば嚴禁せられ甚

しきに至りては繪畫に幕を張れるが如き滑稽を演ずるさへ稀ならざるなり。然らば前者は裸體其者を冷視して顧ることなく衆人に向て暴露するを意とせざるか後者は最も之を尊重して其露出を無上の恥となすか實に是れ當然の理法の如くにして事實上全く相顚倒せるには一驚せざるを得ざるなり。

此現象の一端は風呂に於て窺ふを得べし例如何なる人と云雖其肉體の赤裸々を免かるゝ能はざる場合に於ても前者は最も其公衆に視上らるゝを忌み男女の區別は勿論相互間に於ても非常なる制禦の元に之をさけ甚しきは根本的に建築上浴場を區別して個々入浴せしめ衣服の着脫中と云雖注意怠らざるのみならず入浴中は錠に依りて之を締ると聞く其如何に嚴重なるかは後者の如く單に男女の區別あるのみにして毫も相互の隔なく肉體の露出の如きは未だし其儘にして相談するが如き而も女にして三助に洗浴せしむるも尙平然たる現場より見るときは實に豫想外たるなり。

如斯前後の狀態の相矛盾せるは抑も何れに起因せるか情慾の優劣是れなり。

彼は眞の愛情を悟れり故に其裸體に關しては只理想的美の範圍内に於ては縱橫に此が研究に務むれども一旦情慾と相俟つ場合に於ては愼み深くして自己の肉體として貴重すると仝時に外部に向て觸るゝを最も恥辱となせるが故なり。

後者は之に反して眞情に及ばざる前に於て早くも劣なる情慾の襲ふ處となり常に其外界の刺激に對しては之を審美として觀るべき餘地を有せずして惡誘せらるゝ傾あるも自力に依りて抑壓するの勇氣に乏しく自然の間に沈むの虞あれば遂に强手段に依りて外界の誘物を制限し其甚しきに至りては又滑稽も免れざるなり。

故にとかく情慾に關しては嚴重なる制裁を加ふるも其相互の間の單に肉體上の關係に於ては毫も其不都合を感ずる事なく不識の内に之を輕視して顧るとなく平然たるも又一理たるべし。

要するに所謂入釜數裸體問題と其風呂に於ける現象との懸隔は單に慾望の觀察如何に依りて其解决を異にせるなり。　（樂　人）

課題

▲看護婦　（六月十八日）

▲納涼　（七月十八日）

新刊批評

▲シーセアスとロミユラス　森晋太郎譯　尙友舘發行

「英雄の牧場」と稱せられて、凡そ千八百年の昔より多くの偉人傑士を養育せし傳記界の大王、プルタークの英雄傳は、森晋太郎氏の手によりて譯せられんとし、今や其一卷としてシーセアスとロミユラスの發行を見るに至れり。獨力かゝる大著を譯して以て國民の寶庫を豐かにせんとするの勇氣先づ以て甚だ多とすべきなり。

此卷は半ば神話的、傳記的のものなるを以て、偏へに事實の眞相をのみ尋ねんとする讀者にとりては、或は後篇の英雄に比して些か物足らぬ感あるやも知るべからずと雖も、少しく詩情を有し想像力の裕かなる讀者

にとりては神話的、傳記的の部分多き丈け夫れ丈け多くの興味を覺ゆる節少なからず、譯文又概して穩健、直譯又は晦澁の弊なきは多とすべし、たゞ原書が甚しき名文なれば今少し面白き文章ならましかばとの望なき能はず。口繪に挾まれし「ローマ人とサバイン族との戰」の記事など最も人情世態の曲折を畫きて妙味嚙み盡し難きを覺ゆ。全部廿五冊、毎月一冊づゝ發行すべしといふ、願はくは筆を中途にして絕つことなく、二年の後めでたく完結を見んことを。　（定價三十五錢）

▲指輪の魔力　世界お伽噺第五十九編

岩谷小波編
博文館發行

マルチンと名つくる小童買物に遣はされし百圓の金を以て瀕死の犬と猫、とを助け、家を追はれて四方に流寓し、或は食客となり、或は寃屈に入り、終に不思議なる指輪を得て王宮の女婿となりしも、指輪を失ひて困阨に陷りしが、初めに助けたる犬猫の策によりて指輪を得、再び榮えたりといふ目出たき物語なり。露西亞のお伽噺を小波氏が例の輕妙なる筆にて書きたるもの、取り立てゝ面白き所もなけれど、又無難の作なり。桐谷洗鱗といふ人の畫、表紙の意匠なか〳〵巧みに、中の畫も余程才氣あり。　（定價八錢）

▲帝國文學臨時增刊第一

圖書株式會社發行

懸賞小說三篇、海賀變哲氏の「心づくし」、新井靈泉氏の「星の世の戀」、吉田狭洲氏の「薄命」、及び嘗て帝國文學會に於て開きたる、三宅、大村佐々木三氏の講演を載せ、雜報には懸賞小說に對する選者の意見並に編輯人の批評等を附し、殆んど二百八十頁の大冊なり。

赤門の銘を打て、高く標致する帝國文學が賞を懸けて廣く江湖の秀才を募りしは、我國文運の全躰より見て誠に慶賀すべきことにして其結果の善良ならんことは吾輩の密かに祈りし所なりしも、あけて悔しき玉手箱各篇傑作と稱すべき程のものなく、皆第二流三流の作物より得ざりしは口惜しき限りなり。各篇に對する詳評はくだ〳〵しければいはず、變哲氏の「心づくし」懸賞に妙を得たる人丈け流石に面白き所あり、たゞ所々文脈の正しからざる所あるは惜しむべし

「頭の上まで覆ひ冠さる稻と稻との間の細い畦道を、行戾り〳〵して捕り溜めた蝗の袋を、耳の傍へ持つて來て、一と振り振つて見ると中ではカサ〳〵パチ〳〵と、羽の擦れる音や跗る音、恰で大地震がゆつたやう、蝗は驚いてる事だらふ、」（二頁）

○を附したる所はなか〳〵詩的の敍述なれども△の附したる句までは上の文に附きたる如く誤らるゝ書き振り、感服せず。些細のことなれども注意せざれば完璧をなす　はざるべし。

要するに各篇傑作のなき代り、又甚しき惡作もなく、一讀して多小の興味を感じ得べきものゝみなれば、二十五錢の定價は決して高からずといふべし。

▲時代思想第四號

時代思潮社發行

一號毎に其面目を改めて將來最も有望なるは此雜誌なり。殊に本號には晩翠氏の新躰詩數篇を收め、チセリ筆「悲壯の平和」を挾みたれば前三號に比して一段の光彩を放つたるが如く思はる。　（定價二十錢）

▲デカルト

文學博士　桑木嚴翼氏著
富山房發兌
（定價七拾錢）

富山房の『世界哲學文庫』の第壹編なり。同書肆が斯く學問界の眞事業に貢献するの企てあるは勿論喜ぶべきことゝして、吾人は先づ第一編の著者に其の人を得たるを喜ばずんばあらず、眞に哲學史上の人物と其の學說とを註解して今人に示さんとせば固より學識豐富なる人に待たざるべからざれども、純理哲學の智識は直に之れを讀む人の思想見識に歷々たる所得を與ふるに限られば、其の純理哲學を註解する著者の見識思想の態度を味はんはなかなかに有益なるべきなり。

▲露西亞闇黑史

澁江保著
文明堂發行
（細評次號）

「露國累代の帝王、皇后、皇子、皇女等が多淫多慾」より起りし醜聲、慘劇、及び官吏の腐敗、人民の懶惰等の事情を採りて記述したる册子、時節柄最も世人の好奇心を促すべきものなりと雖も、記事餘りに粗雜にして、眞面目なる讀者の豫想を滿たすこと少きは惜しみても餘りありといふべし。かゝるものは今少しく精確に、今少し擊實に書かれたらば大に世を益する所少からざるべしと思はる。敢て苦言を呈して著者の一考を望む。

（定價四十五錢）

▲忠勇義烈戰時讀本

谷本富撰述
目黑書店發兌

桃色に縱橫の飛白、背に金文字入のグット滋き總クロース仕立、讀本の名に相應しからぬ程、凝つたものなり。本篇すべて、百八十二則悉く夫の世界文學の一として有名なる『パーシー說話集』中、男烈篇の大部を翻譯せられたるものなれば、全則忠勇義烈の事蹟のみにて一讀懦夫をして立たしむべし。

▲基督敎の眞髓

和田琳熊譯述
眞理社發行
（定價八十五錢）

別に敎育敕語、軍人敕諭等を始めとし、日露開戰の趣旨を了解し、且つ戰時の心得と爲すに足るべき、彼我の詔敕乃至近頃政府が殊に發布せる訓令の類をも、蒐集して前加篇とし、更に撰述者の意見を明にすべく、近稿數篇も附錄とせられたれば時節柄の好讀本なり

四六二倍、三百頁の譯本なり、原著は彼の有名なる獨逸伯林大學敎授ハルナック博士の數多の學者學生の爲めに講演せられたるものにして、宗敎家殊に基督敎硏究者の必讀すべき良書なり

（定價五十五錢）

▲エピクテスタスの敎訓

稻葉昌丸譯
浩戶洞發行

浩戶洞諸君の淸澤師一周忌報恩紀念として、師の題して『西洋第一書』と曰はれたる此書を師の親友たりし稻葉昌丸師に囑し、譯して道友に頒たれたるものなり

（上廿七錢、並二十錢）

戰事彙報

第四

戰事彙報

●鴨綠江畔の戰報

（其一）

四月二十六日以來鴨綠江義州附近に於ける我軍の動作に關し黑木大將より大本營に達したる報告左の如し（陸軍省）

（四月二十七日午後五時二十分發
同月同日午後十一時五十分着）

架橋準備を爲すの必要上軍は廿六日朝威力を以て即ち近衞師團の一部を以て九里島の敵を擊退して之を占領し第二師團の一部を以て黔定島を占領せり敵は悉く九連城方面に敗退せり此戰鬪に依り我死傷者近衞師團戰死（一字不明）重傷九輕傷十六名第二師團死傷無し又敵は少なからざる死傷者を運搬し去を見たり但し我衞生隊に收容したる敵の重傷者（乘馬斥候兵）一は東部西比利亞狙擊步兵第二十二聯隊の者にして同人の言に依れば同第二十三第二十四聯隊も亦前面に在り其長官は少將ツルメフにして各聯隊は二大隊より成り乘馬斥候兵百四十二を有す敵は九連城後方高地に在る砲兵八門（九珊半）を以て西湖洞附近を射擊せり又虎山の高地にホッチキス機關砲二門を顯はせり元化洞高地に在りし我砲兵一中隊は虎山の高地に顯はれたる敵の高等司令部らしき者に對し三回の齊射を行ひしのみ

（其二）

（四月二十七日午後四時十五分發
同月同日午後十一時三十八分着）

二十六日正午より九連城の砲兵は義州附近を砲擊し近衞步兵第一聯隊の兵卒一流散彈の爲め負傷せり二十七日も亦時々砲擊す我砲兵は應射せず九里島に在りし第二十二聯隊乘馬斥候部隊長少尉セミョーノフの死體を九里島對岸にて發見し義州城内に埋葬せり細谷艦隊より差遣したる宇治、摩耶の二砲艦、二水雷艇、二武裝蒸汽船は中川海軍中佐の指揮の下に二十五日夕龍巖浦に入港せり其際宇治は安子山より敵の砲射を受けたり二十六日朝水雷艇一小蒸汽艇一は水深測量の爲め頻々城附近に進航せり艦隊は午後五時より同五十分まで安子山の敵と對戰し敵砲を沈默せしむ又其附近を通行する敵騎兵百を砲射せり海軍は損傷なし

（其三）

（四月二十八日午後三時五分發
同月同日午後九時二十五分着）

敵は靉河右島に沿ひ九連城以北に工事を繼續しつゝあり二十八日も又時々砲射しつゝあり二十六日九里島前岸に於て斃れたる敵の馬匹九十五頭外に生馬六頭を得たり

（其四）

（四月二十九日午後二時四十五分發
同月同日午後八時五十八分着）

昨二十八日近衞步兵第四聯隊の二中隊は偵察の爲め虎山に至り更に一小隊を栗子園に派遣す敵約三十同村の南端を防禦す我兵之を擊退す敵は死者五名を殘せり其隊號は狙擊步兵第二十二聯隊なり此時敵は揄樹溝東南端高地の砲臺より砲擊を始む我に損害なし九連城附近の敵の砲兵は時々大角度の射擊を行ひ其彈丸は九里島義州西湖洞弘北洞西方附近に落着し我攻擊準備作業を妨害し夜間と雖も時々發砲す然れども此効力は概して微弱なるものゝ如く我に損害なし本日も時々義州城内を砲擊す我は應射せず第十二師團は水口鎭の前岸に在りし微弱の敵を擊攘し今二十九日午後二時架橋を開始す

（其五）

（四月三十日午後九時五十分發
五月一日午前一時四十五分着）

一、第十二師團は今朝午前三時水口鎭に於ける架橋完成續いて渡河午後六時豫定の陣地に着く

二、野戰砲兵第二聯隊及重砲兵聯隊は未明迄に豫定の陣地に着午前十時四十分黔定島より中江臺に出したる我步兵斥候に對し九連城北方及び東方高地に在る敵の砲兵之に向つて射擊したる

を端緒として猛烈なる砲戰を開けり午前十一時十五分九連城の敵砲兵は沈默馬溝東方の高地に在る敵の砲兵約八門は九里島西方の架橋に向ひ射擊を續行せり我義州東方に附置せる近衞砲兵之に應ず約十分の後馬溝東方の敵砲兵又沈默す午後零時半兩方面の敵砲兵再び射擊を開始せしも我射擊の爲め一時二十分再び沈默せり我砲擊の結果敵に充分なる損害を與へたるものと認む

輕傷將校五、下士以下即死二、負傷二十二なり

三、鴨綠江本流の架橋は午後八時完成し諸隊は續々高地地方の高地に前進す

四、細谷艦隊の支隊は安東縣の下流に於て戰鬪に參與し就中裝砲汽艇は敵の砲兵及び步騎兵と最も激烈なる戰鬪を爲し步騎兵約四百を擊退せり

五、軍は豫定の如く明一日未明攻擊を實行せしとす

六、敵の砲兵は發射速度大にして其曳火線は確實に七千五百メートル以上に達す

●更に鴨綠江の砲擊

（敵の退却）

細谷第三艦隊司令官報告

中川摩耶艦長より左の報告に接せり

分遣隊は三十日午前八時出港豫定の如く行動し約二時間威嚇砲擊を爲す敵之に應戰す裝砲汽艇は安東縣下流に進み敵の步騎兵約四百と近距離に於て激戰し敵の砲隊も亦激しく我を砲擊せり約一時間の後敵退却せしを以て引揚げたり我幸にして損傷なし敵は多少の損害を受けたるものゝ如し

●第三次旅順閉塞の成効

東鄕聯合艦隊司令長官報告

艦隊は豫定の如く行動し五月三日午前三時四時の交を以て旅順口第三次の閉塞を決行せり閉塞船隊及之を掩護せる赤城（艦長海軍中佐藤本秀四郎）鳥海艦長代理（海軍中佐岩村團次郎）第二驅逐隊（司令海軍中佐石田一郎）第三驅逐隊（司令海軍中佐土屋光金）第四驅逐隊（司令海軍中佐長井群吉）第九驅逐隊（司令海軍中佐眞野巖次郎）第九艇隊（司令海軍中佐矢島純吉）第十艇隊（司令海軍少佐大瀧道助）第十四艇隊（鵲、眞鶴を缺き第六十七號艇第七十號艇を加ふ）（司令海軍少佐櫻井吉丸）は二日夕刻艦隊と分れ豫定航路を旅順口に向ひ前進せしが不幸にして午後十一時頃より南東の強風俄かに起り波濤高く爲めに閉塞船隊は離散し相失ふに至れり閉塞船隊總指揮官海軍中佐林三子雄は船隊の集合到底見込なきを認め閉塞事業中止の命を下せしも其信號通達せず午前二時頃迄通信に盡力せる間に船隊は相前後して既に旅順口沖に達せり然るに三河丸（指揮官海軍大尉匝瑳胤次）は港外を偵察せる第十四艇隊に對する敵の砲火を見て前續船既に港口に突進せるものと思考し直に港口に向て邁進し佐倉丸（指揮官白石葭江）と思はしきもの之に續く敵は港口附近に敷設せる視發水雷を發火し強力なる探照と猛烈なる砲火とを以て之を防禦せしも三河丸は港口防材の一部を破りて奧深く水道に闖入し中央の好位置に投錨爆沈し佐倉丸と思はしきもの港口尖岩の附近に投錨沈沒す之に次て遠江丸（指揮官海軍少佐本田親民）江戶丸（指揮官高柳直夫）小樽丸（指揮官野村勉）相模丸（指揮官湯淺竹次郎）愛國丸（指揮官）海軍大尉大塚太郎）朝顏丸（指揮官向菊太郎）も相次て港口に向ひ猛進す此時敵の防禦砲火猛烈を極め其敷設水雷は前後左右に爆發し閉塞隊員の戰死負傷するもの最も多かりしが遠江丸は港口防材に衝突し船首を東にし殆んど港口の半部を閉塞して其位置に爆沈し江戶丸は港口に達し將に投錨せんとする際高柳指揮官は腹部を射られて戰死し指揮官附海軍中尉永田武次郎直に之に代はり投錨を命じ次て爆沈せり小樽丸相模丸と思はしきものと亦港口に入り沈沒せるものゝ如く又愛國丸は港口より約五鏈の所に於て敷設水雷に觸り瞬時に沈沒し指揮官附內田弘、同關機長背木好

次以下八名行衞不明となれり朝顏丸と思はしきものは舵機損じたるものゝ如く港口に達せずして終に黄金山下に爆沈せり右八艘の閉塞船の内五艘は港口に入りて爆沈せしを以て港口は少くとも巡洋艦以上の通航に對し充分閉塞せられたるものと認む

今次の閉塞事業は天候の異變と敵の防備增大したるとに依り前二回のものに比し頗る慘烈を極め戰死負傷は甚だ多く特に小樽丸相模丸佐倉丸朝顏丸四隻の閉塞隊員は一も收容する能はず其最後の勇行さへ之を知るに由なかりしは遺憾至極なりと雖も其忠烈の事績は永く帝國の史乘に特記すべきものなりと信ず閉塞隊員の收容に從事したる各水雷艇隊驅逐隊は翌朝まで風濤と戰ひ敵に抗して能く其任務を盡し特に水雷艇隊は港口に接近して閉塞隊員の約半部を收容せり此雖擊中六十七號艇(艇長海軍中尉平眞雄)は敵彈に汽管を破られ負傷卒三名を出し一時敵前に於て進退自由を失ひしが其僚艇第七十號(艇長海軍大尉森本義寛)は之を救助して曳行せり又蒼鷹(司令兼艇長海軍中佐矢島純吉)も敵彈に左舷機を傷けられ卒一名戰死し隼にては下士一名戰死せり其他驅逐艦水雷艇には一も損傷なし

第三戰隊(司令官海軍少將出羽重遠)は三日午前六時第一戰隊(司令長官海軍中將東鄕平八郎司令官海軍少將梨羽時起)は午前九時旅順口港外に達して驅逐隊水雷艇を掩護集團し午後四時まて各方面に分れて閉塞隊員の搜索收容に盡力せしが終に得るところなかりし此日霧氣頗る深く爲めに敵狀を見ること能はず夜に入り我艦隊は各其集合地點に引上げ四日朝より更に豫定の行動を續行せり

●第三艦隊の第二軍上陸掩護

五月五日午後六時二十五分前進根據地發電片岡第三艦司令長官報告の要領左の如し

昨四日第三艦隊集合地を發し豫定の如く行動し今五日第二軍第一梯團を前進根據地に護送し唯今陸軍兵を掩護揚陸中なり支那船頭の言に依れば陸上の敵兵は約百を出でざるものゝ如し

加賀丸は昨四日午後三時頃第三艦隊集合地附近に於て坐洲せしも秋津洲の助力に依り浮き出で五日午後五時無事前進根據地に到着せり

五月六日午後十時前進根據地發電細谷第三艦隊司令官報告の要領左の如し

我第七戰隊第二十水雷艇隊及び香港丸日本丸の二隻は豫定の如く五日午前五時三十分遼東半島の前進根據地に着す敵の監視兵らしきもの數名其沿岸丘上に居るを認めたるを以て少時之を砲擊したる後野元海軍大佐の率ふる陸戰隊の上陸を命じたるに時恰も干潮に會し端舟陸岸に着する能はざる爲め皆身を跳して海中に入り水深臍に達するところ約千米突の間を徒涉して午前七時二十二分陸に上り直に前進したるが終に一彈を發せずして高地一帶の地を占領し日章旗を其絕頂に樹立せり之と同時に赤城大島及び鳥海をして上陸點側方の陸岸に接近し牽制行動を取らしめたるに赤城は百餘名の敵兵を發見し直に之を擊攘して其二三を斃したるものゝ如し

陸軍輸送船隊第一梯團は午前八時五分日章旗の高地に翻へるを見て直に揚陸を開始したるに齊しく深水を冒して最も活潑に上陸し尙ほ目下從ゝ進捗を計らんか爲め棧橋架設中にして我戰隊は余力を以て是等作業の援助に從ひつゝあり

◉鳳凰城の占領

黑木大將報告

一、五月六日我騎兵斥候は鳳凰城東北に於て敵の騎兵を擊驟し死者三名負傷者數名を生ぜしめたり

二、同日又た我騎兵は二台子、三台子、四臺子の敵を擊退し步兵の一部隊を以て鳳凰城を占領せり報告に依れば遼陽街道沿道の家屋は多くは燒失せられたり

三、敵の退却途上に人馬逃走したる衞生材料遺棄しありたるを以て之を當軍に收容し彼我傷者の治療に使用し又た敵の衞生部員數名は其の希望

に依り之を敵傷者の救護に使用せり

四、敵は鳳凰城退却の際彈藥庫 火藥庫を燒き たり七日に至るも 森林及び村落内等より出て來り我に投降する敵の敗軍兵猶々として絕へず又た敵自ら埋葬したる墓地も尠からず 土人の言に依れば去る二日擔架にて 鳳凰城を通過せし敵の負傷は約八百なりしと 之に依りて見れば敵の損害は確に三千以上なりしならん

●旅順交通斷絕

遼東半島軍報告

我一支隊は五月六日 少數の敵を擊退して普蘭店を占領し 鐵道電線を破壞して旅順との交通を切斷せり

●大連灣の掃海開始

敵の隱匿電信破壞

第四十八號艇敵水雷に觸る

昨十二日大連灣の障碍なる大窰口方面に出動せる片岡第三艦隊司令長官報告の要領左の如し

十二日午前七時四十五分艦隊 大窰口沖に達して解列嚴島、日進、宮古 は陸上の威赫砲擊を行ひ第二、第六、第二十、第二十一の四水雷 艇隊は海面の掃海を開始せり

第十二水雷艇隊は十一日夜 旅順口封鎖に從事し今朝八時三十分大窰口外に 來會直に測量に從事し其間煤窰附近に現はれたる 敵の歩兵約一中隊騎兵約五十を砲擊擊退せしに敵は 二三の監視哨を止めて我動作を候ふもの丶如くなりしも 敢て發砲せざるを以て 午後三時無事測量を結了せり第四十七號第四十四號 の兩水雷艇は大窰口內西岸に沿ふて 敵狀を偵察しつ丶掃海を行へり然るに太沽山半島八三〇呎山の北々 西山麓を通過する電線を發見したるを以て 砲擊掩護の下に海軍少尉坳田文雄は 下士卒四名を率ゐ艇用端舟にて上陸し 電柱五本を破壞し其電線を奪ひ歸れり土民に詭き大沽山の麓に九十五、 徐家山方面に一百(?)尙ほ其內方に一千の敵あることを 聞知し煤窰の東方約二千二百米突に進航して 陸岸を砲擊せしに後家山と五五〇呎山との 中間より敵の步兵約二百現はれ 前進し來れるを以て其近接を待ち砲擊せんとせしに敵は海岸を 距る 數百米突の地點に據り敢て前進せす 暫時にして敵の騎兵十一 煤窰の南西方約二千米突 に現はれたるを以て之を砲擊遁走せしめたり 我に死傷損害なし

宮古は深灣に進入しロヒンソン角 の北西八〇〇呎山に敵の哨所あるを發見し 之を砲擊破壞したり敵は其後方に約十小隊伏在し居りたるも 共に狼狽遁走せり

第四十八號第四十九號の 兩水雷艇は大窰口東岸に沿ふて掃海中 午前八時黑嘴子の南々西二分一西約八鏈の地に於て 敵の機械水雷を發見し百方之が爆沈を勉めしも其効なきを以て艇を後退せしめ更に爆沈を試みんとして 作業中正午過二十七分該水雷俄然猛烈なる爆發をなし爲めに 第四十八艇は兩斷し約七分時にして沈沒の不幸を見るに至れり 各艦は直に救助艇を出し附近にありし水雷艇と共に 其救助に盡力せしも終に十四名の死傷者を出すに至りしは實に遺憾に堪へず 黑嘴子と沙砣との結線上に於て 前記の外尙ほ機械水雷三個を發見し之を爆沈せり

艦隊は午後六時一ト先 先作業を中止して集合地に歸港せり此行動中各艇隊は艦隊掩護 の下に危險を冒し掃海及測量を遂行し 且つ敵を擊攘して其交通機關を破壞し多少陸上 の防備を偵知し得たるも不幸にして第四十八號水 雷艇は敵の機械水雷の爲め沈沒す

●大連灣附近掃海の續行

宮古艦水雷に觸る

第三艦隊司令長官片岡七郎より大本營に着せる電報の要領左の如し

第五戰隊及第二水雷艇隊(第四十五號艇を欠く)は五月十四日早朝大窰口沖に至り 我艦隊掩護砲火の下に聯合掃海艇を放ちて掃海を續 行す敵は去る十二日ロビソン角九〇〇呎の 高地に在りた

る監視哨を撤退したるもの丶如くなりしも大沽山北東六三〇呎山の北東側に新に假設砲臺を急築して野砲約六門を備へ又同山の東側に掩堡を設け步兵約一中隊を那備する等應急防備に努めたるもの如く終日頑强なる抵抗を爲せり

此日掃海艇隊は終日敵の機械水雷敷設面內に於て敵の砲擊火を冒し能く其任務を遂行し水雷五個內三個を擊沈し他の二個を破壞し又我艦隊の砲火は陸上の敵に多少の損害を被らしめたり

然るに午後四時三十五分作業を中止し掃海艇を收容せんとするに當り敵の機械水雷不幸にも宮古の左舷艦尾に觸れ轟然爆發して艦體に大破を被らしめ死傷者八名內戰死下士卒二を出し艦體も亦二十三分時の後沈沒す

●悲むべき變災

初瀨、吉野の沈沒

東鄕聯合司令長官より軍艦初瀨及び吉野遭難に關し大本營に達せし報告の要領左の如し

其一

五月十五日午前十時五分大本營着電

本職は茲に三度不幸なる變災の報告を進達するを遺憾とす十五日午前五時千歲出羽司令官よりの無線電信報告によれば本日午前一時四十分頃第三戰隊は旅順口封鎖の任務より歸航中山東角の北方海面に於て濃霧に遭ひ春日は吉野の左舷艦尾に衝突し吉野浸水甚しく終に沈沒せり春日より出したる救助艇にて收容されたる者機關長以下約九十名なりと濃霧未だ霽れず痛心に堪へず

其二

五月十五日午後六時大本營着電

本日は海軍に在て最大不幸の日にして茲に又最も不幸なる報告を進達する止むを得ざるに遭遇せり初瀨、敷嶋、八嶋、笠置、龍田は本日午前十一時頃旅順口沖にて敵を監視中初瀨は敵の水雷に觸り先づ舵機を破られ初瀨より曳船送れの電信に接したるを以て將に之を發送せんとするとき更に敷嶋より初瀨は第二の水雷に觸り終に沈沒せりとの悲報來れり本職は之を報告するに臨み只だ遺憾至極と云ふの外なし善後の處置に就ては夫々出來得る丈けの手段を盡し災厄を增大せざるに努め居れり當地附近濃霧未だ霽れず

其三

五月十五日午後十時三十分大本營着電

敷嶋は初瀨遭難狀況報告の爲め今當地に歸港しつゝあり驅逐隊全部及び三個水雷艇隊は敵の驅逐隊に當り且つ溺者救助の爲め午後一時三十分當地を發して旅順口方面に向へり霧未だ霽れず

其四

五月十六日午後四時三十七分大本營着電

初瀨が敵の水雷に觸り老鐵山の南東約十海里の所にして當時同方面には霧なく其附近に敵の驅逐艦もあらざりしと云ふ此事實より判斷する時は敵は其附近に機械水雷を沈置したるか或は又潛水艇を利用したるものならん初瀨は約三十分間を隔て二回の被害にて瞬時に沈沒したるも敷嶋、八嶋、笠置、龍田等にて梨羽少將中尾大佐以下三百名を救助收容せり初瀨の沈沒の頃敵の驅逐艦十六隻旅順口內より出て來り我を追尾せしが會々其地に來りし明石千代田秋津洲大島赤城宇治及高砂ば前記諸艦と協力して之を擊退し初瀨生存者の收容を果すことを得たり以上の報告は混信の爲め文意不明瞭なるも無線電信は今朝遭難報告の爲め龍田の少尉並に八島の艦載水雷艇指揮官の口頭報告等を綜合して製作したるものなり當地近傍霧未だ霽れず

其五

五月十八日午後五時四十八分大本營着電

昨朝濃霧霽れ各隊遂次入港す其報告により初瀨は全く敵の機械水雷に觸りしものなることを確かむることを得たり

●軍艦初瀨戰死者人名

第一艦隊參謀　少佐　塚本善五郎
副長　中佐　有森元吉
分隊長　少佐　子爵　仁禮景一

分隊長心得　中尉　秋山米吉
乘組　少尉　小林良人
同　同　松原弘綱
同　同　今井興孝
同　同　松崎忠一
同　同　園田藤一
分隊長　大機關士　山賀代三
分隊長心得　中機關士　大石親德
乘組　大機關士　山下重孝
同　同　佐藤道久
同　同　三島春江
軍醫長　軍醫中監　關文之助
乘組　中軍醫　上宮繁吉
同　少尉候補生　鈴木亘音
同　同　小林精之助
同　同　田中稔
同　同　內山發一
同　同　澁江頁次郎
同　同　原田準太郎
同　少機關士候補生　永原和衛
同　同　和田村八
同　同　横田英
同　同　池野龜之助
同・　長曹長　佐藤捨藏
同　同　岡崎喜代彥
同　上等兵曹　有川良光
同　船匠長　田中治三郎
同　機關兵曹長　天財喜重郎
同　上等機關兵曹　河添幸作
同　同　田所竹藏
同　同　河內由太郎
同　看護師　吉田義行
同　上等筆記　齋藤龜彥

下士以下略す

●軍艦吉野戰死者人名

艦長　大佐　佐伯閑
副長　少佐　廣渡顯一
航海長　大尉　竹內兼藏
砲術長　同　末松兵市
分隊長　同　黑澤鴻藏
分隊長心得　中尉　小林幾之助
乘組　少尉　曾布川新平
同　同　市岡海三
同　同　久繼理一
同　同　松崎正明
分隊長　大機關士　竹內三千三
同心得　中機關士　島村吉次郎
同　同　利府齊
乘組　少機關士　土井弘
同　中軍醫　日下亮平
主計長　大主計　弘瀨鶴馬
乘組　少尉候補生　小島高彥
同　同　近藤錄吉
同　同　宮城胖
同　同　迎爲次郎
同　同　村田熊猪
同　少機關士候補生　石田流芳
同　同　新具岩吉
同　同　伊藤卓二
同　掌砲長上等兵曹　村尾保太郎
同　掌水雷長同　井上武市
同　船匠師　藤木光次郎
同　上等機關兵曹　山田龜楢
同　同　下元庄馬
同　同　飯田林太郎
同　同　中川鍬一
同　同　小森孝教

下士以下略す

●金州城外の戰報

大本營着電

十六日金州北方十三里臺の戰鬪に參與せし敵は、速射砲八門を有し步兵の數は詳なるも狙擊步兵第五第十四第十六聯隊の各一部にして戰場に將校以下三十の死體を遺棄せり捕虜の言に依れば敵の死傷は三百以上なりと我衞生隊の收容せし

敵の傷者は將校一下士以下五名なり 捕虜の言に依れば金州半島に在る敵は歩兵第四師團の大部及び歩兵第七師團の全部にしてステッセルは防禦司令官として半嶋に在り アレキシーフは本月始め奉天に向つて去れり 又旅順には我海軍將校一下士卒三十擊留し在りと云ふ

●肖金山の敵情偵察

五月二十日大本營着公報

遼東上陸軍の歩兵隊より出せし山田大尉は部下一小隊を率ゐて金州東方肖金山の敵情偵察をなせしに其北方に於て 敵の歩兵約二小隊と衝突約三十分間激戰の後 敵兵を擊退したり此戰鬪に於て小野寺少尉外下士卒四名戰死し 山田大尉外下士卒八名負傷せり 敵の死傷は將校一下士卒約四十乃至五十名なり

●蓋州角の砲擊金州灣の掃蕩

五月十九日午後九時二十分大本營着電

蓋平方面砲擊に關する東郷(中將)司令官報告の要領左の如し

本職は明石秋津州千代田須磨大嶋赤城宇治及び第十四水雷艇隊を率ゐて 十五日早朝出發し正午前旅順口沖に至りし時 初瀬が二回敵の機械水雷に觸れ沈沒せるの報に接したる を以て先づ大嶋宇治及び水雷艇隊をして 豫定の行動を續行せしめ他の諸艦を以て數嶋八嶋笠置等と共に 敵驅逐隊の我に向つて來襲せんとするものを擊退し又初瀬乘員收容の掩護を爲せり 夕刻に至り我戰隊は旅順沖を去り豫定行動を爲し 渤海灣に進入し塔山附近に近づき蓋州角附近一帶の沿岸を偵察し陸上多少の敵兵あるを認め之を 砲擊逼逃せしめたり

十七日午後我戰隊は掃海を行ひ金州灣に進入し砲艦をして灣頭に進み 鐵道架橋及び恰も此時通過せんとせる運兵列車其他敵の建設物 を砲擊せしむ其結果何れも多少の損害を與へたるものと認む

●我軍大孤山に上陸す

五月二十日大本營着公報

我軍の一部五月十九日を以て 大孤山附近に上陸を開始せり

●艦隊の上陸掩護

細谷第三艦隊司令官報告五月二十日大本營着電

本職は扶桑、平遠、筑紫、濟遠等を率ゐ 陸軍輸送船隊を護衛し今十九日午前六時新上陸地點 に達す

先づ軍艦盤城をして陸岸の搜索 砲擊を爲さしめ續て武光海軍大尉の率ゆる 我陸戰隊をして上陸せしめたるに敵の抵抗を受くることなく 午前八時目的地點の占領を遂げ 國旗を其高丘に樹立せり是に於て直に陸兵の揚陸を開始したるに 近來稀有の好天氣に會し事業の進捗意外 に著しく本戰隊極力是に援助しつゝあり

●旅順口强行偵察

五月二十日午後十一時五十五分東郷聯合艦隊司令長官より大本營に達せし報告の要領左の如し

砲艦の一隊及び驅逐艦水雷艇の數隊は 二十日午前一時旅順港口に迫り要塞の猛烈なる 十字砲火を冒し强行偵察を試み 其目的を遂し天明に至り引揚げたり 砲艦隊に多少の被彈ありしも著しき損害なく又死傷者なし

●浦鹽艦の坐礁

公報

五月廿日大本營に達したる確なる 情報に依れば在浦鹽斯德露國艦隊中最大快速力 を以て有名なる巡洋艦ボガチール (六、六七五噸) は浦港々外に於て霧の爲め坐礁破壞されたりと云ふ

●宗教家大會

都下の基督教、佛教、神教等各宗教 各教派の代表者及び關 係者二十九名によりて發起せられ、各階級各團體の代表者百三十餘名により 贊成せられたる大日本宗教家大會は五月十六日午 後二時芝山内忠魂祠堂會館に於て 開會せられたり。當日の來會者無慮 二千名、 各人が無上の滿足と

誠意とを以て擧行せられたる、我が國宗教史上の新事例と稱すべく、之れを以て如何に我が國の宗教が信仰の自由を有すと共に他面に於てまた日本國土と宗教の信仰とを一致融合せしめたものなるかを推了すべし。大會の宣言は左の如し

宣言

日露の交戰は日本帝國の安全と東洋永遠の平和とを計り世界の文明正義人道の爲に起れるものにして毫も宗教の別人種の同異に關する所なし故に吾儕宗教家は宗派人種の異同を問はず此に相合し各自公正の信念に愬へ相與に奮て此交戰の眞相を宇内に表明し以て速に光榮ある平和の克復を見んことを望む

右決議し之を中外に宣言す

明治卅七年五月十六日

大日本宗教家大會

●北條時宗の贈位

我が　陛下には故北條時宗の偉功を御追念ありて十七日左の如く贈位の御沙汰ありたり周布神奈川縣知事勅命使として鎌倉圓覺寺の墓前に參向す

贈從一位（特旨を以て位階追陞せらる）

故正五位下相模守　北條時宗

●内務省と失職勞働者救濟

近頃時局の影響を被り都鄙を通じ失職勞働者の數益々增加の傾向を來たせしに依り内務省地方局にては之が救濟策に關し種々調査中の趣なるが左の佛國巴里市立勞働紹介所の組織概要を各地方長官に參考として配布せり

佛國巴里市立勞働紹介所の組織概要

今や時局の影響として失職勞働者救濟の事漸く社會の一重要問題たらんとす此時に當り其施設の整備遠く他に冠絶するものありと稱せらるゝ巴里市立勞働紹介所の如き亦參考に資すべきもの尠なからざるべし即ち左に其組織の概要を紹介す

一巴里市立勞働紹介所は千八百八十年代に於て雇人口入業者の弊害を殄滅し勞働の分配をして其宜しきを得せしむる目的を以て起れり其後千八百九十三年七月一時閉鎖を見るに至りしも同九十五年更に商工務大臣ムシユーラー氏の建議に因り勅令を以て之を再始し以て今日に至る其建物の如き實に三百萬法を投じ頗る宏壯を極む

巴里勞働紹介所は所内に無償の雇人周旋局（我國の所謂桂庵事務を取扱ふ）公開雇傭室（雇主、勞働者等自由に集來して直接に勞働の取引を行ふ）を設け又勞働の需要供給に關する一切の報告を公示するの各般の手段を盡し以て勞働の分配をして敏活佳良ならしめんことを期す其他紹介所には勞働者組合の自由に委せられたる多種の部室及び團體的集會の用に供すべき大室を附屬せしむ

一法律の規定に從ひ適當に組織せられたる勞働者及び使用人等の職業的組合は紹介所内に一室を占有し其同業者の爲めに無償の雇人周旋局を設くることを得

一組合にして紹介所の一室を占有せんと欲するものはセーヌ縣知事に出願し知事は豫じめ巴里市會の決議を經たる規定に準據し其許否を決す

一紹介所内に於ける組合は全く自治にして其室内の取締集合會議及び雇人周旋局の組織執務等に關し必要なりと信ずる一切の事項を規定す

一公開雇傭室は一切の雇主及び一切の職業に屬する勞働者使用に對して公開す故に苟くも勞働者の必要を感じ若くは雇主を求めんと欲するものは何人を問はず自由に集來することを得

一紹介所の一大室を團體的集會及び職業的集會の使用に供し以て勞働者の職業的及經濟的利益の研究防護を爲さしめ且勞働に關係ある儀式の執行所たらしむ

一市は紹介所内に無償の雇入周旋中央局、勞働統計局を設け年鑑を作り且つ勞働及び勞働者の雇傭に關する一切の報告、廣告等を包容せる雜誌を發刊す市は又紹介所内に圖書館を設け講筵及び討論會を開く

一市の此等の施設は總て公開なるを以て一切の勞働者は其組合を爲すと否とを問はず自由に統計局、周旋局、圖書室、講筵場及び討論室に出入するを得

一セーヌ縣知事は紹介所々屬の一切の吏員を任免し建物の監督管理を司り豫算支出の狀況決算の當否及び紹介所に關する勅令規則等の遂行を監督す

一市會は勞働紹介所の組織に關する千八百九十五年十二月七日の勅令に準據して紹介所の内務行政及び事務執行に關し必要なる一切の方法を定む

一紹介所に二十人を以て組織せる顧問委員會を置く内十人は紹介所に部室を有する組合之をを選出し六人は市會議員中より市會之を推薦し二人はセーヌ代表者にして知事之か指命し尙は他二人は勞働局代表者にして商工務大臣之を任命す

委員の任期は之を一年とし委員會は商工務大臣に於て之が解散を命ずることを得

一委員會は紹介所の業務執行及び内部行政に關する一切の問題に對しセーヌ縣知事の諮問に答へ且つ左の事項に關し知事に建議することを得而して知事は更に之を市會の議に付す

一組合の部室占有許否

二部室の分配

三集會室に關する規則

四年鑑及雜誌の公刊

五紹介所に提出せる勞働者其他の請願及び要求

一紹介所各年の支出豫算は委員會の議定に付す

●金州城の占領

金州附近に於ける敵の陣地攻擊に關し該攻擊軍司令官の大本營に報告したる要領左の如し

其一

五月二十一日午後一時着電

金州附近の敵は時々緩慢なる射擊を行ひ我を誘致せんとするものゝ如し目擊する所に據れば金州南山には十五珊以上の榴彈砲四門、九乃至十五珊舊式加農十門、十二珊速射砲二門あり尙ほ大なる野戰砲あるも備砲不明なり山上には少なくも十個の砲壘或は堡壘あり其首線は北方及び東北方に向ひ鐵條網及び地雷も北麓及び東麓に在り

前記砲の種類員數は敵の射擊に依り偵知せしものなり又彈片に依り判ずれば十珊五及八珊五の舊式砲あり十珊九の彈丸は八千五百メートルに達せり

其二

五月二十二日午前着電

攻擊軍は本日(二十二日)豫定の運動に就く

其三

五月二十三日午前着電

攻擊軍の金州に向ふ前進は豫定の如く實施しつゝあり

其四

五月二十四日午前着電

攻擊軍は本日(二十三日)九里庄、陣家屯、寒子河の線の後方に集合し參謀將校をして敵の陣地の偵察を爲さしめ又本夜(二十三日)より明日に渉りては砲兵陣地及び其の進入路の偵察を爲さしむ

其五

五月二十四日午後着電

本日(廿三日)爲したる偵察の結果左の如し

敵の右翼和尙島には約八門の重砲海に面しあり砲種不明其内若干門は東北爲家屯方向を射擊することを得

柳樹屯附近には大なる倉庫あり

南關嶺の東方高地線には短小なる敵の散兵壕の如きものを見る

九里庄南方後營左營洋砲營には探照燈ありて我陣地を照明す

今日迄敵の發射せし砲彈の破片に依れば廿珊砲十五珊短加農、十珊加農、八珊六加農、七珊六速射砲等なり又本日偵察將校に向ひ除家山砲臺に向て砲擊せり砲彈は曲射砲にして其口徑九珊位なり

南山の東側閻家屯の附近より山の北麓を經て四北に曲り劉家店の東北約千メートル迄は一面に鐵條網あり之より左翼には防禦工事を見ず

金州には依然少許の步砲兵あり

其六

五月二十五日午前特發

艦隊よりの通報に據れば艦隊の一部は明二十五日我軍の攻擊に連係して金州南方南山を攻擊すべしと

其七

五月二十六日午前着電

攻擊軍は本日(二十五日)豫定の如く第一線を龍王廟、三里庄、陣家庄、王家屯の線に進め午前五時半頃より同九時に涉り金州を攻擊し又南山の敵砲と交戰す金州附近の敵情に變りなく敵砲兵は盛に我隊を搜射し目下尙ほ時々我を砲擊中なるも我が損害大ならず軍は明朝金州南山の敵を攻擊せんとす、軍の攻擊に連係して金州附近を砲擊すべき艦隊の一部は本日來らず

其八

五月二十六日午後着電

彼我の砲戰は二十六日早朝より約五時間に涉り其間我艦三艘も金州灣に至り我に協力し又敵砲艦一艘は大連灣に在りて我が左翼を砲擊す而して今や砲兵戰酣にして金州のみは午前五時二十分我が有に歸したり

其九

五月二十七日午前四時着電

攻擊軍は二十六日激戰の後南山を占領し目下敵を追擊中

●南山の大激戰

五月二十七日午後大本營着電

金州攻擊軍報告

軍は本日(二十六日)午前五時二十分金州城を奪取したる後南山の敵を攻擊し先づ露天堡壘の砲兵を沈默せしめ午後七時遂に該山を占領せり敵は南山の堡壘砲臺を圍繞するに掩蓋を有する塹壕を數層に構築し堅固の副防禦と嶄新の兵器を有して頑固の抵抗を試み我軍の行ひたる數回の突擊も功を奏せず午後三時最後に行ひたる突貫に屈して遂に其陣地を棄てゝ南關嶺方向に退却し金州の一部大房身の停車場は敵の地雷の爲め破壞せられたり我將卒は本日(二十六日)能く約十六時間の激戰に堪へ猛烈なる銃砲火を犯して敵陣に突入したるの勇氣は特に之を報告す此攻擊に我軍艦四艘參與し敵砲臺の砲擊に有力なる援助を與へたり

●艦隊の金州灣砲擊

東鄕聯合艦隊司令長官報告

五月二十七日午後一時二十五分大本營着電

今當集合地に歸航しつゝある內山分遣艦隊指揮官よりの無線電信に據れば分遣艦隊(筑紫、平遠、赤城、鳥海並に第一水雷艇隊)は一昨二十五日午後六時金州灣に達し二十六日黎明より第二軍に協力して蘇家屯高地の敵壘を砲擊し就中赤城、鳥海の二艦は其淺吃水を利用して終日戰鬪に從事せり午前十一時に至り敵は蘇家屯の高地より退却せしも尙其後方收容陣地より發砲を繼續し我陸軍は夕刻迄敵壘に迫るを認めざりしも午後八時頃之を占領するを見たり我艦隊の損害は戰死鳥海艦長林三子雄外死傷九名にして艦船には差したる損害なし

●南關嶺の占領我軍の大勝利

五月二十八日午前大本營着電

金州攻擊軍報告

軍は今朝(二十七日)午前十時三十分中村少將の指揮する一支隊(步兵砲兵及び工兵より成る)を派遣し南關嶺を占領し主力は本日南山附近の諸部落に宿營し諸隊の整頓を謀り準備出來次第豫定の線に向つて前進せんとす

敵は旅順方面に退却し其一部は今朝三十里堡(南泥窪西北方)の停車場を守備しありしが午前十時頃同停車場を燒て旅順方向に退却せり昨二十六日の戰鬪に於ける戰利品の重なるものは大小口徑砲約五十門敵の遺棄せし死者のみにても約四百我死傷約三千五百

上條辰藏君詳解

ヒックウヰックペーパース

總クロース金字入美裝◎用紙好良印刷鮮明◎挿畫數多
◎紙數約四百頁◎正價金七拾錢◎郵送料金八錢

チャールス、ヂッケンスが一代の傑作たる本書が**英文壇の寶典**として普く世人に推重せらるゝ事は何人も知る處なるが、趣向の奇絶なる滑稽の妙を極め殆ど我國の**膝栗毛を凌ぎ**一讀人をして捧腹絶倒せしむ**精細を極めたる註解**は原文の三倍以上に及び**故事、熟語、俗語、文法**等に渉りて遺漏なきのみならず、其必要なるものに至りては是れが**應用の方法**をも解明せられたり。故に本書は**ヂッケンス研究の關鍵**たると共に一面は惜に好個の**英作文、文法研究の資料**なれば一般英學者の一讀せられん事を望む

小島烏水君序　河井醉茗君題詩　千葉江東君新著　一條成美君書

いざさらば

用紙好良
印刷鮮明
正價金拾錢
郵稅金四錢

故鄕、故鄕、爾はげに好絶**詩題**なるかな、古來幾多の詩客を促して、杼情の筆を執らしめし爾は、今更に濃情多感の作者を刺激して這の一篇**無韻**の**哀詩**を作らしむ。事は秋雨そほしふる客窓の夕遊子故鄕の荒廢を、故鄕の舊友に聽くに起り、ふる里の山川よ**いざさらば**一盞の管笠を傾けて長く故鄕の空を離るゝに終る。一篇具さに作者の熱情を傾注し盡して**感愴縱橫、凄哀無限、**秋風盡きせざるの恨を吹いて白く人をして聲の悲しきに堪へざらしむ

發賣所　東京市神田區裏神保町　**上田屋書店**

投稿規定

毎月十八日を以て編輯締切日と致し候に就き何卒それまでに着する樣願上候猶投稿諸君は**住所記入**を御忘れ無き樣被成下度候宛名は**東京市本郷區駒込西片町拾番地反省社**

書籍の取次

愛讀者諸君の便宜を計りて今後本社にて**書籍の取次**を致し候東京市内にて發行の書籍は總て正確迅速に取次可仕候に就き申込の諸君は書名著者發行所等を認め代金及び遞送料を前金にて御送り被下度候

中央公論 定價表

	定價	郵税共
一冊	金拾貳錢	金拾参錢
六冊	金六拾五錢	金七拾壹錢
十二冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓卅貳錢

中央公論 廣告料

一行(五號文字二十四字詰)	一回	金貳拾錢
四分の一頁	一回	金貳圓五拾錢
半頁	一回	金四圓
一頁	一回	金八圓
表紙の二三四一頁	一回	金拾五圓

廣告一手取扱 博報堂

送金注意

一郵便爲替は受取人指定欄へ必ず弊社町名幷に社名を拂渡局所を**東京駒込**局と指定せられたし弊社印鑑は駒込支局へ差出有之候に付決して途中にて盜取せらるゝ憂なし

一郵劵代用の塲合は必す壹割增のこと

一誌代、廣告料とも總て前金にあらされは御需めに應せす

一前金切の節は帶封に朱書いたすべくに付早速拂込まれたし然らされは其號限にて發送を止むべし

一雜誌の發送を以て領收の證といたすべくに付別に領收證を望まるゝ向は返信料を添えられたし

一御拂込み金額の端金の塲合には左表に準し御勘定可致に付御注意相成たし

一金七拾壹錢以下 一部金拾参錢の割

一金壹圓参拾貳錢以下 一部金拾貳錢の割

都下大賣捌所

神田表神保町	東京堂
神田裏神保町	上田屋
本鄉四丁目	文明堂

明治三十七年五月三十一日印刷
明治三十七年六月一日發行

發行兼編輯人 武田福松
印刷人 清水金右衛門

發行所 東京市本鄉區駒込西片町十番地 反省社 (電話下谷九一九)

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 秀英舍第一工塲

中央公論（毎月一回　明治三十七年六月一日發行）

明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可

發行所（電話下谷九一九）東京市本郷區西片町十番地　反省社

No. 183.